

# 2024・第27代高校生平和大使 帰国報告



スイス ジュネーブ  
2024年8月18日～24日

# 目 次

1. 第27代高校生平和大使の成果 団長 小早川 健 .....	3
2. 第27代高校生平和大使欧州・国連派遣活動日誌 .....	4
3. まとめと感想	
1 高佐 安里 .....	9
2 皆川 舞奈 .....	10
3 佐藤 凜汰朗 .....	11
4 畠山 史子 .....	12
5 長澤 華咲 .....	13
6 半谷 優亜 .....	14
7 田口 七望 .....	15
9 萩 有彩 .....	16
10 西脇 あかり .....	17
11 谷河 優那 .....	18
12 稲中 瑞希 .....	19
13 細谷 美優花 .....	20
14 藤本 波音 .....	21
15 甲斐 なつき .....	22
16 佃 和佳奈 .....	23
17 沖本 晃朔 .....	24
18 杉森 世都 .....	25
19 吉田 光里 .....	26
20 平野 陽路 .....	27
21 花崎 太智 .....	28
22 大原 悠佳 .....	29
23 津田 凜 .....	30
引率スタッフ .....	31
・小早川 健(団長)・青木 栄(副団長)・千葉 伸武(事務局長)	
・仁木 史絵(事務局補助)・藤本 絵梨華(会計・救護)	
・山本 圭介(全体掌握・記録)、梅田 侑希(全体掌握・記録)	
4. HIROSHIMA NAGASAKI PEACE MESSAGE	
(1) フルスピーチ原稿 .....	37
(2) 国連軍縮部リレースピーチ .....	85
(3) レジンバル所長スピーチ(抜粋) .....	103

5. 軍縮会議日本政府代表部主催レセプション	
(1) レジナル所長あいさつ	105
(2) 第 27 代高校生平和大使代表あいさつ 沖本 晃朔	107
(3) 日本政府代表部主催レセプションの記録(各グループの記録)	109
6. 訪問先	
(1) GCSP (ジュネーブ安全保障政策センター)	122
(2) UNIDIR (国連軍縮研究所)	123
7. 「第 27 代高校生平和大使」旅程(2024 年)	125
8. 「第 27 代高校生平和大使」一行名簿	126

# 1. 第 27 代高校生平和大使の成果

小早川 健

第 27 代高校生平和大使は欧州訪問を終え帰国いたしました。大きな成果を上げることができました。多くの皆さんのご支援に感謝します。

## 第 27 代高校生平和大使の成果

### 1 活動の広がり と 議論の広がり

今回は新たに GCSP（ジュネーブ安全保障政策センター）と UNIDIR（国連軍縮研究所）を訪問した。核兵器廃絶と平和な世界の実現に向けて多様な議論ができた。また、軍縮会議日本政府代表部主催レセプションでは、外交官やジュネーブ大学の若者などと交流ができ、多様な議論をするとともに、平和を希求する若い仲間の存在を感じ、活力を得ることができた。

### 2 高い評価

軍縮会議では高校生平和大使が紹介され、各国からも歓迎の声が上がった。

国連軍縮局でもメラニー・レジナルド国連軍縮部ジュネーブ事務所長からは、「あなたたち若者の活動は私たちに勇気をくれる。また、私たちに緊張感を与えてくれる。核軍縮を実現するためにはあなたたちの力が必要だ。」との高い評価を受けた。

日本政府代表部主催のレセプションでは、高校生平和大使によるスピーチが感動を与え、核兵器の廃絶を世界に訴える場となった。

### 3 署名の提出

国連軍縮部では高校生平和大使全員がスピーチするとともに、署名 96, 428 筆を提出した。メラニー・レジナルド国連軍縮部ジュネーブ事務所長は高校生平和大使の取り組みを高く評価し、この署名をグレーテス事務総長に渡すこと、また、この署名は私たちが活動を続ける原動力となると述べた。

### 4 高校生の熱意が多くの人々の心を動かす

高校生は熱く主張をし、熱心に交流をすすめました。この熱い思い、熱心

さが高校生平和大使の評価を高め、多くの人々に感動を与えた。

## 5 核兵器廃絶の思いを強める

多くの人々と意見交換をする中で、高校生は核抑止論が根強く存在することを改めて感じた。しかし、その現実にはひるむことなく、だからこそ若者が核兵器の廃絶と平和な世界の実現に向けてさらに活動を強めるのだという思いを強く持つこととなった。

## 2. 第27代高校生平和大使 欧州・国連派遣活動日誌

### 1 軍縮会議日本政府代表部訪問（8月19日）



表敬訪問では市川とみ子大使と核兵器廃絶をはじめとする軍縮の動きについて議論を行った。高校生平和大使からは「核兵器禁止条約を批准しない理由」「オブザーバー参加さえもできない理由」「核先制不使用に反対したのはなぜか」などと様々な質問を行った。市川大使は日本政府も核兵器のない世界をめざしていると回答しながらも、日本政府の立場を回答するにとどまった。

### 2 国連周辺の見学

代表部訪問後、国連周辺の見学を行い、地雷やクラスター爆弾を批判するブロークンチェア、マルセル・ジュノー博士の記念碑などを訪れた。







### 3 ミーティング・スピーチ練習

空港の乗り継ぎ時間にもスピーチ練習、滞在初日の夜から毎晩、ミーティングとスピーチ練習を行った。



### 4 軍縮会議傍聴（8月20日）

国連軍縮会議を傍聴した。市川大使が会議の初めに高校生平和大使を紹介し、各国から歓迎のメッセージがあった。とりくみの重要性和責任の重さを強く感じた。



### 5 国連ツアー

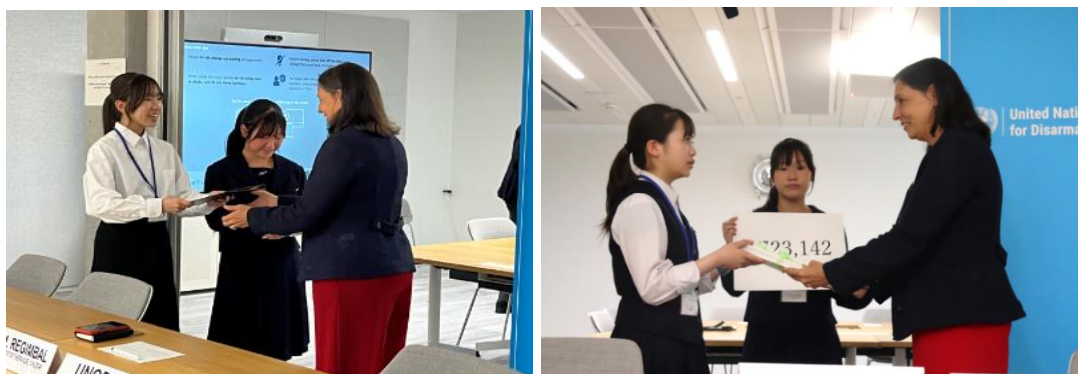
その後、国連ツアーを行った。国連の広さに驚きながら、国連の歴史を学び、様々な会議が行われていることを学習した。また、高校生 1 万人署名が

展示されているコーナーでは署名活動の重みを再確認した。



## 6 軍縮部訪問（署名提出とスピーチ）

午後から軍縮部を訪問し、高校生平和大使が核兵器廃絶と平和な世界の実現についてのスピーチを行い、広島・長崎市長のメッセージと96,428筆の署名・目録を提出した。（これまでの合計2,723,142筆）



高校生平和大使は、日本各地域の課題や平和に対する思いを持って参加した。長崎・広島からは「核兵器の悲惨さ」を伝え、現在も被爆者・家族の苦しみが続いていることを訴えた。福島・岩手は震災を通しての経験、原発事故の被害について訴えた。





高校生平和大使全員の思いを一つのものとし、核兵器廃絶の大きなメッセージを伝えた。

メラニー・レジナルド国連軍縮部ジュネーブ事務所長は開会のあいさつで「高校生平和大使に会うのは昨年にも引き続いて2度目となるが、昨年の感動を忘れることができない」「皆さんが国連で核軍縮の重要性について語ってくれることは大変重要だ」と語り、若者が率先して活動している姿を高く評価した。レジナルド事務所長が高校生平和大使の活動を高く評価し、今後の活動に期待を込めた発言は、高校生平和大使にとって大きな励みとなった。



## 7 GCSP（ジュネーブ安全保障政策センター）（8月21日）

GCSPでは活動の紹介を受け、4人の高校生平和大使がスピーチを行った。また、意見交換を行った。参加された職員の中には高校生平和大使のスピーチに涙を流して聞き入る人もいて、核兵器廃絶の熱い思いを伝えることができた。



## 8 国際赤十字博物館

国際赤十字博物館を訪れた。赤十字の歴史や世界中の紛争や災害に対する赤十字の人道支援活動についての展示を見て回った。証言者の映像の前に立つと、紛争での苦労を語ってくれる展示もあり、見学に1時間





弱の時間しか取れず、課題が残った。



## 9 UNIDIR（国連軍縮研究所）

国連内にある UNIDIR（国連軍縮研究所）を訪問した。活動内容について4人の高校生平和大使がスピーチを行い、意見交換も行った。



## 10 軍縮会議日本政府代表部主催レセプション

大使公邸で軍縮会議日本政府代表部主催のレセプションが行われた。外交官、ジュネーブ大学の学生などが参加した。メラニー・レジンバル国連軍縮部ジュネーブ事務所長も来賓として参加しスピーチを行った。



高校生平和大使のスピーチは広島の高  
校生平和大使が行った。その後高校生  
平和大使と参加者は交流し、意見交換  
を行った。多様な考えの人たちと交流  
することは、高校生平和大使には刺激  
となった。また、核廃絶の壁の厚い現  
実に触れることにもなった。



8月24日、長崎で帰国報告会の後、解散し、長い高校生平和大使の旅を終えた。

### 3. まとめと感想

#### 【① 高佐 安里（北海道）】

英語ができなくて悔しい思いをこの派遣の中で何度もしました。核についての意見交換や、核について聞きたいこと、知りたいことが沢山あるのに言葉が出てこないという歯痒さは忘れられません。反省会でも上がっていましたが、その場で内容を理解するのと、あとから訳を見て内容を把握するのでは大きく変わるというのを身に染みて感じていました。



英語で苦戦した私ですが、一つだけ大きな気づきがありました。伝えるということは言語の壁をも超えるということです。UNODA のレジナル所長にスピーチを聞いてもらった時、緊張で自分がどんな風にスピーチをしていたかは全く覚えていませんが、レジナル所長が何度も頷きながら私のスピーチを聞いてくれたことは覚えており、とても嬉しかったです。拙い英語ながらも被爆者の思い、署名メンバーの思い、署名してくださった方の思いをのせることができました。団長の小早川さんや青木さん、帰国報告会を見てくださった平野さんにもお褒めの言葉をいただき、第 27 代の欧州派遣は結果的に成功という形で終わることができました。ですが、まだまだ私たちには展望があります。その一つがジュネーブでの同年代の交流です。今回、私たちは核の専門家にスピーチを聞いていただきました。国の立場があるとはいえ、核の脅威を知っている人たちは、私たちが伝えたいことが想像しやすいと思います。レセプションの会場にはジュネーブ大学の学生や現地の高校生、中学生もいました。スイスでも広島、長崎の被爆について習うと言っていました。もし、ジュネーブの学生に私たちのスピーチを聞いてもらえたら、もし私たちができる平和講習ができたら、若者同士の深い対話ができ、新しい繋がりが生まれると思います。これはかなりチャレンジとなりますが、同年代の人と核について語り合うことは私たちにとって良い刺激となり、今後の活動の原動力にも繋がります。これは支援者の方々のお力添えが必要ですが、高校生平和大使内でも何度も対話を重ね、今年以上に知識を蓄えてから、欧州に向かうことができるでしょう。

最後に、今回の派遣で経験したこと、感じたことを決して無駄にすることのないよう、私たちにはできることはなにか、私たちだからできることはなんなのかを考え、そして行動に移し、反省点をまた活かすという単純ではありますが、絶対に怠ってはならないことを忘れずに活動が続けていきます。

## 【② 皆川 舞奈（北海道）】

今回の派遣で、私はもっと人に伝えること・スピーチの練習をしなければいけなかったと後悔しています。私は英語が得意ではありません。スイスでは英語の得意な人に頼りっぱなしでした。だからそこ、スピーチを自分のものにして、抑揚や身振り手振りなども自然になれば、より相手に伝わる・心で想いを届けられるスピーチになったのではないかと考えます。私のスピーチでは、誰一人として頭の中に内容が映像として浮かんでいなかったと思います。なぜなら、私の頭の中にすら映像が浮かんでいなかったからです。それは力不足ゆえに1つ1つの想いを伝えることよりも、一度も間違えてはならないとの考えが大きかったからです。そんな考えでのスピーチは誰の心にも届きません。



また、日本政府代表部訪問で市川大使が「ロシアのウクライナ戦争はあからさまな侵略である。現実的にウクライナがNATOに加盟していればこの侵略は起こらなかった」と仰りました。私は驚きました。豊富な知識を持つ軍縮大使がその様なことを口にしたことに。私とは異なる考えです。

「ロシアは確かに悪い。それは揺るぎない事実。そして核兵器での恫喝を絶対許さない」。が、「それを仕向けた勢力がもっと悪い。世界を分断して反目させ、利益を得ようとする勢力が一番悪い」が私の考えです。

彼らが、ウクライナがNATO加盟を希望したのに妨害した。フィンランドは2023年に加盟できたのにです。

ですが市川大使は対話において「自分と全く異なる意見を持つ人と対話をするとき、相手を理解はするが同意はしないことも大切である」とも仰っていました。なので私も市川大使のことを理解はします。ですが、同意はできません。

「微力だけど無力じゃない」この言葉を胸に私は高校1年生から高校生一万人署名活動に参加してきました。

署名を提出する場に居られたこと、その瞬間を見られたこと、署名を受け取られたレジンバルさんの嬉しそうな顔が見られたこと、そして署名と共に署名メンバーや被爆者の方々の想いも届けられたこと。とても喜ばしく思うと同時に、汗水流した3年間で報われた、認められた気がしました。

私は高校生平和大使である前に高校生一万人署名活動のメンバーです。今回の派遣で得たこと・感じたことを全て北海道で一緒に活動している署名メンバーに直接伝え、より良い活動ができる様に皆んなで対話し、考えたいと思います。



### 【③ 佐藤 凜太郎（岩手）】

私はこの派遣から3つのことを学びました。

1つ目は、現状の価値観に囚われないことです。日本政府代表部を訪れた時、市川さんは「ウクライナがNATOに加盟していれば、戦争は起こらなかった。」と発言しました。私はこの発言に納得いきません。ウクライナがNATOに加盟していれば、かえって世界大戦の緊張が高まっていた可能性や、逆に、冷戦後にNATOが解体していれば、この戦争は起こらないことも考えられます。だから、私は物事を簡単に決めつけるような発言をしてはいけないと思うし、それに簡単に乗らないように軸を確立させた訴えをしたいです。



2つ目は、英語で伝えることの重要性です。私は英語が乏しく、多くの方に私の日本語を通訳して頂きました。しかし、この活動で早急に核兵器廃絶を達成するならば、必ず英語は全員が身につけてはならないと思いました。今後も国際的な行政機関を訪れ続けるならば、世界を相手にしなければいけません。英語が話せる人と話せない人では、対話の質に雲泥の差が生じます。国際的な対話の場を充実させるためには、もっと英語力を重視するべきだと思いました。私も自分の気持ちを通訳を介した間接的な言葉でしか伝えられなかったことに悔しさを感じたので、自立した対話ができる英語力を身につけていきたいです。

3つ目は、責任と明確な目標を持つということです。UNODAでレジナルドさんに皆さんの思いが詰まった署名を届けられたことが嬉しかったです。一方で、この署名の思いが全ての人に伝わらなければ、そして私達が活動を広げる努力をしなければ、核兵器廃絶は理想になってしまうと思いました。なぜなら、レジナルドさんのように真摯に耳を傾けてくれる人もいれば、現実的でないと耳を背ける人もいるからです。後者の人の多くは、安全保障の専門知識や現状を提示します。私たち高校生が対抗するためには、知識を一層高め、各々が行政の場で議論できる話題を示せるようにしなくてはなりません。そうでなければ、核兵器廃絶の議論を前に進めるのは難しく、被爆者の方々の願いが実現されないまま時間だけが過ぎてしまいます。だからこそ、若い世代が中心となり被爆者や戦争の記憶を継承し、未来のための平和教育を進める必要性を感じました。

今後は、岩手で平和教育を進めるために、私達の代が今後の活動の拡大と核兵器廃絶の思いの継承に貢献していきたいです。



#### 【④ 畠山 史子（岩手）】

私はこのスイス派遣を通して改めて「微力だけど、無力ではない」を強く感じました。

軍縮会議の傍聴で「本当の交渉は会議室で行われない」と議長を務めていたイスラエルの方がおっしゃったのが印象に残っています。聞いた時点では、どういうことか分かりませんでした。その後の国連ツアーで案内の方に「会議室に入ったら言うことは既に決まっている。だから、外交官はカフェテリアでの話し合いこそを大切にする」と言われ、水面下での事前準備や交渉こそが大切なのだと分かりました。日本でも根回しという言い方がありますが、普段の関係性が国際連帯に生きてくるのです。



私が生まれる前から始まった高校生一万人署名活動でこつこつ一筆一筆集められた署名が大きな力を持ち、世界の人に知ってもらえるようになりました。しかし、世界のいたるところで戦争が続いており、核兵器も存在する現実があります。今回の派遣で軍縮会議日本政府代表部の市川とみ子軍縮大使や国連の方々、ジュネーブ大学の学生の方々と話すことができ、核兵器廃絶は相当困難なことだというのが専門家の認識だということが分かりました。

また、他の国や地域ではそもそもの「平和」の概念が違うことも知り、自分たちの目指している目標は遠いかもしいないと思いました。しかし、「誰もが核のない世界を望んでいると信じている。」「声を上げて活動を続けていくことで世界を変えていけるだろう」という言葉をいただき、勇気づけられました。立場の違う相手について、知ること、学ぶこと、自分の軸をもって行動することが対話に繋がり、平和の糸口になることを確信しました。私たちが声を上げ続けていくことが重要です。被爆者の方々、全国の高校生一万人署名活動のメンバー、署名をしてくださった多くの人の思いを国連軍縮事務局のレジナルドさんに手渡すことができ、心からよかったと思えました。

多くの人に支えられ、スイス派遣に参加することができました。事務局のスタッフをはじめ、支援してくださった支援者の皆様、全国の署名メンバー、長年に渡って千羽鶴を折ってくださっている五島列島の藤原さん、近畿日本ツーリストの野中さん、そして一緒に頑張った第二十七代高校生平和大使のみんなに感謝します。私はこれからも核兵器廃絶と平和な世界の実現に向けて努力していきます。

## 【⑤ 長澤 華咲（福島）】

私は今回のスイス派遣で自分の知識の無さをとても痛感しました。事前に予習をしていたつもりでしたが、話の内容が理解できない部分があり話についていくのがやつの時がありました。事前にもっと準備していたら積極的に発言できたと思い、今になって後悔しています。

ですが、リレースピーチの時には自分の気持ちを素直にレジナルさんに伝えられたと思います。核兵器と同じくらい原子力発電にも脅威があるということを伝えることができ、レジナルさんが私達のスピーチを真剣に受け止めてくれてとても嬉しかったです。

レセプションでは、色々な年代、国、立場の人と意見を交換することができました。私がその中で印象に残ったのは、「平和の種類は1つではない」という大学生の言葉です。様々な方向から視点から平和について捉えていて感心する一方で、平和に対しての課題がまだまだあるということを実感させられる言葉でもありました。私達が今何をすべきなのか、何を考えなければいけないのか、このレセプションをきっかけにもっと広い視点で考えていきたいと思いました。

私は今回のスイス派遣で高校生平和大使の役目の重要性を改めて実感しました。高校生だから見える平和の形をこれからも紡いでいかないといけないと強く強く感じました。このスイス派遣は新しいスタートであり、私の核兵器廃絶に対する想いをより強いものにしました。長崎、広島で起きた悲惨な出来事を、被爆者の想いを、伝え続けることは私達の義務であり、重要な使命です。私達の核兵器廃絶に対する強い想いを訴え続け行動に移し、核兵器廃絶を確実なものにしていきたいです。



## 【⑥ 半谷 優亜（福島）】

私は今回のスイス派遣を通して気づいたこととこれからの課題を見つけることが出来ました。初めに、国連へ署名を届けられ、署名メンバーをはじめ、支援者の方々、そしてこの活動を応援してくれた皆様の思いが届けられたその瞬間を見ることができ、1つの大きな役目を果たせてとても嬉しかったです。まず、国連軍縮部訪問と UNIDIR で 13 年前に起きた震災そして、福島第一原子力発電所の事故についてスピーチさせていただきました。避難の際に差別されたこと、私の住む町が大きく変わってしまったこと。原発は原爆と同じように人々に甚大な影響を及ぼすことを伝えられるよう頑張りました。スピーチをすると、レジナルド所長や UNIDIR の皆さんは深く頷き、真剣な眼差しで聞いて下さり思いが伝わった事がわかり、嬉しく思うと同時にやはり私たちの声には力があるのだと身に染みて実感出来ました。



次に軍縮会議を傍聴した際に、いくつかの国の大使から私たちの活動について言及して頂きました。その時、中国大使は「正しい歴史を学んで欲しい。」と仰っていました。正しい歴史とはなんなのか。私にとって難しい言葉でした。その後日本が中国にしたこと、加害のことを学んで欲しいという意味だったと知って言葉を失いました。私はこれまでの活動で加害についてはあまり学ぼうとしていませんでした。私たちの活動では日本の戦争の歴史、被害、加害について知っていかなければならない、そして核兵器廃絶へ繋げていかなければならないと気付かされました。

また、対話の必要性を知りました。対話と言われると国と国同士の話し合いのように感じるがありますが、友達と話し合うことも立派な対話であり、簡単に始めることができます。私は小さなところから世論の意識というのを変えていきたいです。

戦争の被害者は違う側面から見ると加害者でもある。私はまず日本がした事について勉強していきたいと思います。また、他国の戦争被害加害への理解も深めていきたいです。ただ、それで終わりではなく活動を周りの人から世界中へと巻き込めるよう、努力していきます。そして、私は核兵器廃絶と平和な世界の実現という動じない軸をもち、核が無くなるその日まで活動を頑張ります。

## 【⑦ 田口 七望（茨城）】

「自分と同じ意見を持った人に伝えることは簡単。しかし、自分と異なる意見を持った人に伝えるのは難しい。」これは日本政府代表部の市川大使がおっしゃった言葉です。国連欧州本部で軍縮会議を傍聴したときこれをととても強く実感しました。世界情勢が刻々と変化中、それぞれの国の立場は違います。その中で数え切れないほどの国と協議することはとても難しい中、国連では毎日協議を重ね交渉をしています。その調整は非常に難しい作業です。多くの国々が集まり、それぞれの視点や利害が交錯する会議の場では、単に自国の意見を主張するだけでは不十分です。対話と交渉を通じて、相手国の立場を理解し、共通の基盤を見出すための努力が求められます。自分と異なる意見を持った人に対して伝えることは難しいかもしれませんが、それができるような対話の場を積極的に作り出すことが大切です。異なる意見を共有することで、より多様な視点を得ることができ、より良い解決策や意思決定が可能になります。自分の意見を持つだけでなく、異なる意見にも耳を傾け、対話を通じて相互理解を深める努力を続けることが、より核兵器のない平和な世界の実現につながるのではないのでしょうか。



私は今回の国連欧州本部スイス派遣で署名を渡し、私たちの『核兵器廃絶と平和な世界の実現を目指す』という想いを伝えると共に活動を通して多くのことを学び得ることができました。また、署名を集めることや、地元で平和の重要性を伝える活動は、核兵器廃絶や平和な世界の実現に向けた大切な一歩です。私たちは被爆者・被爆体験者から広島や長崎の原爆の悲惨さを聞ける最後の世代です。核兵器廃絶と平和な世界はすぐに実現できるものではありません。ですが高校生平和大使のスローガンである『微力だけど無力じゃない』をもとに今後の活動でもより多くの署名を集め、地元茨城でも平和の大切さや広島・長崎の原爆の悲惨さを伝えていきたいです。



## 【⑨ 萩 有彩（神奈川）】

仲間と過ごした1週間は、自分たちの活動の意義を再確認し、私たちの「微力」は、どれほど大切なものかを実感する時間となりました。今回のスイス派遣のスタートは、三日間を大きく左右した日本政府代表部訪問でした。日本政府の「核兵器禁止条約に参加することは無意味」という断固とした姿勢に、私自身も自分たちの活動の意義を問い直すほど圧倒されてしまいました。軍縮会議傍聴では、核兵器廃絶へ進んでいない状況で、自分が相手としている「核兵器廃絶」という問題がどれほど大きく深刻なのかを痛感し、葛藤する場面も多くありました。しかし、国連軍縮部やGCSPの訪問が私の気持ちを救い上げてくれました。国連軍縮部で23人の心をつなげて行ったりレースピーチは本当に素晴らしいものでした。一人一人の熱いスピーチを聞きながら、自分は一人ではなく、こんなにも頼りになる仲間がいるのだと、胸が熱くなりました。レジナルド所長が目には涙を浮かべながら、高校生平和大使の活動は「真っ暗なトンネルに光をもたらすような活動である」とおっしゃってください、私たちの活動は決して間違ったものではなく、核兵器廃絶にあたり必要不可欠であることを学びました。最終日にはGCSPで代表スピーチをさせていただき、私にとってこの経験はスイス派遣で得た最も大きな学びとなりました。与えられた3分間を一秒一秒噛み締めながら、自分にできる最大限のスピーチができたと感じています。私のスピーチを泣きながら聞いていらっしゃる職員の方を見た時は、正直、自分が発する言葉に、こんなにも人の心を動かす大きな力があるとは思っておらず、驚きと嬉しさで胸がいっぱいになりました。スイス派遣前半は心が折れそうなこともありましたが、これらの経験から、私たち高校生がもつ情熱と力は誰にも引けを取らないものだとは確信しました。



私たちには世界を一夜にして変えられる劇的な力はありませんが、今しか持ち得ない情熱と言葉の力を持っています。私たちの活動は、必要不可欠で、今の世界を照らす尊い光です。だからこそ、どんな逆境にあっても、決して歩みを止めてはなりません。

スイス派遣という大きな役目を終え、新たなスタートラインに立ちました。これからも全国の仲間たちと切磋琢磨しながら、神奈川県でも粘り強く活動してまいります。

最後に、支援者の皆様、全国の署名メンバー、活動を応援してくださっている全ての方に心より感謝申し上げます。

## 【⑩ 西脇 あかり（新潟）】

8月。あれから79年経った今、多くの人に繋がれてきたバトンを受け取ったことを実感しました。

今回の派遣で、私は“実感”と“悔しさ”、“希望”を感じました。

被爆の実相を伝えること、「もし今、」と相手にも自分にも問いかけていくことの重要性を学びました。しかし、その対話では、相手の背景を踏まえなければ、論理的な言葉のキャッチボールが成り立たちません。相手がどういう立場なのか。

どういう環境で生きてきたのか。どういう学びをしてきたのか。それらを知らなければ、中身の詰まった対話にはなりません。

同時に、私自身の知識不足、コミュニケーション能力の欠如が悔しさとなりました。相手のことを知らないから、悔いが残った深い会話。そこにさらに追い討ちをかけたのが、言語の壁。翻訳を通じてしか対話の内容を理解できない悔しさ。自分で考えぬいた言葉で話したいのに、機械を通じてしか話せない悔しさ。壁を乗り越えるのに必要なのは言語ではなく思いだと感じる一方で、それでも言語は心と心を通わせるツール、時を超えて繋がることのできるメッセージだと思いました。

ヒバクシャとは血縁関係のない私。今年高校生平和大使として世界を見ることのできた私。普段はどこにでもいる17歳の高校生である私。そして何より、今ここでこうして生きている私。こんな私だからこそ、こんな私しかできないことがある。同じように、一人一人にできることは違います。だから、共にできることを積み重ねていきましょう。

世界には解決しなければいけない課題が山積みです。私の住む新潟県も見渡してみれば、核兵器廃絶に限らず多くの問題があり、それぞれの問題に向き合っている人々がいます。私は世界平和へのほんの小さな一歩を踏み出したにすぎません。

この活動が始まり、全国の約6,000人の高校生が繋いだことで変えられたものはきっとあります。「あなたたち若者には、人の心を動かす大きな力を持っている。」条約を作ったわけでもない。大きく何かは変えられなかったかもしれない。しかし、誰かの心は動かせたはずです。それが波紋となり、何十人何百人と多くの人たちの心を動かすことができます。国家を形成しているのも、社会を形成しているのも、市民です。そして、過去はいつも市民が動かしてきました。だから、私たち市民の輪をより広げていけば、それが世界を包み込む日が来るでしょう。いや、きっと来ます。



## 【⑪ 谷河 優那（静岡）】

今回のスイス国連欧州本部派遣では、被爆者・戦争体験者の想いを私たちの言葉で伝え、核なき世界を訴えることが目的でした。振り返ってみると、「私達自身の成長の為ではない。仕事を遂行する。」という言葉の重みと向き合いながら過ごした3日間でした。

ジュネーブ軍縮会議(CD)日本政府代表部への表敬訪問では、核抑止論を基盤とする日本政府の姿勢が見られました。核兵器と軍縮というセンシティブな問題に対して、積極的な立場、態度を表明しない限り、無関心だとみなされます。唯一の戦争被爆国として、他方本願でない役割を担わなければならないと感じました。特に印象的だったのは、市川大使の、「相手の背景を事実関係として理解した上で、自分の意思を貫くことが重要」という言葉です。自分（自国）の原理、原則を守りながら他国と折り合いをつけていくという話は、私たちが生きていく上で非常に肝心な事だと知りました。

2日目以降には、軍縮会議の傍聴をしました。パキスタンを除く核保有国8カ国と非核保有国の大使の発言を聞いたのがとても興味深かったです。また、日本政府代表部主催のレセプションにてディスカッションをする機会をいただきました。これらの知見から、私は、様々な利害関係が交差する関係から、ある国の人々の人間像を推測してはいけないという事を学びました。国家間の国際諸関係は人間一人一人の顔とそこにある感情を消してしまうからです。怒った顔、悲しみに打ちひしがれた顔、喜びに満ちた顔。それらの表情を思い浮かべられなくなった時、民族や国家に対する偏見や誤解が一人歩きを始めます。私達は、生まれた国や人種が違ってそれぞれの価値観を受け入れて認め合える社会を構築していきたいです。

今回のスイス派遣で、私たちの活動が「無力じゃ無い」と改めて実感しました。これは、未来を担う私達の力を信じ、応援してくださる皆様のおかげです。

私達はこれからも、核なき平和な世界が実現され、だれもが幅広い人生の選択肢を持てる社会を目指して活動してまいります。



## 【⑫ 稲中 瑞希（大阪）】

私たちは今まで被爆者の方々に生の声で伝えていただいた思いを胸に精一杯広島・長崎の声を届けました。そして核なき世界の実現を求めて活動するたくさんの高校生、署名をしてくださり、協力して下さったたくさんの方々の思いを背負って署名を提出しました。私たちの目的は達成されたと思います。



ジュネーブでは様々な国際機関を訪れ、自分たちとは違う意見を聞き、核兵器の廃絶がどれだけ難しいことなのかを改めて感じました。しかし、あくまで核兵器廃絶は理想論ではありません。絶対に実現しなければならないことです。そのうえで、自分とは違う意見を受け入れなければなりません。日本政府代表部では同意はしなくても相手の意見の背景を理解することが大切だと仰っていました。受け入れた上で核兵器の非人道性を訴える義務が私たちにはあると思います。日本政府の立場としては最終的なゴールは核兵器廃絶であるが、核兵器保有国に囲まれている日本はアメリカの核の傘に入らなければ日本の安全保障は守られないのだという見解でした。この意見を日本政府代表部で聞いたとき、私は正直ショックでしたが理解はできました。しかし、こうして各国が自国の安全保障ばかりを優先しては軍縮どころか軍拡が進んでいってしまいます。私はどうかすべての国に人間の安全保障に目を向けてほしいと思います。最終日のレセプションではイランの大使が、私たちは意見は違えど皆ゴールは同じだとおっしゃっていました。平和に反対する国も戦争を支持する国もきっとありません。平和を望むすべての国の人のためにも私たち唯一の被爆国である日本が被爆の実相を伝え、被爆者の方々の平和を望む思いを訴え続けなければならないのだと強く感じました。国連やその他の組織では軍縮に向けてたくさんの人が働いていることを生で感じる事ができ、すごくうれしかったです。どの団体の方々も私たちの活動にとっても期待してくださっているのだと感じました。

未来の平和を作れるかは私たち若者にかかっていると思います。どのような世界を望むのか、どのように世界を変えていきたいのか、模索しながら自分なりのビジョンをしっかりとって活動していきたいと思います。私たちが声を上げるからこそ世界は変わっていきます。だからこそ改めて私たちのスローガンである“ビリョクだけどもリョクじゃない”を心にとめ、全国の署名メンバーとともに活動に邁進して参りたいと思います。



【⑬ 細谷 美優花（兵庫）】

What kind of world do you want?

How do you want your community to be?

私はこの問いをこの先一生自分に問い続けることとなると思います。

国連軍縮本部への訪問の際、私は祈るような心持ちでリレースピーチを行いました。核兵器によって苦しめられているのは日本だけではなく世界中であり、今や国連の最優先議題とすべき趣旨をスピーチで伝えることができ、レジナル所長も同意してくださっていたようで嬉しいです。他のどんな団体と比べても、被爆の実相を訴えることは私達にしかできません。だからこそ、被爆された方々の願いを世界共通にするために全力で働きかけ、署名を活動メンバーと市民の方々の想いを胸に提出しました。

しかしながらそれだけでは活動として足りていないと思います。なぜならスイスに訪問したことで、私達若者がいかに多くの人の期待を背負っているのか実感し、世界にとって確実に影響力のある必要な存在であることを強く認識したからです。

そこで被爆の実相を訴える段階から、より影響力があって具体的な活動へアップデートするためにどうすれば良いかという問いにレジナル所長が「what kind of world do you want?(自分がどんな世界を作りたいのか)」を大事にするべきだと答えてくださりました。「平和な世界」は人によって様々です。軍縮会議傍聴やレセプションでは、全ての国が核を持つことこそが平和な世界だという人や、家族と過ごすことができればそれは平和な世界だという人もいました。その中でどんな世界であってほしいかを常に考え続け、また世界中が同じ「平和」を目指すためにも、スイス派遣中最も強調された言葉でもある「対話」が大切だと考えました。

全ての人が被爆にルーツを持っているわけではありません。だからこそ同世代の同じ目的を持った若者と常に交流を続けていくことで、私達の活動を途絶えさせることなく継承することができるのだと思います。

スイス派遣では自分の学習不足を感じることも多くありました。これからも自ら学習し共有して、行動に移し続けていきます。支えてくださった皆様、活動メンバーの皆様、そして仲間達への感謝を胸にこれからの活動に励んでまいります。



#### 【⑭ 藤本 波音（奈良）】

私は今回のスイス派遣を通して、私たちの活動の意義を実感することができました。

私は始めの軍縮会議日本政府代表部への訪問で、自分の力の小ささをとても感じました。核兵器廃絶の道のりの難しさを改めて市川さんの口から直接聞くと、圧倒されてしまう自分がいました。しかし、国連欧州本部軍縮部で署名の提出とリレースピーチを行った際に、こんな言葉をいただきました。「あなたたち若者の言葉の力はとても強いものだ。」。レジナルドさんを始め他の訪問先でも、たくさんの方がこのような言葉を私たちにかけてくださいました。私たち全員でつくりあげたリレースピーチが被爆の実相を、そして市民のみなさんからいただいた署名が平和への想いを届け、人の心を動かすことができたことが本当に嬉しかったです。私たちにはしかできないことが大きな力を持っていると実感できました。また、「この活動を続けていって欲しい。」といった言葉もいただきました。高校生1万人署名活動を始めとする私たちの活動が、大きな意味を持つと改めて感じました。そしてレセプションでは、海外の若者との交流を通して、私たちと同じように核兵器廃絶や平和を願う若者が世界にもいるのだということを実感することができました。私たち1人ひとりの力は小さくとも、強く、たくさんの場所で影響をもたらすことができると思えたのです。



今後の活動では、このスイス派遣で達成したこと、感じたこと、学んだことを自分の県に持ち帰り、広く積極的に伝えていきます。そして私が目標としている、被爆地から離れた地域での平和について考えるきっかけづくりを進めていきたいと思います。

しかし、私は派遣を通して自分の知識や英語力の不足を強く感じました。これらを克服し、もっと広く強く核兵器廃絶を訴えるために、これからも一生をかけて学び続けたいと思います。

最後に、集めた署名を提出することやリレースピーチをすること、様々な国の方と対話することは、1人では決して成し遂げることができませんでした。全国の高校生平和大使や署名メンバーの力と支えがあったからこそ、今回のスイス派遣の目的を達成できたと感じています。これからも同じ思いを持つ仲間を大切に、核兵器廃絶と平和な世界の実現という大きな目標に向かって、歩みを止めずに進み続けていきます。

【⑮ 甲斐 なつき（広島）】

「そんなことをしても無駄だ」「核兵器廃絶なんてできるわけがない」

私は高校1年生の4月から高校生一万人署名活動に参加し、今年で2年目になります。冒頭の言葉は、これまでの私たちの活動に向けられてきたものです。直接言われたこともありました。

この言葉に悔しさや辛さを感じながらも、「私たちがなんとかしなければならぬ」という思いに突き動かされてきました。しかし核兵器廃絶は夢のまた夢で、もしかしたら実現できないのではないかと感じたこともありました。

しかし、今回のスイス派遣を通じて、私たちは無力ではなく、核兵器廃絶を夢物語から現実のものに変えられるのではないかと考えるようになりました。軍縮会議では、多くの国が私たちの名前や活動に言及してくださいました。27年間続いてきた活動の重みを改めて実感し、その意義について深く考える機会となりました。

国連軍縮部でリレースピーチをした際、レジナルド所長の「若者の声は最も力強い声です。戦い続けるためには、皆さんの力、つながり、エネルギーが必要です」という言葉が心に強く残っています。私はこの言葉に大いに感銘を受け、想いを伝え続けることの重要性を感じました。

リレースピーチでは、私の曾祖父の被爆体験や、原爆が人間らしく生きること死ぬことも許さなかったことを伝えました。この想いを伝えられたことが本当に嬉しかったです。グループの仲間と夜遅くや朝早くに練習した成果を発揮できたことを誇らしく思います。

今回のスイス派遣で、私たちの活動の意義や、想いを伝え続けることの大切さを強く感じました。「微力だけど無力じゃない」というスローガンの重みも改めて実感しました。私たち高校生平和大使は、各地の署名メンバーや署名に協力してくださった市民の方々の思いを背負い、スイスに派遣されたのだということを深く認識しました。同時に、その思いを署名提出という形で届けることができたことがとても嬉しかったです。昨年から参加してきた署名活動で私たちや署名メンバーが集めた署名を提出するという場面をこの目で見ることもできたことがなにより嬉しかったです。

最後に、被爆者である私の曾祖父は、「核兵器を廃絶し、二度と繰り返さないように、被爆地の一人として強く世界に訴えていきたい」と著書に記しています。私は曾祖父の思いを受け継ぎ、その願いが叶うように今後も活動が続けていきたいと思っています。



## 【⑯ 佃 和佳奈（広島）】

私は今回のスイス派遣で「想いは繋がる」ということを実感しました。署名活動のメンバー、署名をしてくださった方、支援してくださった方…たくさんの方々の核兵器廃絶と平和への強い想いが繋がって、今回私たちが国連に署名を届けたり、原爆の悲惨さを訴えたりすることができました。また、訪問先でお話した方たちは、私たちに「高校生」というレッテルを貼らずに、対等に関わってくださいました。これも、今までの高校生平和大使・一万人署名活動の先輩方が多くの方にその強い想いを届けて、それが積み重なり、今に繋がっているからだと感じました。



そして、今回多くの国際機関を訪問させていただいたことで、「国際社会」を今までよりも近く感じるようになったと思います。近く感じたからこそ、世界情勢や核軍縮の厳しさを痛感しました。また、様々な方とお会いし、核兵器廃絶に否定的な方や私たちの活動に疑問を持っておられる方ともお話しました。そんな中、世界の限りない大きさと、自分の小ささに悔しさや不甲斐なさを感じることもありました。そんな時、私が大切にしていた言葉は、5年前にアフガニスタンで凶弾に倒れた中村哲医師がよくおっしゃっていた「一隅を照らす」という言葉です。広い世界の中で、自分が何かできる範囲は、ほんの少しの隅ほどこかもしれない。それでも、自分にできる精一杯のことを一つ一つ積み重ねていく以外に何かを実現する道はない。という意味があります。そして今回の派遣では、世界を動かしているのは何かシステマ的なものではなく、感情を持った人なのだとということを実感しました。だからこそ、その一人ひとりが一隅を照らし、それが連鎖していけば全体をも照らせる大きな光になると信じています。

どんなに世界情勢が厳しくても、自分の微力感が悔しくても、私たちの心のフィルムに焼き付いている広島・長崎の悲惨さ、そして、核兵器廃絶と平和な世界を目指す強い想いは変わりません。これから「心での理解」を広めながら、そして自分自身もそれを深めながら、核兵器廃絶を目指すたくさんの仲間たちと手を取り合って、全力で活動していこうと決意を新たにしました。



## 【⑰ 沖本 晃朔（広島）】

ジュネーブへの派遣は、僕にとって高校生平和大使、更に言えば広島で生まれ育った僕自身のレゾナードールを探す一週間であったと言える。

活動初日、軍縮会議日本政府代表部を訪問した。そこでの市川大使との質疑応答の中で、僕は自身の活動の役割と限界を思い知らされてしまった。核兵器の非人道性を訴え続ける僕らにとって、市川大使の述べる論理的で世界の現状を良く反映した安全保障政策は、何も言い返せない論理として痛烈に身に染みた。高校生平和大使は被爆の実相を訴え続けるという方針であり、核兵器の非人道性を訴えたり、非核への市民の世論を高めることはできるけど、逆にいうとこのままでは世論形成以上の位置付けにはなれないのではないかと思った瞬間だった。僕らは全体として政策的な未来へのビジョンを持っておらず、自分たちの手で核兵器廃絶へのステップを踏んでいこうというより、誰かに託そう、想いを広げようという活動だと認識せざるをえなかった。政策的提言ができないから、行政機関で核なき「未来」への建設的な話し合いに「過去」を知っているという側面からしか参加できないのだ。しかし団体として政治的意見を持つと高校生の政治利用といった問題も出てきそうなので難しい所である。



僕のこのスイス派遣での学びは、個人として高校生1人1人が政策的意見を持つのが大切だということだ。高校生平和大使の被爆の実相のみを訴えるというのも大切だと思うし、世論形成を目指すならこれ以上ない市民団体としてのアイコンだと思うが、やはりそれだけでは主体性に欠けるのではないかと思う。僕が今まで被爆地ヒロシマで学んできた平和教育も、被爆体験談や平和の尊さといった内容がメインで実際に必要な政策的な話にまで及んでいなかったという現状がある。若者が政治的意見を持つことが憚られる風潮がある日本を変えていく必要もあるだろう。被爆の実相を知る僕らだからこそ、「過去」と「未来」を繋ぐ政治的意見を持てるのではないだろうか。最後に、ここまでの僕の文章もふわふわしている内容ということが否めないのも、非核に向けた僕の政策の例を提唱しよう。

### －「核保有国への経済制裁」

非核保有国間で経済協定を結び、核保有国に対し毎年の軍縮目標の達成度に応じた関税の引き上げを行うといった実効性のある措置は、非核への大きなステップとなるだろう。

### －「現安保理のシステム改革」

現在の国際体制では核兵器廃絶は厳しい。核兵器禁止条約といったものには核保有国の参加義務はなく、強引な非核を目指すなら安保理の改革以外に道はない。常任理事国はいずれも核保有国であり、パワーバランスは崩れている。

【⑩ 杉森 世都（福岡）】

今回の派遣で、高校生平和大使の活動は様々な場所で評価されており、記憶の継承の重要性についてもさらに実感することが出来ました。特に、記憶継承の観点では赤十字博物館でルワンダ虐殺の体験を語る女性のビデオを見たことで、歴史のひとつの出来事としてしか知らない人へ伝えることの力と重要性を感じました。

軍縮会議の傍聴、UNIDIR、GCSP、政府代表部への訪問を通しては私たちの活動の力と今後の課題を認識することができました。それぞれの場所で各県の高校生平和大使が行ったスピーチが人の心を打つもので、長期間取り組んでいる社会問題に若い世代の活動がどれほど大切であるかを熱い言葉で伝えていただきました。核兵器廃絶への過程には教育、対話を続けていくこと、その課題へ従事する人を増やすことなど課題は山積しており、長い道のりであることをこれまでより体感することにもなりました。しかし、代表部で市川大使からいただいた「難しいときほど冷静に、どうすれば伝わるかを考えなければならない」という言葉を心に留め、これからも被爆者の方と私たちの思いを伝え続けていこうと思いました。

レセプションでは、地元の高校生、ジュネーブ大学の学生、外交官、UNIDIR 職員など様々な立場の方からの観点でお話を伺うことができました。核兵器廃絶を絶対に推し進めていかなければいけないという方から、国境がある限り軍隊は存在し核抑止力で成り立つ面もあるという方まで様々で、刺激を受けました。実際にお話を伺い、私たちの考えに対する応えも貰う中で、対話を重ねて合意へ向かうことの難しさとその意義を感じることが出来ました。

現在、核に関する問題には人工知能による急速な技術発達や、核軍縮分野の女性参画率の低迷、原子力発電に関わる環境問題など、長期に渡って取り組まれていても議論があまり進んでいないものが多いです。この現状の中で、これらの問題の未来を担う私たち若者世代が、揺るがない自分の意志と先人たちの思いを持ち、粘り強く取り組んでいくことが大切であると強く感じました。これからも、核兵器廃絶と戦争のない平和な世界を求める全ての人とともに精一杯活動していきます。



## 【⑱ 吉田 光里（佐賀）】

今回のスイス派遣は、高校生平和大使として活動していく中で非常に大きな実りのあるものでした。様々な機関を訪問して意見を交わす中で核抑止論という考えを持つ国が多く「核の傘」の下にいる日本の若者である私たちが核兵器廃絶を訴えることの難しさを感じました。しかし、私は唯一の戦争被爆国の若者であり、被爆者の方から直接お話を聞き核兵器によってつくられた平和とは本当の平和ではないと強く感じており、私たちが声を上げ続けていかなければいけないと感じました。レセプションでは大学生の方との意見交換を行い、各国の平和教育の現状や同じ若い人の平和に対する想いや、核兵器保有国で育った方の核兵器に対する考え方などを学ぶことが出来ました。異なる場所で育ち、背景や考え方の異なる人との意見交流では自分の視野を広げるとともに、世界各国の人が平和を願っていることを実感しました。そして私たち日本の若者が外国で被爆者の方の声を届けることは大きな意味があると感じました。



国連では署名やスピーチなどを通して、Hiroshima Nagasaki Peace Messengers としての役割を果たすことが出来ました。訪問先では多くの方が私たちの活動は大きな力があるとおっしゃっていましたが、それはこれまでの高校生平和大使の方、全国の署名メンバーの方、支援者の方、署名して下さった方など本当に多くの方々の核兵器廃絶を願う想いが紡がれているからだと改めて感じたと同時に、この活動を絶やすことなく輪を広げていかなければならないという責任も感じました。スピーチなどを通して私たちの核兵器廃絶を願う想いは国を越えても絶対に届くということを感じました。想いを届けるためには「伝える言葉」ではなく「伝わる言葉」で核兵器廃絶を訴えていかなければならないと学ぶことが出来ました。そのためには自分の軸を持ち知識や考えを深めなければならぬと思いました。

「核兵器のない平和な世界」は待っていたら誰かがしてくれるものではなく、唯一の戦争被爆国でこれからの時代を創る私たちが先頭に立ち、被爆者の方の想いを伝えていかなければならないと強く感じました。「核兵器のない平和な世界」はすぐにできるものではなく簡単にできることでもありません。しかし、私たち一人一人の想いが紡がれることで大きな力となり核兵器廃絶は必ず実現できると実感しました。私はこれからの活動を通して核兵器廃絶を訴えるとともに、自分たちの世代やもっと若い世代に活動の輪を広げ、一日でも早く核兵器のない平和な世界が実現するよう尽力していきたいと思います。



## 【②⑩ 平野 陽路（熊本）】

私は祖母の言葉により平和活動を始めた。祖母は日本が植民地化していた韓国生まれだ。その後大連に移り住み終戦後日本へ逃げるように帰国した。祖母が目当たりにした日本軍がアジアの方々に行った殺戮、また日本がGHQに統治されていた時の米兵からの被害、被害と加害について教えてもらっている。

また「戦争は絶対にしてはいけない」「広島長崎を繰り返してはいけない」という言葉を授けてもらった。その中で二度と戦争を繰り返してはいけない、広島長崎の惨状を繰り返してはならないという思いが生まれた。何か平和に携われるものはないかとおもっていたときに学校の上級生からこの活動を聞き応募した。被爆者に実際にインタビューをして被爆の実相を自分の耳で聞きに行きまた月に1回核廃絶を求める署名をしている、厳しい意見を残される方がいらっしゃるが多くの方が署名してくださり暖かい励ましの言葉をもらいこれが活動する上での大きな力になっている。平和学習への出前授業をしに県内の小中学校へ回っているただ一つの被爆国の若者の視点で授業をしている。その中で今回ユース非核特使としてスイスにある国連欧州本部を訪れた。外務省から一定期間任命される。被爆の実相の次世代への継承と活動を目的としている。まず、市川とみ子軍縮会議日本政府代表部大使のところを訪れた。正直言って市川大使とは考えは違った。考えは違ったとしても相手の立場を理解することの大切さをご教示いただいた。私は市川大使とは核軍縮への考え方に違いはあれどもお互いに信頼して建設的な議論をすることができた。その後国連欧州本部軍縮部訪問や国連軍縮研究所にてあいさつを行った。熊本県在住の浦田藤枝さんや熊本での平和活動について伝えた。軍縮部所長のレジナルドさんによると時間はかかると思うが大きな影響力があるというお話、さらには浦田さんの「Peace is not something that someone prepare for us」という言葉に大きくうなずいていただいた。

私は地元での活動やスイスでの活動を通し多様な意見を知ることができた。だからこそ私たちはいろいろな意見を受け止めるとともに自分の中の芯を持ち活動していくことが必要だ。私はこれからも仲間とともに社会に訴え続け被爆者私の祖父母の思いを実現できるよう複雑で一朝一夕に行かない問題だが粘り強く高校生と視点を持ち頑張りたい。最後に平和とは誰かが用意してくれるのではなく私たち自身で取りに行くものだ。これを肝に銘じて頑張っていきたい。





## 【②① 花崎 太智（大分）】

今回のスイス派遣では、平和とはということについて考える機会がありました。レセプションの際に、平和は国によって違うという言葉に衝撃を受けました。日本に住んでいる私は、戦争がないことが平和だと思っていました。ご飯が食べられるだけで平和な国もあれば、家族と過ごせるだけで平和な国もあるのだと知らされました。しかし、これは、2つの意味で捉えるべきだと感じました。1つは、飢餓問題や、医療問題を支援するのも平和活動であり、募金をするのも平和のための活動なのということ、2つは、私たちの「みんなが同じ平和に向かう」という目標と遠く離れていたということです。みんなが同じ平和に迎えるように、飢餓問題や、医療支援のための運動も着目しながら活動していきたいと思いました。



また、日本政府代表部の際に一度でも自分の活動を疑ったことに情けなさを感じました。市川大使の質疑応答の際に、私たちのおかれている状況の難しさ、複雑さに、簡単に圧倒されてしまいました。今後活動していく中で、より、自分たちの活動に政策的に目標をたて、自信をもって頑張らなければならないと感じます。また、知識の面でも自分たちの軸を持ちながら学んでいきたいと思います。そして、多くの人が共通して言っていたのが、「対話の大切さ」です。相手の背景や、置かれている状況を理解しながら自分達の考えや意見を発言するべきだと言われました。以前の私なら、核は必要だと言われると、それはダメだと反論するだけになっていたと思うけど、これからはその前に相手のことを理解して、対話したいと感じます。

またこれは、私たちの活動も同様で、私たち高校生平和大使の活動も一度見直し、本当に自分達の意見は合っているのかと、考え直すことで自分たちの活動に自信を持って行えると思います。今回の活動を第27代のスイス派遣で終わってしまったら意味がないと思うので、次の代、その次の代と繋いで大きな成果が出るように、今回の成果の継承、知識の継承など行い後輩に繋いでいきたいと思います。

## 【②② 大原 悠佳（長崎）】

私はスイス派遣を通し、私たち高校生のような若者が被爆の実相を伝えることの必要性を改めて感じました。また、私たちがそのことを伝えていくためには、被害の面だけではなく加害の面も学ぶこと、また伝える相手の考えや背景を知ることも必要だと感じました。被爆地である長崎で生まれ育ち、被爆者や被爆体験者の方から直接、被爆体験や想いを聞いてきた私が、私だからこそ伝えられることは何か、またどの言葉を使い、どう伝えれば、より多くの人の心に残るように伝えられるのかを考え、より多くの人に被爆者の声を届け、核兵器の非人道性を訴えていきたいと思います。さらに、私は、スイス派遣の中で、核抑止論といった核による平和を求める声が多くあることを改めて感じました。



そして、私は、核によって守られる一時的で一部だけの平和ではなく、核のない持続的な世界平和を作っていくべきだと思いましたし、同時に核廃絶を求める思いを強めることができました。これから、この想いを、核廃絶の想いをより多くの人々に訴えていくため、被爆や戦争を体験した方々や異なる意見を持つ人々と対話を重ねていきたいと思います。さらに、対話の中で必要になるのは、知識、そして、揺るぐことのない核廃絶を求める強い意志や自分自身の軸です。こういったものを作っていくため、また私達の発言や活動により根拠や裏付け、影響力を持たせるためにも、学ぶことも重要です。被害の面や被爆者、戦争体験者の方々について学ぶことはもちろん、日本が行ってきた加害の面や、現在の世界情勢、そこに至るまでの背景、世界の飢餓や貧困などの問題など、幅広くより多角的に学んでいきたいと思います。

そして何よりも私は、この活動に参加したきっかけや核兵器は絶対に廃絶しなければならないという私達の初心を忘れないこと、私達の活動は決して無力ではなく、高校生の持つ力を信じ、私達の声に耳を傾けてくれる方々が世界中に存在すること、核廃絶は理想ではなく私たちが今すぐ選択すべき現実であるということ、こういったことを忘れずに、高校生一万人署名活動のメンバーと共に活動していきます。核も争いもない平和な世界が訪れるまで、訪れた後も、核と人類は共存できない、被爆者を二度と作ってはいけないという被爆者の方々の声を、辛い思いをしながらも、核なき平和な世界に向け被爆者の方が活動しているという歴史を、世界へ後世へと訴えていきます。

### 【②③ 津田 凜（長崎）】

スイス派遣を通して多くの訪問先を訪れましたが、そのほとんどで「対話」の大切さが語られました。それは、相手が自分と異なる意見を持っていたとしても、対話を重ね、相手の意見に同意はできなくても、理解をすることが大切だということでした。

私が特にそのことの大切さを知ったのは、日本大使館を訪れた際です。そこでは、核兵器禁止条約や核兵器について日本の立場を改めて聞くことができました。スイス派遣前までは、日本政府の立場についてインターネットで調べた範囲で「知っている」状態でした。しかし、実際に市川大使のお話を聞くことができ、なぜ日本が今の体制をとっているのかなど、背景や理由を深く理解することができていました。それは私にとって大きなことだったのかなと思います。日本の政治を進めていく方々が思想的に核抑止論に頼っているからこそ、これからの平和教育などでどう私たちより若い世代に伝えればいいのかわかったからです。

また、様々な国の方とレセプションでお話ししたことで、平和について異なる視点で見ると同時に、自分の平和についての軸を持ち続けることの大切さを学びました。私は、レセプションで核保有国でもあるフランスの方とお話し、私が長崎出身だと伝え、「信じてほしい。フランスでは二度と同じ過ちが行われないよう子供達の心に残るような教育が行われている。」とおっしゃられました。それぞれの国で「平和」という考え方が違うからこそ、自分と異なる視点から見るのが不可欠だと学びました。

異なる視点を見るにあたって、「人から命を奪う武器で、世界の安全は守れるのか」、被爆者の方々との「もう二度と同じ過ちは繰り返しません」という約束を守れている状況なのか自分自身に問いかけ、核兵器廃絶という軸を持ち続けることが大切だと思います。だからこそ、これからの世界を作る若い世代に、私は、被爆者の声・想いを届け続けて、歴史を教えるにとどまらず「二度と同じ過ちを繰り返させない」という想いが自然に湧いてくる平和教育を行なっていきたいと思います。



## 引率スタッフ

【副団長 青木 栄（熊本）】

### 逆風下でもがんばった高校生平和大使・スイス派遣

ウクライナ、ガザでの戦争が続く中、核兵器を安全保障のツールとして保持することの必要性が語られる中での、第27代高校生平和大使スイス派遣となった。期間中、参加した高校生はさまざまな立場の人たちとのディスカッションを行い、その都度今日的な国際情勢を鑑みた時に、国家安全保障の観点から核抑止が必要、あるいは核兵器廃絶を今は強く主張しづらい状況にあるという考えに接する場面が多かった。そのため、自分たちの活動は果たして意味があるのだろうかと思い悩むような考えが吐露されることもあったが、このような状況だからこそ、自分たちのぶれない軸を持って活動し続けていく必要性について、それぞれが今一度確認し、帰国報告会の席でも力強く核兵器廃絶と平和な世界の実現に向けてがんばっていく決意を述べてくれた。そんな第27代のスイス派遣を評価したいと思う。

国連軍縮でのリレースピーチは、昨年同様、核兵器使用に伴う非人道的な被害の大きさを具体的な事実でもって訴え、二度と使ってはいけない、廃絶に向けて努力をしてほしいという思いをしっかりと伝えることができた。思いを伝えること、相手に伝わる言葉とは何かについて、一人ひとりが考えを深めることができたと思う。また、核兵器廃絶を求める約9万6千筆もの署名に込められた意味についても、参加した高校生平和大使一人ひとりが考え、協力していただいた市民や署名活動に参加した高校生活動メンバーの思いも含めて届けることができたと思う。

昨年度の反省（高校生平和大使として責任感、使命感の高まりが遅かった、核兵器廃絶をめぐる国際情勢に関する学習不足など）に対応するために、今年は早めの対応を心掛けた。昨年は、学習不足、知識のなさが、さまざまな場面で核兵器廃絶をめぐる意見聞いてもその問題点を理解できずに、何も言えずに容認し、単に「核兵器をめぐる多様な視点から考えていくことが大切だ」というところだけで終わっている感じがあったが、今年度は核兵器廃絶をめぐる各国の考え方の違い、それに対する私たちの方向性について事前に確認を行い、その知識を持って粘り強く対話を続け、いろんな場面でも自分たちの核兵器廃絶に向けた思いを伝えることができたと思う。

毎年、「客観的、多面的な視点で物事を見る事が大切だ」という指摘を各訪問先で受ける。それを受けて、対立する意見がある場合にお互いの意見を取り入れながらやっていくべきという中庸論に立つ生徒の意見も出るが、核兵器廃絶に中庸論はないことを確認したい。そもそも私たちは、どんなことを言われようとも、どんな状況になろうとも、揺るがない意思と被爆者の皆さんから託された使命感をもって活動し続けることが問われている。ただ聞くだけでなく、議論を重ね論破していく強さも求めている。そのためには、さらなる学習や出会いを通して、自分の確固たる考えを持つことが必要である。

今年、第27代の高校生平和大使が紡いだ言葉の数々は力強く、反戦平和の想いにあふれ、聴く人の心に届くメッセージとなった。さらに、それを国内でも広げてほしい。



## 【事務局長 千葉 伸武（岩手）】

### 新たな挑戦と大きな成果

第27代高校生平和大使は、新たな訪問先と、ビデオや写真映像を帰国後の活動報告に活かすこと、学生が中心となって会のコーディネートと通訳を担うことが新たな役割としてとりくまれました。

新たな訪問先は、核兵器廃絶を共有する民間との交流から軍縮にとりくむ機関との意見交換に代わった。特に GCSP（ジュネーブ安全保障政策センター）では、多くの質問が双方から出された。その中で「抑止力という概念は非常に存在感がある。非常に支配的で抑止力を使って議論するのは非常に簡単。反対するのは難しい」との世界情勢の中での核兵器を巡る議論の現状説明や東アジアの中での日本が置かれている難しい立ち位置、加害の歴史など、地政学的な日本が果たすべき役割も示された。一方で核兵器廃絶を訴える日本の高校生がジュネーブを訪問することの意義は大きく、決して諦めない取り組みを期待する旨の励ましも受けた。核兵器の保有を前提とした議論になりがちな世界の軍縮に与える大きな存在であることを改めて感じた。高校生が訴える核兵器の廃絶にとりくむ意義や被爆者の思いは、十分に伝わり大きな感銘を与えたと確信する。異なる意見や厳しい視点での見解が示されながらも、これまでにない深い学習と考察をもたらす内容は、今後のとりくみに生かす大きな成果といえる。

UNODA（国連軍縮部）の会見では、レジナルド所長から「私が日本語を話せればよいが…」と気遣う発言があり理解をより進めたいという意志を感じた。GCSP（ジュネーブ安全保障政策センター）や UNIDIR（国連軍縮研究所）では、通訳・翻訳担当を希望してくれた神奈川の萩さん、兵庫の細谷さん、広島の本田さん、静岡の谷河さんが役割を分担して通訳とコーディネート役を担った。今までの会見にないスムーズでフレキシブルな会となった。

北京国際空港での国内線から国際線への煩雑な乗り継ぎ時の迷子は、添乗員の機転と岩手の二人の高校生の通話可能なスマホにより無事に出国ゲートで合流することできた。空港で団長がサーモグラフィーに反応し別室に連れていかれるハプニングは、アフターコロナへの対応を検討を求められる。一部に過重な負担を負わせたところも反省である。トラブル、問題、課題は、次に繋いでいかなければならない成果である。

## 【事務局補助 仁木 史絵（大分）】

### スイス派遣をとおして考えたこと

今回初めて、スイス派遣に引率者として同行した。自分の知識や英語力の不足を感じながらも、一日一日が必死に過ぎていき、今ようやくゆっくりと振り返ることができている。特に印象に残ったことを3つ述べたい。

1つ目は、軍縮会議日本政府代表部訪問である。核廃絶について、どこか他力本願的な話に「積極的な意思表示をしなければそれは無関心である」「日本はもっと先頭に立つべきだ」といった声が、夜のミーティングで聞かれた。大使の話をそのまま受け入れるのではなく疑問視したことに、私は感心した。これは、広島結団式や長崎研修での学習の大きな成果である。

2つ目は、今回のミッションの1つである、署名を国連に届けたことである。各地で、他の仲間と一生懸命集めた署名、そして署名してくれた市民の声を無

事に届け、役割を果たすことができた。

3つ目は、英語のスピーチである。今回、限られた時間の中で、あれだけの量の英語を覚え、そして思いを伝えることは本当に労力を要する。空港で、ホテルで、空き時間に必死に練習をしていた姿が忘れられない。もう少し細かいアドバイスができればよかったという反省があるが、本番では緊張しながらも相手の目をしっかりと見ながら思いを訴えることができた。「伝える」ではなく「伝わる」ように努力をしていた。また、今回随所で通訳をしてもらう場面があったが、専門用語を含むあれだけの英文を要約することができたのは、素晴らしい。

今回の派遣の最中、私はずっと私たちの活動の意義を考えていた。今は、被爆者を含め戦争体験者の存在が戦争の抑止になっている部分もあるだろう。しかし、時が経ち、誰もいなくなった時にどうなるのか。私たちは、決して戦争体験者になってはいけない。しかし、「核抑止論」に決して惑わされず、被爆の実相や戦争・核兵器の非人道性を訴え続けていくことが私たちの使命であり、そしてそのような生徒を育てていくことが高校教員である私の責任である。ミーティングの総括であったように、何事も“理想論”では前に進まない。そして、今回のスイス派遣は「ミッション達成」ではなく、ここからが本当の「始まり」だと思っている。高校生のもつ力は本当に素晴らしい。今後も、それぞれの地元での活動に力を注いでほしい。全国に、高校生と大人の仲間が数多く存在することを励みに、私も前に進んでいく。

#### 【会計・救護 藤本 絵梨華（長崎）】

##### 微力だけど無力じゃない

第27代高校生平和大使は、今年もしっかりと役割を果たし、また来年への歴史をつなぐことが出来た。今年は、去年よりも進む円高に加え国内の物価高などの影響もあり、大幅に航空会社、日程など変更を余儀なくされたハードな日程になった。

例年最終打合せができる前泊も無く、到着したらすぐ仕事という日程で、まだ2回しか実際には会っていない27代はどこかよそよそしい感じで福岡国際空港に集合した。全員での準備時間が短いのが心配ではあったが、長崎行動の際すでにスピーチの完成度が高く、空港での待ち時間にしっかりと積極的に打合せや練習を行っていた。

実質3日間のスイス・ジュネーヴ滞在中、日本政府代表部や国連欧州本部など様々な機関を訪問した。高校生相手に現実論で論破し、具体的なアプローチについての回答はなく対話が必要との腑に落ちない回答ばかりを聞いた高校生は、自分たちの活動は、果たして理想なのか毎日の反省会の中で悩み、いろいろとモヤモヤとした心の内をみんなと共有しながら、だけど核廃絶は絶対で、これだけはブレてはいけないと再確認する姿を見ながら、私は、高校生の時の自分と重ねていた。

私が署名活動をしていた2001年にニューヨーク同時多発テロ事件が起こった。4機の米国国内線民間航空機がほぼ同時にハイジャックされ、米国の経済、軍事を象徴する建物に相次いで突入する自爆テロが行われた。日本人24人を含む2,977人が死亡、25,000人以上が負傷し、2001年の国際社会に最も衝撃

を与えた米国同時多発テロであった。映画のワンシーンのような航空機がビルに突入する瞬間ばかりが連日放送された。毎週日曜日の署名活動の後の会議では、自分たちの無力さを悲観し、長崎で活動する無意味さなど、とにかく後ろ向きの発言ばかりが増え、いつしか仲間も少なくなっていた。

しかし、私たち高校生の小さい力でも続けていればいつかは少しずつでも前進するのではないか。核廃絶、戦争のない平和な世界にする為に訴え続けていくことが大切だと再確認し、活動もしばらく休止にしようとする声がある一方で諦めないことの大切さがいつしかこの活動のスローガンの微力だけど無力じゃないという言葉に込められるようになった。何事も言うのは簡単で、理論上などでは、私達の活動を理想だと思うかもしれない。しかしながら、現実はどうなるか分からない。連日、世界でも予想できなかったことが起こっている。何が起こるのかわからないのが現実だ。その現実の生活の中に、かすかな希望があるとすれば、今後の世界の中心になる高校生たちではないだろうか。世界では、戦争などさまざまな平和な世界と程遠い現実がある。今後、高校生が各地で、自分が経験したことを署名メンバーに報告し共有しながら、またそれがほかの人に繋がっていく。平和の種まきがされて、どういう花になっていくのか。高校生平和大使には、任期はないと言われているが、みんなの各地での活動に今後とも期待したい。

#### 【全体掌握・記録 山本 圭介（東京）】

（高校生平和大使を支援する全国連絡会事務局）

昨年に引き続き、今回もスイス・ジュネーブ派遣に同行させていただきました。たった数日の日程ではありましたが、さまざまな経験とさまざまな出会い、そしていくらかのトラブルに満ちていて、非常に濃厚な日々でした。とりわけ、若く感受性豊かなみなさんにあっては大いに刺激を受けられたものと思います。

今回はビデオ撮影を中心に担当しましたが、カメラ越しにうかがうみなさんの表情も、日に日に自信あるものになっていたと感じています。熱意と努力があればこそ、成長が得られるものと思います。核廃絶に向けた情熱をいまいちど沸き立たせていかねばと、自分自身のありようをとらえ返す機会となりました。

今回の諸機関の訪問では、意見交換や質疑応答などにも積極的にとりくみ、どなたも誠実な対応をしていただいたものだと思いますが、そのなかで見え隠れする核抑止の存在を前提とする姿勢はいかんともしがたく、みなさんも少しショックを受けたと思います。

しかし、厳然としてある核抑止論を突破し、核兵器廃絶へと世界を動かし得るのは、やはり被爆の実相を継承し、核なき世界に向け行動するみなさんの真情なのだということに、ぜひ確信を持ってほしいと思います。

歴史をふり返っても、国家間での交渉だけで物事が決まってきたわけではありません。とくに平和や人権、環境などをめぐる重大な事柄については、各国を揺さぶり、叱咤し、前進をつくりだすうえで市民社会からの声と行動が大きな役割を果たしてきたし、私たちはその一翼を担っているのだという自信をもって、現状に立ち向かっていくことが求められているのではないのでしょうか。

今回の経験を家族や友人、そしてともにとりくんできた署名活動メンバーに

共有し、今後の活動に活かしていくという、地道ではあるけれど着実な積み重ねの先に、必ずや核なき世界の展望が拓かれると考えています。ともにがんばっていきましょう！

【全体掌握・記録 梅田 侑希（広島）】

自治労広島県本部

ジュネーブ派遣に同行して（感想）

8月18日～23日の6日間に及ぶ高校生平和大使のジュネーブ派遣へ、引率者として同行させて頂きました。

高校生平和大使の活動に関わらせて頂いて、初めて気づいたことの一つに、「平和でないといけない」「核兵器を廃絶しなければいけない」という多くの人がもつ共通の気持ちの背景は個々に異なるという点があります。

何故平和でなければいけないか、核兵器廃絶をしなければならないかという問いに対する広島で生まれ育った私の考えは、原爆によって引き起こされたような悲惨なできごとを二度と繰り返してはいけないというものです。私は広島市に生まれ育ちましたが、被爆経験のある都市として、「国際平和文化都市」とホームページ上で謳っている広島市で行われる平和学習は全国的にみても充実しています。幼稚園や保育園でも平和学習が行われていました。私が幼稚園で人生最初にした群読は、原爆に関するものです。原爆が投下された時刻である「午前8時15分」が割り当ての群読部分だったことを今でも覚えています。夏には決まって「はだしのゲン」が放送され、図書館には当たり前に関係の本が並んでいました。そういったある意味原爆ありきの平和学習が身近にある環境が当たり前でした。

平和と一概に言うのは簡単ですが、高校生平和大使の話聞いても、平和を語る際に使われる言葉は「原爆」、「広島」、「長崎」、「原爆投下候補地」、「第5福竜丸」というように多岐にわたりました。平和を希求する原点は、生まれた場所や育った環境によって異なるものだと感じます。それらを押し並べて聞き、考える機会はなかなかありません。

高校生平和大使の活動は、「平和でなければいけない」「核兵器を廃絶しなければいけない」理由を充実させることができる、貴重で有意義な活動だと今回実感しました。ジュネーブ派遣だけでなく、長崎や広島での行動を通して、高校生たちが平和について多くを学び、考える姿を見ました。戦争や核廃絶の背景への理解を充実させ、平和への想いを強化し、より具体的に訴えることに繋がっていました。その訴えを耳にした国際機関の職員が、広島や長崎の体験に想いを馳せ、平和への気持ちを新たに作る機会となったと確信しています。

私が所属している自治労広島県本部では、「高校生平和大使」の活動について、その「活動がこれからの平和運動に大きな希望を与えるものであるとして、引き続き積極的に財政等の支援をしていきます。」という方針で、平和を確立するための運動の一環として取り組みを行っています。今回、ジュネーブ派遣に同行したことで得た経験や知見を、所属である自治労広島県本部や連合広島に持ち帰り、高校生平和大使の活動意義についてしっかり共有することがまず最初に自分にできることかと思います。まずは自治労広島県本部の中でも報告会などできないか、小早川先生にお力添え頂きながら、企画検討できればと思っています。





## 4. HIROSHIMA NAGASAKI PEACE MESSAGE

### (1) フルスピーチ原稿

#### 1, 高佐安里

北海道から来ました高佐安里と申します。

今も世界では戦争が続いています。その映像を見るたびに、私は戦争で核兵器が使われるのではないかという危機感と恐怖で胸がいっぱいになります。

私は戦争が怖いです。そして、核兵器はもっと怖いです。それは、私が核兵器の非人道性を知っているからです。私に「あなたの戦争や原爆に対する恐怖心を忘れないで」と教えてくれた被爆者の方がいます。ヒロシマ・ナガサキにおける被爆の実相がどれくらい世界中の人に伝わっているのでしょうか。核兵器が使用されることの恐怖がどれくらいの人たちに共有されているのでしょうか。

戦後 79 年が経過し、広島・長崎の被爆者の平均年齢が 85 歳を超えました。被爆者は年々減少しています。そして、思い出したくない記憶であるために、被爆者の中でも自身の体験を語っている人はごく少数しかいません。このままでは、ヒロシマ・ナガサキの記憶が風化し、核兵器使用のリスクが語られることなく、紛争を優位に進めるためと称して核兵器のボタンを押す為政者が現われるかもしれません。

そんな為政者の暴走をくい止めてきたのは、何よりも被爆者の声です。被爆者が長い年月にわたり、核兵器による被害のおそろしさと一刻も早く核兵器をなくすべきであると訴え続けてきたからです。

私たちの世代は、被爆者の声を直接聞ける最後の世代と言われています。戦争の記憶や被爆の実相を風化させることなく、私は何があっても核兵器廃絶と戦争のない平和な世界の実現を求めて訴え続けます。

My name is Anri Takasa and I am from Hokkaido, Japan.

War has been going on all over the world. Every time I see the scene of war, I wonder if someone might use nuclear weapons. My heart is filled with a sense of crisis and fear. I'm afraid of war, but I'm especially afraid of nuclear weapons because I know the inhumanity of nuclear weapons. An atomic bomb survivor once told to me, "You must not forget the fear of war and nuclear weapons." How many people know the truth about radiation exposure in Hiroshima and Nagasaki?

Seventy-nine years have passed since the atomic bombings of Hiroshima and Nagasaki. The average age of the survivors is over eighty-five years old. They are dying one by one. But many of them do not want to remember their painful memories. Only a few survivors have dared to share their experiences. Memories of Hiroshima and Nagasaki are fading fast. Without knowing the risk of using nuclear weapons, some leaders may use nuclear weapons to gain the upper hand in war.

More than anything else, it is the voice of the survivors that can stop these people from getting out of control. For a long time, the survivors have been speaking out about the horror of the damage caused by nuclear weapons. We must eliminate them as soon as possible. We are the last generation to hear directly from the survivors. We should not forget the atrocities of war and radiation exposure. No matter what happens, we will continue to work for the abolition of nuclear weapons and for peace in the world.

## 2, 皆川舞奈

私は、北海道から参りました皆川舞奈です。

私の住む北海道は、日本列島の最北に位置し広島から 1800km、長崎から 2200km と遠く離れています。夏は 30 度、冬はマイナス 20 度と気温差は 50 度の厳しい環境です。しかし、そんな遠く厳しい環境の地に、1,000 人とも 2,000 人とも言われる被爆者が移住してこられました。それにはさまざまな理由が考えられますが、広島や長崎から遠く離れない、悲惨な悲しい思い出を忘れたいたいという思いもあったからでした。もう、誰一人、原爆被害により身も心も傷つき、生きていくことが辛くて、生まれ育った土地を捨てるようなことがあってはいけません。

一昨年、私は広島で被爆した傷だらけのピアノコンサートに係わる機会がありました。それは、私と同じ 17 歳のミサコさんのピアノでした。原爆投下時、爆心地から 1.8 km の民家で被爆し、爆風により、ガラスの破片がピアノの表面に突き刺さった傷やへコミ、擦り傷がいくつも残っています。広島に原爆が落とされた時、ミサコさんは兵器工場で働かされており、崩れた工場からやっと抜け出して家に帰ってみると、ドアや壁が吹き飛んだ家の中にピアノが傷だらけで残っていたそうです。私は、被爆したミサコさんのピアノを目の当たりにし、傷に触り、その音を聴き、許せないものは許さないと発信する勇気をもらいました。

核兵器は、歴史上最も残虐な兵器です。なんの罪もない市民を一瞬にして殺すだけでなく、生き残った人々にも心に深い傷を与えてきました。私は、こんな非人道的な兵器を許すことができません。私は、核兵器のない平和な世界をつくっていくために行動していきます。



My name is Mana Minagawa, and I am from Hokkaido. It is located in the northernmost part of Japan, 1,800 kilometers from Hiroshima and 2,200 kilometers from Nagasaki. The temperature varies by 50 degrees in a year. In summer it reaches 30 degrees Celsius in summer, while in winter it drops to minus 20 degrees Celsius. Despite this harsh situation, it is estimated that 1,000 to 2,000 atomic bomb survivors have migrated here. There are many reasons for this, but among them is the desire to live in a place far away from Hiroshima and Nagasaki, in order to forget the tragic memories. No one should ever have to leave their hometown because of physical and emotional suffering caused by nuclear weapons.

Two years ago, I had the opportunity to attend a concert featuring a piano that survived the Hiroshima bombing. The piano belonged to a girl named Misako, who, like me, was 17-years-old while the tragedy occurred. When the atomic bomb was dropped, the piano was in a house that was 1.8 kilometers from the hypocenter. The explosion left the piano with numerous dents, scratches, and shards of glass embedded in its surface. At the time of the bombing, Misako was working at a munitions factory. After managing to escape the collapsed factory and returning home, she found the scarred piano in a house with its doors and walls blown away. Seeing Misako's piano, touching its scars, and hearing its sound gave me the courage to speak out against what should never be forgiven.

Nuclear weapons are the most brutal weapons in history. Not only do they kill innocent civilians in an instant, but they also leave deep psychological scars on the survivors. I cannot tolerate such inhumane weapons. I am determined to work for a peaceful world free of nuclear weapons.

### 3, 佐藤凜汰朗

岩手県から来ました佐藤凜汰朗です。

私は太平洋に面した釜石という町で生まれ育ち、3歳の時に東日本大震災を経験しました。釜石市では、津波による死者・行方不明者数は1,000人を超え、全壊住宅も約3,000戸にのぼる甚大な被害が出ました。その一方で、日頃から防災教育を学んでいた市内の小中学生の多くは自ら避難し、ほとんどが無事でした。このことから、命を守る最善の行動をとることや想定にとらわれずに一人一人が率先して行動することは震災の教訓となっています。

震災から13年が経過し、津波によって破壊された街も元に戻りましたが、それと同時に震災の記憶も薄れていると感じます。それは、広島・長崎における核兵器による被害の記憶も同様です。被爆者の平均年齢は85歳を超え、高齢化が進んでいる今、原爆被害の記憶は私たちが語り継がなければ、いずれ忘れ去られてしまいます。

地震や津波は、人が作り出すものではなく、人の力で食い止めることもできません。しかし、戦争は人の手によって作り出され、核兵器も人の手によって作り出され、時の権力者の意思で多くの人の命を奪います。逆に言えば、戦争は人の手によって起こさせないこと、なくすこともできるのです。

もう二度と核兵器の犠牲を生まないために、私たちは戦争被爆国の若者として、先頭に立って核兵器のない平和な世界の実現を訴えていきます。

My name is Rintaro Sato and I am from Iwate Prefecture. I was born and raised in Kamaishi City, which is located on the northeastern coast of Japan.

When I was 3 years old, I experienced the Great East Japan Earthquake. In Kamaishi, more than 1,000 people died or went missing as a result of the tsunami and about 3,000 houses were completely destroyed.

However, many of the city's elementary and junior high school students, who had regularly studied disaster prevention, successfully evacuated. The lesson of the earthquake is that each person must take action to protect life beyond normal thinking.

It has been 13 years since the earthquake. Kamaishi has almost completely recovered from the damage of the tsunami, but I feel that the memory of the earthquake is gradually fading. The same is true of the memories of the damage caused by nuclear weapons in Hiroshima and Nagasaki. The average age of atomic bomb survivors is over 85 years old. As the population ages, the memories of the atomic bomb damage will eventually be forgotten if we don't pass them on.

Earthquakes and tsunamis are not man-made and cannot be stopped by humans. War and nuclear weapons, on the other hand, are created by humans and take many lives. War can be prevented or even eliminated by us. To prevent the atrocities of nuclear weapons, we, as young Japanese people, will take the lead in calling for the realization of a peaceful world without nuclear weapons.

#### 4, 畠山史子

岩手県から来ました畠山史子です。

私は小学校六年間を東日本大震災で被災した大船渡という町で過ごしました。震災から何年も間、私が通う学校の校庭には仮設住宅が立ち並び、友だちと楽しく遊ぶ場所が失われ、つらい思いをしたことを思い出します。79 年前の広島・長崎では、子どもたちの学び舎は破壊され、校庭には亡くなった人たちの遺骨が埋められました。また、現在戦争が続いている世界の地域でも、毎日学校に通うこともできずに、ましてや校庭で楽しく遊ぶ子どもたちの姿は見られません。戦争や震災は、子どもたちの日々の楽しみを奪い、子どもたちにたくさんのつらい記憶を残します。

東日本大震災当時、私の祖父は沿岸地域の病院で、必要物資を集め、被災した人達に配る仕事を任されました。その中でも、水不足が深刻でしたが、全国各地からトラックで、毎日何万トンもの水を運んできてもらって命を繋ぐことが出来たと話していました。また、海外の多くの国々から様々な支援を受けました。日常的に国際連帯の輪を広げ、平和で友好的な関係を築き続けることが大切であると感じます。

今年の春、私は韓国を訪れ、79 年前に日本で被爆し、その後韓国で暮らしているヒバクシャの方々と出会いました。核兵器被害の苦しみや、偏見や差別に苦しんだ体験を話してくださいました。韓国のみならず、世界各地にヒバクシャは存在します。核兵器によるものだけでなく、核実験場の周辺住民、ウラン発掘で働いている人達など、被曝の後遺症に苦しんでいる方々がいることを忘れてはいけません。

私は、ヒロシマ、ナガサキの被爆者のみならず、世界中のグローバルヒバクシャの平和への願いを受け継ぎ、核兵器廃絶を強く訴え続けます。



My name is Fumiko Hatakeyama from Iwate Prefecture.

I spent six years at my elementary school in the town of Ofunato, which was hit by the Great East Japan Earthquake. For years after the disaster, my schoolyard was lined with makeshift houses, and I remember how painful it was to lose a place where I could play happily with my friends. Seventy-nine years ago, in Hiroshima and Nagasaki, children's school buildings were destroyed and the remains of those who died were buried in the schoolyard. Even today, in regions of the world where war is still raging, children are unable to attend school every day, let alone play happily in the playground. Wars and earthquakes rob children of their daily joys and leave them with many painful memories.

At the time of the Great East Japan Earthquake, my grandfather was in charge of collecting essential supplies from hospitals in coastal areas and distributing them to those affected by the disaster. He told me that the water shortage was particularly severe, and that tens of thousands of liters of water were trucked in from all over the country every day to keep people alive. We have also received all kinds of help from many countries abroad. I think it is important to expand the circle of international solidarity and continue to build peaceful and friendly relations between countries.

This spring, I visited South Korea and met with hibakusha who were exposed to the atomic bombs in Japan seventy-nine years ago and have been living in South Korea ever since. They shared with me their experiences of suffering from the effects of nuclear weapons, prejudice and discrimination. Hibakusha live not only in South Korea but also in other parts of the world. We must not forget that there are people suffering from the aftereffects of radiation exposure, not only from nuclear weapons, but also from people living near nuclear test sites and people working in uranium mines. I will inherit the wish for peace not only from the hibakusha of Hiroshima and Nagasaki, but also from global hibakusha, and I will continue to strongly appeal for the abolition of nuclear weapons.

## 5, 長澤華咲

福島県から来ました、長澤華咲です。

2011年3月11日、東日本大震災が起こりました。最大震度7を観測し、私が住んでいる福島県でも大きな被害を受けました。福島県は地震被害だけでなく、津波や原子力発電所の事故の影響を大きく受けることになりました。

事故を起こした原子力発電所の近くに住んでいた人たちは、ふるさとを離れ避難した地域で、「放射線によって汚染されている」と心無い言葉を投げつけられました。そして、原子力発電所の事故から13年経過した今日でも、その多くが長年住んでいたふるさとに帰れない日々を送っています。

79年前のヒロシマ、ナガサキでも同じことが起こりました。核兵器は爆風と同時に放射線を放出し、熱線や爆風による被害から生き残った人たちのいのちを奪っていきました。そして、生存できたとしても、その後の人生を病気とともに過ごしていかなければいけませんでした。そして、伝染するという心無い言葉に多くの被爆者の心は傷つきました。

私は、「核と人類は共存できない」という広島で被爆された森滝市郎さんの言葉を思い起こします。私の住んでいる福島県で起こったことが、核兵器を使用することでもっとひどい被害を受けるといふ事実を知ってほしいと思います。一つ一つの出来事を自分の身におきたことだと思ってほしいです。共に悲しみ、自分には何ができるのか考えてほしいです。核によって被害を受けた私たちが言えることは一つです。大切な人を失わないために、核を廃絶しなくてはならない、絶対にあってはならないということです。平和の尊さを忘れず、当たり前前の日常を守るために、明日という存在をまもるために、私は行動し続けます。

My name is Kanon Nagasawa and I am from Fukushima Prefecture.

On March 11, the 2011, the Great East Japan Earthquake occurred. The maximum seismic intensity was seven on the Japanese seismic scale, and the damage was so severe in the Fukushima Prefecture where I live. Fukushima was not only affected by the earthquake, but also by the tsunami and the nuclear power plant accident.

People who lived near the nuclear power plant were forced to leave their hometowns. What's worse, some of the evacuees had to deal with the careless misconception that Fukushima was contaminated with radioactivity. Even today, 13 years after the nuclear accident, some people are still unable to return to their hometowns.

The same thing happened 79 years ago in Hiroshima and Nagasaki. Nuclear weapons emitted radiation when they exploded, killing those who survived the heat rays and blast waves. Even if they had survived, they had to live with illnesses for the rest of their lives. Many atomic bomb survivors have been hurt by the insensitive misunderstanding that radiation is contagious.

I am reminded of the words of Ichiro Moritaki, an atomic bomb survivor in Hiroshima, who said, "Humanity and nuclear weapons cannot coexist." I want people to know that what happened in Fukushima is that the use of nuclear weapons would cause much worse damage. I want you to take them all as your own problems. As one of those who have suffered from the nuclear accident, I call for the elimination of nuclear weapons to prevent the loss of loved ones. I will never forget the preciousness of peace, and will continue to act to protect our daily lives and our future.

## 6, 半谷優亜

私は福島県から来ました半谷優亜と申します。

13 年前の 3 月 11 日、東日本大震災が発生しました。その後、3 月 15 日に福島第一原子力発電所が水素爆発しました。私は当時 3 歳で、事故を起こした原子力発電所から〇〇k mの大熊町に住んでいました。私はそのときの記憶が全くありませんが、母親は私たち子どもを守りながら避難し、その避難先では「被爆者」として差別を受けたそうです。自分は悪いことをしていないのに、差別に苦しんだと母は言います。その話を聞くと、心が痛みます。

大熊町では、事故から 11 年経過した 2022 年 6 月に、町の一部で避難指示がようやく解除されたものの、ふるさとに戻る人は少ない現状にあります。このように、大量に放出された放射線は、自然豊かな私のふるさとを一変させたのです。

福島のような原子力発電所の大規模な事故が起きれば、そして核兵器が使用されるような事態になれば、一瞬にして多くの人の命や夢を壊してしまいます。今、核兵器が再び戦争で使われるのではないかという不安が広がっています。しかし、核兵器の使用は、唯一の戦争被爆国の国民として許すわけにはいきません。そして私たち家族は、原子力発電事故の被害者として原子力発電所の再稼働も許すわけにはいきません。

私は、世界中の人々が平和で安心した生活を送ることができるように、「ノーモアヒロシマ、ノーモアナガサキ、ノーモアフクシマ、ノーモアヒバクシャ」と声をあげ続けていきます。



My name is Yuua. I'm from Fukushima, Japan.

Thirteen years ago, on March 11<sup>th</sup>, the Great East Japan Earthquake occurred. Then on March 15<sup>th</sup>, there was a hydrogen explosion at the Fukushima nuclear power plant. I was three years old at the time, and lived in Okuma town, which was only two kilometers away from the nuclear power plant. I have no memory of it, but my mother evacuated to protect us children. As a victim of the nuclear accident, she was discriminated against even though it wasn't her fault. It hurts my heart to hear this story.

In June 2022, eleven years after the accident, the restrictions on entering parts of Okuma town were finally lifted. However, the fact is that very few people have returned to their hometowns even though the restriction is lifted. In this way, the large amount of radiation released by the disaster completely changed my hometown, which is rich in nature.

If such a large-scale nuclear power plant disaster were to occur, or if nuclear weapons were to be used, the lives and dreams of many people would be destroyed again in an instant. Now, there is a growing fear that nuclear weapons may be used again in war. However, as citizens of the only country to have suffered atomic bombings in war, we cannot condone the use of nuclear weapons. Also, as survivors of the nuclear power plant tragedy, my family cannot allow the plant to be restarted.

“No more Hiroshima. No more Nagasaki. No more Fukushima. No more Hibakusha.”

I will continue to raise my voice so that people all over the world can live in peace.

## 7, 田口七望

私は茨城県から来ました田口七望と申します。

茨城県初の高校生平和大使です。

私の住んでいる茨城県は、第二次世界大戦中、首都・東京に近いという地理的条件や、軍用航空機や航空機用エンジンの製造を行っていた日立製作所など軍事関係の施設が多かったことなどから、アメリカ軍の攻撃を受けて多大な戦災を被りました。特に1945年8月アメリカ軍による空襲が激化し、水戸市や土浦市など主要都市が広範囲にわたって破壊され、インフラや文化財が失われました。市民は安全を求めて避難し、生活の基盤を喪失した多くの人々が生活に困窮しました。

戦争がもたらす経済的・社会的な負担は大きく、長期間にわたって影響を及ぼします。戦争被害は単なる物理的な破壊だけでなく、精神的な傷跡も残します。戦争体験は県民にとっても深刻なトラウマとなりましたが、体験者は思い出したくないその記憶と向き合い、後世に語り継いできてくれました。その結果、今でも家族間で語り継がれ、地域社会では講演会や写真展などを通して語り継がれています。

同様に、ヒロシマ・ナガサキの被爆者も、核兵器がもつ破壊力の大きさゆえに体にも心にも深い傷を与えられました。しかし、二度と同じあやまちを繰り返してはならない、自分の子どもや孫たちには同じ苦しい思いをさせたくないという強い思いが、被爆者の心を奮い立たせ、あの日の出来事を語らせています。

戦争や原爆による被害の実相から学んだ教訓を次世代に伝え、世界に向けて平和のメッセージを発信し続けることが、私たちの使命です。今目の前にある日常を当たり前と思わずに、もう二度とあやまちを繰り返さないよう世界に訴えていきます。

My name is Nanami Taguchi and I am from Ibaraki Prefecture. I am the first Hiroshima/Nagasaki Peace Messenger from my prefecture.

Ibaraki Prefecture, where I live, was severely damaged by American air raids during World War II. This was partly because it was close to the capital Tokyo. There were also many military facilities such as Hitachi factories, which manufactured military aircraft and aircraft engines. In August 1945, US air raids intensified, causing widespread destruction of major cities such as Mito and Tsuchiura. Many infrastructure and cultural assets were lost. Citizens evacuated in search of safety, and many who lost their livelihoods found themselves in poverty.

The economic and social burdens brought about by war are enormous and have long-lasting effects. War damage leaves not only physical destruction but also psychological scars. The war experience has left the people of Ibaraki with serious trauma. However, they have confronted the war memories they don't want to remember and have passed them on to future generations. The stories have been shared among family members and in the local community through lectures and photo exhibitions.

Similarly, the atomic bomb survivors of Hiroshima and Nagasaki suffered deep physical and mental scars from the destructive power of nuclear weapons. However, their strong desire not to repeat the same mistake again and to prevent their children and grandchildren from going through the same pain has motivated the survivors to talk about what happened that day.

Our mission is to pass on the lessons of the past to the next generation and continue to send a message of peace to the world. I want you not to take your daily lives for granted. I will continue to make an appeal to the world not to repeat this mistake.

## 8, 永島安紗

私は、東京都から来ました永島安紗と申します。

私の住んでいる東京は、第二次世界大戦中に 100 回以上の空襲に見舞われました。その中でも最も過酷な空襲被害となったのが、1945 年 3 月 10 日の東京大空襲です。

わずか一晩のアメリカ軍による空爆により、約 10 万 5400 人の方が亡くなりました。

これは、1 日で亡くなった方の数でいえば、ヒロシマ・ナガサキでの犠牲者数を上回るものです。

その後も、東京への空襲は続き、多くの犠牲者が出ました。

しかし、通常の埋葬もできずに、約 8 万人の身元不明の遺骨が残されています。

広島の実験供養塔には、身元がわからない約 7 万人の犠牲者が眠っています。彼らは家族のもとに帰ることが叶わず、無念のうちに命を奪われました。生き残った人々も放射線被曝に苦しみ、後遺症に悩まされ続けました。核兵器はその破壊力によって、軍事目標だけでなく市民も無差別に巻き込みます。家族や友人、未来を失った人々の悲しみは計り知れません。核兵器の非人道性は明白です。私たちは核兵器のない平和な世界を実現するために、この悲惨さを訴える必要があると思います。

また、第二次世界大戦から 79 年が経過し、被爆者や戦争体験者の数は年々減少しています。このような戦争による被害を後世で出さないためにも、一刻も早く核兵器は廃絶され、平和な世界に近づくべきです。

I'm Asa Eishima from Tokyo.

Tokyo, where I live, was bombed over 100 times during World War II.

The most devastating attack was the air raid on March 10, 1945. In just one night, American bombers killed about 105,400 people.

This number is higher than the death toll of Hiroshima and Nagasaki in a single day.

The bombing of Tokyo continued, and many more lives were lost.

About 80,000 unidentified remains are still left without proper burial.

In Hiroshima, the Atomic Bomb Memorial Tower holds the remains of about 70,000 unidentified victims. These people have never returned to their families. They must have died in remorse. Atomic bomb survivors suffered from the aftereffects of radiation exposure. Nuclear weapons not only destroy military targets but also affect civilians indiscriminately. The grief of those who lost their families, friends, and future is immeasurable. The inhumanity of nuclear weapons is evident. We must share this tragedy to achieve a peaceful world without nuclear weapons.

79 years have passed since World War II, and the number of atomic bomb survivors and war veterans is decreasing every year. To prevent such war damage from happening again, nuclear weapons must be abolished as soon as possible, and we should work for a peaceful world without war.



## 9、萩有彩

神奈川県から来ました萩有彩です。

広島に原爆が投下された8月6日の朝8時15分、人々は朝食をとったり、仕事に出かけたりと、それぞれの日を始めようとしていました。長崎に原爆が投下された8月9日午前11時2分、朝から出されていた空襲警報が解除され、多くの中高生は兵器工場の作業に戻っていました。その時、一発の原爆が投下され、彼らの命と暮らしを無慈悲にも一瞬で奪いました。

そんな悲惨な過去があった事実を目を背け、緊張した国際情勢を背景に、核保有国の多くは配備数の増加に転じています。しかし、一度立ち止まって考えてみてください。この世界で誰が核兵器の被害にあうことを望んでいるのでしょうか。核兵器は私たちに何か利益をもたらすのでしょうか。私たち人類と核兵器は根本的に共存できないのです。核の脅威の下での平和などありえません。

私が暮らす神奈川県の横浜市は古くから国際都市として栄え、今も多様なルーツをもつ人たちが集まり、友好的な関係性を持ちながら生活しています。それは、国籍は違えども、お互いの文化や考えの違いを認め合ってきた歴史があったからです。だからこそ、今日ウクライナやガザで起こっている紛争と殺戮に胸を痛める日々です。一刻も早い戦争終結を求めます。

核兵器廃絶を訴えることは、時に終わりの見えない真っ暗なトンネルをさまよっているような感覚を覚えさせます。しかしそんな時、広島の被爆者であるサーロー節子さんの言葉が私を勇気づけます。

「諦めるな。頑張れ。光が見えるか。それに向かってはっていくんだ。」

私にとって、ヒロシマ・ナガサキは平和を願うエネルギーの源であり、これからも核兵器廃絶と平和な世界の実現を求めて粘り強く歩み続けていきます。

My name is Arisa Hagi, and I am from Kanagawa, Japan.

At 8:15 a.m. on August 6, 1945, as the people of Hiroshima were about to start their day, eating breakfast or going to work, a single atomic bomb was dropped on the city. And again, three days later at 11:02 a.m. on August 9, another single atomic bomb was dropped on Nagasaki. Just before the explosion, an air-raid alert was lifted, and many junior and senior high school students returned to their work in the weapons factories. These two bombs mercilessly took the lives and livelihoods of so many people almost instantly.

Ignoring such a tragic past, some countries with nuclear weapons are deploying still more against the backdrop of a tense international situations. But let us stop and think. Who on earth wants to be a victim of nuclear weapons? Do nuclear weapons benefit us? Fundamentally, human beings and nuclear weapons cannot coexist. There can be no real peace under the constant threat of nuclear weapons.

Yokohama City in Kanagawa Prefecture, where I live, has long flourished as a cosmopolitan city. Today people from diverse backgrounds live and work together peacefully there. This is because we accept each other's differences in culture and values, even though we are of different nationalities. That is why we are heartbroken by the conflicts and killings that are taking place in Ukraine and Gaza today. We call for an end to war as soon as possible. Sometimes, the pursuit of the abolition of nuclear weapons makes us feel as if we are wandering in a dark tunnel with no end in sight.

At such times, I am encouraged by the words of Setsuko Thurlow, a hibakusha from Hiroshima. She said, "Don't give up! Keep pushing! See the light! Crawl towards it." For me, Hiroshima and Nagasaki are the source of energy for peace. I will continue to walk persistently for the abolition of nuclear weapons and the realization of a peaceful world.

10, 西脇あかり

新潟県から参りました、西脇あかりです。

1945年7月25日、アメリカ軍は原爆投下最終目標地点として4つの都市を選びました。それは、広島、長崎、小倉、新潟でした。

アメリカ軍は新潟市への投下を想定して、私が暮らす長岡市に模擬原子爆弾パンプキンを投下し、市民4人が亡くなりました。

新潟市は、アメリカ軍の爆撃機が出撃するテニアン基地から遠いということもあり、第4番目の目標地点とされ、原爆が投下されることはありませんでした。

もし、新潟市に原爆が投下され、私の祖父母が被爆して亡くなっていたら、私はここにいなかったかもしれません。家族や友人、愛する人と共に生きるという私たちが日々感じている幸せが、一瞬で奪われたことでしょう。

もし私の町に原爆が投下されたら・・・と想像して考えてみるのが今何よりも大切です。核兵器を誰かが所持している限り、私たちはその恐怖から逃れることはできません。

今核兵器が存在する世界で生きている私たちは、誰もが生死の狭間にいます。今、世界各地で紛争が絶えません。相手に対抗するために軍備を増強しようとする考えを支持する人たちもいます。特に、核兵器はその破壊力ゆえに、保有国は手放すことなく、逆に配備を増強しようとしています。

私は彼らに問いかけたいです。それが本当に国の利益に繋がるのでしょうか。それが本当に人々の幸せを招くのでしょうか。

これからの未来を築くのは、私たちです。

平和な世界になるか、戦争の絶えない世界になるかは、私たちの手にかかっています。私は、戦争や核兵器によって苦しむ世界ではなく、誰もが幸せに暮らせる世界を作り出すために訴え続けていきます。

I'm Akari Nishiwaki from Niigata.

On July 25th, 1945, the US Armed Forces chose four cities as targets for the atomic bombings: Hiroshima, Nagasaki, Kokura, and Niigata.

They dropped a dummy atomic bomb, called the “pumpkin bomb,” on Nagaoka, where I live, as a training exercise to prepare for real nuclear attacks. Four citizens were killed by the dummy bombs in the city.

Niigata was far from the Tinian air base from which the US bombers launched, so it was considered as a fourth target. Eventually Niigata was spared from the atomic bombing.

If the atomic bomb had been dropped on Niigata, and one of my grandparents had been killed, I wouldn't be here. The joy of living with our loved ones could have been taken away in an instant.

It is now more important than ever for us to imagine what it would be like if an atomic bomb were dropped on our hometown. As long as there is war somewhere, and someone has nuclear weapons, we cannot escape from the fear.

This means that we all live between life and death. There is no end in sight to the conflicts. Some call for more armaments to fight against others. The countries that possess nuclear weapons don't want to give them up because of their destructive power, and have continued to modernize them.

Now I want to ask you.

Does it really benefit any country?

Does it really allow people to live in happiness?

It is we, the young, who will build the future. Whether we can build a peaceful world or a world of endless war is in our hands. I will continue to appeal to people all over the world to create a world where everyone can live happily without suffering from war and nuclear weapons.

## 1 1, 谷河優那

静岡県から参りました谷河優那です。

今年は、ビキニ事件から 70 年になります。

ビキニ事件とは、1954 年 3 月 1 日、アメリカが太平洋のビキニ環礁で行った水爆実験の事であり、広島型原爆の約 1000 倍の威力である水爆『ブラボー』が用いられました。

マーシャル諸島では、水爆ブラボーを含む計 76 回の核実験が行われ、住民達は、放出された放射線の影響で下痢や嘔吐、火傷などといった健康被害に見まわれました。そして、「ジェリーフィッシュ・ベイビー」（クラゲのような胎児）と呼ばれる、骨がない透明な肌をした赤ちゃんも沢山生まれました。

私の住んでいる静岡県から出港したマグロ漁船「第五福竜丸」も、爆心地より 160 キロ東方の海上で被ばくしました。実験により生じた「死の灰」（放射性降下物）を浴びた事によって、当時の乗組員 23 人の身体からは多量の放射線が検出されたのです。約半年後、無線長だった久保山愛吉さんは妻と幼い子供達を残して亡くなりました。人類初の水爆犠牲者でした。

一度使われてしまった核兵器は、国や人種、世代を超えて世界中に被害者を生み出します。私達は被害を受けた方々の犠牲と苦しみを決して風化させてはなりません。

水爆実験の犠牲になった久保山愛吉さんは、亡くなる直前に「私を最後の犠牲者にしてください」と言われました。

その言葉を胸に、私は核なき平和な世界が実現され、だれもが命の危険に侵される事なく幅広い人生の選択肢を持てる社会を、そして国や人種が違ってもそれぞれの価値観を受け入れて認め合える社会が実現できるように歩みを進めていきます。



My name is Yuna Yagawa, and I am from Shizuoka, Japan.

This year marks the 70th anniversary of the Bikini Incident.

The Bikini Incident was a hydrogen bomb test conducted by the United States at Bikini Atoll in the Pacific Ocean on March 1, 1954, using a bomb called “Bravo.” It was about 1,000 times more powerful than the Hiroshima-type atomic bomb. A total of 76 nuclear tests were conducted in the Marshall Islands, including Bravo. As a result, the residents suffered from health problems such as diarrhea, vomiting, and burns from radiation exposure. Many “jellyfish babies” were born with transparent skin and no bones.

The Daigo Fukuryu Maru, known in English as the Lucky Dragon, was a tuna fishing vessel that sailed from Shizuoka, where I live. It was also hit by the hydrogen bomb 160 kilometers east of the hypocenter.

The 23 crew members on board were exposed to radioactive fallout from the test, and their bodies were found to contain high levels of radiation. About six months later, Aikichi Kuboyama, the radio chief, died, leaving behind his wife and young children. He was one of the first human victims of the hydrogen bomb.

The use of nuclear weapons causes casualties around the world that transcend nations, races, and generations. We must never allow the sacrifice and suffering of these victims to fade away. Kuboyama said shortly before his death, “Please make me the last victim.”

Let us imagine. Imagine that your father, mother, brother, sister or newborn baby is exposed to radiation. Even a single nuclear detonation can cause enormous health problems and discrimination.

I hope that everyone can have a wide range of choices in their lives. I will continue to work for a peaceful world without nuclear weapons.

## 1 2, 稲中瑞希

大阪から来ました稲中瑞希と申します。

私は、戦争被爆国の国民として、二度と同じ過ちを繰り返さないことを、戦争や原爆で命を落とした人々に対して誓ってきました。しかし、今日世界では多くの場所で戦争が続いています。平和は誰かが作りだしてくれるものではありません。全世界の人々が平和を望み、それぞれの違いを認めて手を取り合い行動しなければ平和は存続しないのです。

79 年前、広島・長崎で何があったのか、どのようにして人がなくなっていくのか・・・全世界の人たちは知っているのでしょうか。被爆者は、「思い出したくない、忘れてしまいたい、伝えたくない。」と言われます。私たちからは想像もできない辛さ、苦しさ、恐怖がそこにはあります。しかし、同じ過ちを繰り返さないために、被爆者は忘れてしまいたい記憶を私たちに伝えてくれました。それは誰よりも世界の平和を望み、私たちの未来に希望を持っているからです。

だからこそ、私たちはヒロシマ・ナガサキで起こった惨劇を想像し、自分の身に起こった事として考えなければなりません。私たちは、被爆者から直接話を聴くことができる最後の世代です。戦争を経験した方々が年々減っていく中、私たち若い世代が広島・長崎の惨劇をすべての人々に伝え、核兵器の廃絶を訴える義務があります。

広島平和記念公園には、核兵器が存在する限り灯し続けられている「平和の灯」があります。私たちはこの火を一刻も早く消さなければなりません。そして、全世界の人がお互いの違いを乗り越えて、力による解決ではなく平和的な外交努力を続けていくことで世界の平和は実現できると、私はそう信じて活動していきます。

My name is Mizuki Inanaka, and I am from Osaka, Japan. As a citizen of the country that has experienced the horrors of war and atomic bombing, I want to pledge to those who lost their lives in those tragedies that we would never repeat the same mistakes.

Yet even today, wars continue in many places around the world. Peace is not something that someone else creates and gives to us. Peace can only be maintained if people all over the world want it, accept each other's differences, shake hands, and take action.

Can everyone in the world really imagine what happened in Hiroshima and Nagasaki 79 years ago? Do we know how people perished in the heat of the atomic bombs? Hibakusha, the atomic bomb survivors, often say, "I don't want to remember, I want to forget, I don't want to talk about it anymore." There is pain, suffering, and fear beyond our imagination. However, to ensure that the same mistakes are not repeated, the survivors have shared with us their memories, memories they would rather forget. This is because, more than anyone else, they want world peace and hope for a better future.

That is why all of us who are living today must imagine the horrors of the atomic bombings of Hiroshima and Nagasaki and take it as our own problem. We are the last generation to hear directly from the survivors. As the number of people who lived through the war decreases year by year, it is our duty, as the younger generation, to bring the tragedies of Hiroshima and Nagasaki to everyone in the world and to call for the abolition of nuclear weapons.

At the Hiroshima Peace Memorial Park, the "Flame of Peace" will burn until the day when nuclear weapons cease to exist. We must extinguish this flame as soon as possible. Then world peace will have been achieved through our collective efforts. I believe that peace can be achieved if people all over the world can overcome our differences and engage in peaceful diplomatic efforts instead of using force.

Yes, with this strong belief, I will devote myself to these activities.

Thank you.

### 13、細谷美優花

兵庫県から参りました細谷美優花です。

私が暮らす兵庫県神戸市は、現在国際貿易都市として大きく繁栄しています。

しかし過去には「神戸大空襲」という想像を絶する戦災があり、神戸の街はほぼ全焼しました。市民生活の徹底的破壊を目的とした無差別的・無限定的な攻撃は、罹災者53万人以上という惨禍をもたらし、市民は廃墟の中で終戦を迎えました。

広島・長崎に投下された原爆も同じように無差別で非人道的な兵器であり、多くの人々から未来を奪いました。広島平和記念資料館には子供の上着が展示されており、その説明には「一度も袖に手を通すことができませんでした」という言葉がありました。その言葉をみて、私は深く傷ついたことを覚えています。

そしてあの日、被害にあったのはその場にいた日本人だけではありません。留学生や外国人捕虜、大人から子供、性別問わずまさに「無差別的に」罪のない人々の命が奪われました。

このように、核被害は日本人だけに起こった惨禍ではありません。核兵器によって甚大な被害を被っている人々は、世界各地に存在します。度重なる核実験によって世界中の人々が放射線の影響を受け、後遺症や差別、貧困に苦しめられていることも忘れてはならないのです。

今日、核兵器保有国においては、いつでも運用可能な状況にある核弾頭が増えている現状にあります。核兵器によって守られる平和は、真の平和とは呼べません。私たちは、地球全体が支えあう持続的な平和に目を向ける必要があります。そのために、世界中のヒバクシャが願う核兵器廃絶を一日でも早く実現できるように、努力を重ねていかなければなりません。

My name is Miyuka Hosoya, and I am a high school student in Hyogo.

Kobe in Hyogo Prefecture is known as an international trading city. But the history of Kobe has another face – the people of the city experienced the Great Kobe Air Raid during World War II. This indiscriminate attack aimed to completely destroy the daily lives of the citizens. More than 530,000 people were affected by the air raid and the city was reduced to ruins.

Two months ago, I visited the Hiroshima Peace Memorial Museum. I found a child's jacket with the description, "I was never allowed to put my hand through the sleeves." I was really shocked to know that only this jacket was left behind and the child was gone. The atomic bombs dropped on Hiroshima and Nagasaki robbed numerous people of their future. Not only Japanese but also foreigners or prisoners of war were killed on that day. Adults and children, men and women, many innocent lives were taken indiscriminately.

Many people around the world have suffered greatly from nuclear weapons. Nuclear damage is not only inflicted on the Japanese. We must not forget that many people have suffered from the effects of radiation, disease, discrimination and poverty due to repeated nuclear tests. Today, the number of nuclear warheads ready for use at any time is increasing. Peace protected by nuclear weapons cannot be called real peace. We must eliminate the role of nuclear weapons and seek a sustainable peace supported by the people of the entire planet. We sincerely desire true peace and must continue our efforts to achieve the abolition of nuclear weapons as soon as possible.

#### 1 4, 藤本波音

奈良県から来ました、藤本波音です。

私が通う高校の校舎は、91 年前に建てられた歴史のある建物です。しかし、懂れていたその校舎は第二次世界大戦中の 1945 年に、日本軍の施設として提供されました。授業は停止され、生徒たちは勤労動員され、校舎の屋上には電波探知機、高射機関砲、防空監視施設が設置されました。学校が学ぶ場所としてではなく戦争のために使われたのです。校舎の壁には、今も機銃掃射を受けた跡が残っています。

また、7 人の生徒の命が失われました。私と歳が変わらない、その生徒たちの写真と名前が刻まれた碑が、校内に建てられています。私は、戦争がこんなにも身近に存在していることに衝撃を受けました。そして、これが私たち生徒に戦争について考えるきっかけをくれています。

戦争は、大切な人を理不尽に奪い去ります。79 年前のヒロシマ・ナガサキでも、原爆によって大切な父や母、兄弟姉妹、そして共に遊び、学校生活を送った友人もなにもかも奪われました。

たった一発で無差別に人々を傷付ける核兵器の廃絶なくして、世界の平和の実現は成しえません。戦争被爆国・日本の若者として被爆体験を継承し、私たちの活動は決して無意味ではないと信じて核兵器のない平和な未来のために、これからも訴え続けます。



My name is Hanon Fujimoto, and I am from Nara, Japan.

A building of my high school has a history of 91 years. Actually it also served as a facility for the Japanese army in 1945 during World War II. All classes were suspended, students were mobilized for war, and a radio detector, anti-aircraft guns, and air defense monitoring equipment were installed on the roof of the building. The school was turned into a war machine. There are still bullet holes on the wall of the building. Moreover, the lives of seven students who were in the same age as me were taken away. A war memorial with their photos and names was erected in the school. I was shocked to realize that war is so close to us. And this inevitably makes me think about war.

War unjustly takes away precious lives. In Hiroshima and Nagasaki 79 years ago, atomic bombs robbed people of their loved ones, including their fathers, mothers, brothers and sisters, and friends with whom they played and went to school.

Without the abolition of nuclear weapons, which indiscriminately harm people with a single blow, world peace cannot be achieved. As a young person from Japan, the only nation to have been hit by atomic bombs, I will inherit the experience of the atomic bomb survivors, and seek for a peaceful future without nuclear weapons, believing that our activities are not meaningless.

## 15, 甲斐なつき

私は広島県から来ました甲斐なつきと申します。

私の曾祖父は、原爆投下直後の広島市に救助活動のために入り、残留放射能を浴びて被爆しました。私は被爆4世になります。

曾祖父は原爆投下当時、広島市から約38km離れたところで、真夏の太陽光線を遮る不気味な閃光をみました。その後、広島市へ救助活動のために入り、歩いて爆心地付近まで行くと、黒焦げで性別も顔も全くわからなくなった多くの死体を目にします。そして、曾祖父は広島の惨状を目にしたときの思いを次のように書き残しています。

「地震や雷による被害なら諦めもつくが、人間が作り出した核兵器によるもので許すことができない」と。

人間らしく生きることも死ぬこともできなくなった人たちの姿に怒りを禁じ得なかったのだと思います。核兵器は存在自体許されてはならないものなのです。

このように、原子爆弾は無差別に罪のない人々の命を奪いました。多くの子どもたちの命も、ささやかな家庭の幸せも奪いました。目を閉じて、想像してみてください。もし今あなたの幸せが、夢や希望が、一瞬にして奪われたら、自らの故郷が草木一本も残さず一瞬にして消え去ったら、どれほど苦しく悲しいでしょうか。

核兵器がこの世に存在する限り、平和な世界は訪れません。「私たちのような被爆者を再び出してはならない」と被爆者の方々は訴えます。被爆者の方々が核兵器廃絶を求めて活動してきたバトンを私たちは受け取り、さらには次の世代にも繋いでいかなければなりません。

世界情勢が緊迫し、核兵器が脅しに使われるような今だからこそ、広島・長崎を訪れ、被爆の実相を知り、あの日の広島・長崎と向き合ってください。核兵器や戦争により苦しむ人が1人たりともいない未来を作るために。

My name is Natsuki Kai, and I am from Hiroshima. My great-grandfather entered Hiroshima City right after the atomic bomb was dropped to participate in rescue efforts and was exposed to residual radiation. I am a fourth generation hibakusha. Hibakusha means the people who survived the atomic bombing.

At the time of the atomic bombing, my great-grandfather saw an unusual flash that blocked out the midsummer sunlight from a place about 38 kilometers away from Hiroshima City. He then entered Hiroshima for rescue work. As he walked near the hypocenter, he found many bodies so charred that it was impossible to tell their sex or to recognize their faces. He wrote about his feelings as he witnessed the devastation in Hiroshima: "If it were an earthquake or lightning, I could accept it as it was, but this was caused by a human-made nuclear weapon, and I cannot forgive it." I think he couldn't contain his anger at seeing people who couldn't live or die in a humane way. The very existence of nuclear weapons is something that should never be allowed.

The atomic bombs indiscriminately took the lives of innocent people including children and the happiness of many humble families. Close your eyes and imagine: if your happiness, dreams, and hopes were to be taken away in an instant, and your home were wiped out completely in a moment, how painful and sorrowful would it be?

As long as there are nuclear weapons in this world, there will never be a peaceful world. The hibakusha would not allow others to experience the same tragedy. We must fulfill their wish for the abolition of nuclear weapons and pass it on to the next generation. Now, global tensions are rising and nuclear weapons are being used as a threat. We should know what happened in the past. Please visit Hiroshima and Nagasaki, and learn the reality of the bombings to create a future where no one suffers from nuclear weapons and war.

## 16, 佃和佳奈

私は広島県から来ました佃和佳奈です。

「道はがれきや倒れた人でいっぱいです。頭が割れた人、手足のない人、首がない人、背後から炎が迫ってきていました。私は、生死のわからない人の体を踏みつけながら逃げるしかありませんでした。自分が助かるためにみんなを見殺しにした。一番話したくない体験です。」これは、被爆者の方の話です。一番話したくない体験を、言葉を絞り出すように被爆者の方はなぜ語ってくださるのでしょうか？被爆体験を風化させてはならない、自分のような苦しみをだれにもさせてはならないという強い思いがあるからだと思います。

私たち人類はたくさんの悲惨な争いを繰り返し、多くの血を流してきました。中でも史上最悪の兵器である原子爆弾は多くの人々を殺戮し、今も被爆者を苦しめています。

先の大戦が終結してから79年が経とうとしているにもかかわらず、いまだに核兵器は存在します。

私は平和に対して、そして原爆に対して、「頭での理解」だけでなく、「心での理解」をすることが必要だと思います。「心での理解」とは原爆の悲惨さを直視し、被爆者の心に寄り添うことです。被爆者の地獄のような体験談を聞いたときに、私は「もう二度と繰り返してはならない、少しでも早く核兵器を廃絶しなければならない」、という焦燥感に駆られました。そして私にできることは、「自分たちのような苦しみをだれにもさせてはならない」という被爆者の方たちの心に寄り添い、その心を語り継いでいくことにあると確信しました。

79年前に日本の二つの都市で起こった悲劇を風化させてはいけません。私たちの心の中のフィルムにもしっかりと焼き付けて語り継いでいかなければなりません。

被爆者の平均年齢は85歳を超え、毎年多くの方々が亡くなっています。被爆者の平和への願いを私は心に刻み、唯一の戦争被爆国である日本人の一人としてこれからも核兵器廃絶を訴えていきます。社会を動かすのは人、そしてその人を動かすのは心です。聞いて下さい。私たちの心の声を。

I am Wakana Tsukuda from Hiroshima Prefecture.

“The streets are full of debris and fallen people, their skulls crushed and limbs missing. The flames were coming at us from behind, so I had no choice but to run away, trampling on the bodies of people I didn’t know if they were alive or dead. I let everyone die to save myself. It is the experience I hate talking about most.”

This is the story from an atomic bomb survivor.

Why do hibakusha talk about the experiences that they do not want to talk about, as if they are trying to wring out the words? I think it is because they have a strong desire not to let their atomic bomb experiences fade away and not to let others suffer as they did.

We human beings have repeatedly fought in many tragic conflicts, and much blood has been shed. Among them, the atomic bomb, the worst weapon in history, killed many innocent people and continues to torment hibakusha to this day.

Seventy-nine years have passed since the end of World War II, yet nuclear weapons still exist.

I believe that we must understand peace and atomic bomb not only from our minds but also from our hearts. Understanding from the heart means facing the horror of the atomic bombings and being close to the hearts of the hibakusha. When I heard the hellish stories of hibakusha, I was driven by a sense of urgency: This must never be repeated, and nuclear weapons must be abolished as soon as possible. I was convinced that what I could do was to be close to the hearts of hibakusha and pass on their feelings so that no one else would have to suffer as they did.

We must not let the tragedy that occurred in the two Japanese cities 79 years ago fade away. We must burn it firmly into our hearts and pass it on to the next generation.

The average age of hibakusha is over 85, and we are losing more every year. I will keep the hibakusha's wish for peace in my heart and continue to call for the abolition of nuclear weapons as a citizen of the only country to have been exposed to atomic bombs. It is people who move society, and it is their hearts that move them. Please listen to us. Listen to the voice of our hearts.

## 17、沖本晃朔

広島県から参りました沖本晃朔と申します。

79年前の1945年8月6日8時15分、世界で初めて原子爆弾が使用されました。非常に強力な破壊力を持つその爆弾は、多くの市民が日々生活を営んでいる都市広島市の頭上600メートルで爆発し、摂氏100万度を超える火球が作り出されました。爆発の瞬間、強烈な熱線と放射能が四方に放射されるとともに強烈な爆風が発生しました。

広島では、8月6日に10万人以上の人々が亡くなったといわれています。また、放射線は人体の奥深くまで入り込み、深刻な障害を引き起こしました。その後原爆を生き延びた人も、白血病やがんによって亡くなる人が増えてきました。現在も放射能による障害に被爆者は苦しんでいます。

当時広島市内に住んでいた私の曾祖母は、目の前で自分のいところが原子爆弾による爆風でオルガンの下敷きになる光景を目撃しました。しかし崩れゆく家屋の中で、彼女はいとこの生死を確かめる暇もなく、自らの命のために避難するしか選択肢は無かったと言います。曾祖母は数十年後寺の石碑に刻まれたいとこの名前を見るまで、あの日を境にいなくなった彼女の存在を破壊された町で確認する術は無かったそうです。いところを見捨てて逃げざるを得なかった曾祖母の気持ちを考えると、胸が痛くなります。

広島の平和記念公園にある原爆慰霊碑には、「安らかに眠って下さい。過ちは繰返しませぬから」という文言が刻まれています。私は「過ちを繰り返さない」の主語は人類全体だと思います。核兵器廃絶は、人類全員が共有すべき目標です。核なき世界は、世界中の人が望む未来です。私たちは全ての人々が核の脅威から解放される日まで、この思いを世界へ訴え続けていきます。



My name is Kosaku Okimoto. I'm from Hiroshima, the city where the world's first atomic bomb in human history was used. Seventy-nine years ago, the tragedy did happen. The bomb, with its extremely destructive power, exploded 600 meters above Hiroshima, creating a fireball of over one million degrees Celsius. Needless to say, there were many innocent people going about their daily lives on the ground. At the moment of the explosion, intense heat rays and radioactivity were released in all directions, and a powerful blast was generated.

It is estimated more than 100,000 people died in Hiroshima on August 6. In addition, radiation also penetrated deep into the human body, causing severe disabilities. Later, an increasing number of people who survived the atomic bombings died of leukemia and cancer. Even today, hibakusha are still suffering from radiation-related diseases.

My great-grandmother, who lived in Hiroshima at the time, saw her cousin being trapped under the piano by the atomic blast. In her crumbling house, she had no choice but to evacuate for her own life, with no time to find out if her cousin was alive or dead. My great-grandmother had no way of confirming her cousin's presence in the destroyed city until decades later, when she saw her cousin's name inscribed on a stone monument at a temple. It is heartbreaking to think of how my great-grandmother felt when she was forced to leave her cousin and flee.

The Cenotaph for the A-bomb Victims in Hiroshima Peace Memorial Park reads, "Let all the souls here rest in peace. For we shall not repeat the evil". I believe that the responsibility to "Never Repeat evil" lies with the entire human race. The abolition of nuclear weapons is a goal that should be shared by all humanity. A world without nuclear weapons is a future that people all over the world want. We will continue to make an appeal to the world until the day when all people are free from the threat of nuclear weapons.

## 18, 杉森世都

福岡県から来ました杉森世都と申します。

福岡県にある小倉という町は、戦時中には西日本最大の軍需工場があり、広島に次いで2番目の原子爆弾投下目標地でした。しかし、1945年8月9日当日の悪天候による視界不良のため、目標地は長崎へと変更されたのです。もし、小倉に投下されていたら、福岡県民のその後のくらしも大きく変わったものになったことでしょう。自分が住む町に原爆が投下されていたらと考えれば、戦争や原爆による被害は他人事ではなく自分事として考えられるはずです。しかし残念ながら、日本では過去の戦争の記憶や教訓について学校教育でふれられるものの、過去に起こった出来事としてとらえられ、今の問題、自分の問題としてとらえられる若者が少なくなっているのではないかと危惧します。

このように、多くの事実が伝えられずに忘れ去られていくことで、当事者であった人たちの証言や思いも失われていってしまいます。その結果、私たちは、痛みも忘れて同じことを愚かにも繰り返してしまうことにもなりかねません。

戦争は人の命を理不尽に奪い、一瞬にして大切なものを壊してしまいます。しかし、戦争の上に成り立つ平穏なくらしは、本当の平和と言えるのでしょうか。戦争の記憶を受け継ぐ私たちには、そんな悲惨なことを繰り返さないために声をあげ続けていく責任があります。

現在、被爆者の平均年齢は85歳を超えました。私たちに語ってくれる戦争経験者、被爆者は年々減少しています。福岡出身の医師で、アフガニスタンで医療や民生支援を長年行っていた中村哲さんの言葉に「平和には戦争以上の忍耐と努力が必要だ」というものがあります。平和創造のために、私たちには同じ過ちを繰り返さない責任があります。そのためにも、過去の経験を語りつぎ、継承していくとともに、忍耐強く核兵器廃絶を訴え続けていかなければなりません。私は戦争も核兵器もない世界の実現をめざして活動し続けます。

My name is Seto Sugimori and I am from Fukuoka Prefecture. Kokura, a city in Fukuoka Prefecture, was home to the largest munitions factory in western Japan during the war and was the second target of the atomic bombing after Hiroshima. However, due to poor visibility caused by bad weather on the day of August 9, 1945, the target was changed to Nagasaki. If the bomb had been dropped on Kokura, the lives of the people of Fukuoka Prefecture would have been very different. When we think about what would have happened if the atomic bomb had been dropped on the city where we live, we should be able to think of the damage caused by war and the atomic bomb as our own affair, not someone else's

Unfortunately, however, in Japan, although the memories and lessons from past wars are mentioned in school education, they are regarded as events that happened in the past, and I fear that not many young people are able to see them as current issues, or as their own problems. As many facts are forgotten, the testimonies and thoughts of those who were involved in the war are lost. As a result, we may forget the pain and foolishly repeat the same thing over and over again. War takes lives irrationally and destroys precious things in an instant. But is a peaceful life based on war a true peace? Those of us who have inherited the memories of war have a responsibility to continue to speak out to prevent the repetition of such tragedies.

The average age of Hibakusha is now over 85 years old. The number of war survivors and Hibakusha who are willing to share their stories with us is decreasing every year. In the words of Tetsu Nakamura, a doctor from Fukuoka who spent many years providing medical care and civilian assistance in Afghanistan, "Peace requires more patience and effort than war. For peacemaking, we have a responsibility not to repeat the same mistakes. To this end, we must continue to tell and share the story of our past experiences, while patiently advocating for the abolition of nuclear weapons. We will continue to work for a world without war and nuclear weapons.

## 19, 吉田光里

私は佐賀県から来ました吉田光里です。

原子爆弾が広島・長崎に投下されて今年で79年が経過します。私の住む地域は長崎県の隣に位置しており、被爆された方が多くいらっしゃいます。

被爆したけが人を運ぶ救護列車の車掌を務めていた男性は、「長崎に向かい列車を走らせ爆心地から1キロの地点に着くと、大勢のひどいやけどやけがをした方が乗り込んできた。まるで地獄絵図のようであり、忘れられない」と話されました。

また別の方は「被爆者であることが原因で差別を受け、自分が被爆者であることを隠していたし忘れてしまいたかった。しかし二度と被爆する人がいないよう私たちの経験を伝えていかなければならない」と語られました。

現在では、多くの被爆体験を伝える団体が解散し、被爆者の話を直接聞くことが難しくなっています。私たちは直接被爆者の話を聞くことのできる最後の世代だと言われています。

被爆者の使命が、二度と同じあやまちを繰り返さないために「被爆体験を伝えること」であるならば、私の使命はその体験をふまえて「核兵器を廃絶すること」です。平和は私たちが作り上げていかなければなりません。

核も戦争もない平和な世界の実現に向け、私は被爆者の声を伝え核兵器廃絶を訴えていきます。

Hello everyone. I'm Misato Yoshida. I'm from Saga.

This year marks 79 years since the atomic bombs were dropped on Hiroshima and Nagasaki.

My town is next to Nagasaki and is home to some bomb victims.

A train conductor who transported injured people after the atomic bombing recalls that many people with severe burns and various injuries boarded the train one kilometer away from ground zero. "It was like a nightmare. I still cannot forget the scene."

Another person said, "I had to endure discrimination because I was an atomic bomb survivor. I had to hide the fact that I was exposed to an atomic bomb. I tried to forget it, but I decided to share my experience to prevent another war."

Recently, many organizations that have recorded the experiences of the survivors have been disbanded.

As one of the last generation to hear directly from the survivors, I call for their stories to be shared. If the survivors believe that their mission is to share their experiences to prevent the use of nuclear weapons in the future, the mission of my generation is to abolish nuclear weapons. I will share their stories as widely as possible, so that we can make peace and prevent such catastrophes in the future.

## 20, 平野陽路

熊本県からまいりました平野陽路です。

被爆地・長崎に近い熊本県では、約 600 人の被爆者の方が生活されています。平均年齢は85歳を超え、被爆体験の継承は今日的な課題となっています。そのため、私たち熊本県で活動している高校生は、県内在住の被爆者の体験や平和への思いを紙芝居にして残し、語り継ぐ活動を行っています。

その中の一人である、今年 94 歳の浦田藤枝さんは、15 歳のときに長崎で被爆されました。自宅があった城山町に母と一緒に戻ったときに見たのは、人間の形をした黒い塊でした。それは焼け焦げた子どもの死体であり、首元にわずかに残った服の切れ端を見て、8 歳の妹の光江だと思いました。「光江！」母親は悲しみに絶叫しながら、妹の名前呼んで、その黒い塊を抱きしめましたがボロボロと崩れ落ちました。浦田さんは、原爆によって祖母と幼い妹や弟 4 人を失いました。

原爆による被害は、人のからだを傷つけるだけでなく、大切な家族を亡くした悲しみや自分だけ生き残った罪悪感のために、ころころにも深い傷を残しました。また、生き残った方たちも、放射能被害に対する周囲の無理解による差別に苦しみ、放射線を浴びた影響による病気とたたかいながら、過酷な人生を歩んでこられました。

被爆者の浦田さんは、「平和は誰かが用意してくれるものではなく、みんなでつかみとらなければいけない」と言われています。私は、これからの時代を生きていく若者の一人として、79 年前にヒロシマ・ナガサキで起こった原爆被害の事実を語りつぎ、現在そして未来において二度と同じあやまちを起こさないように、今こそ核兵器廃絶に向けて行動を起こしていくべきであることを訴え続けていきます。



Good afternoon, everyone. My name is Haruro Hirano, and I am from Kumamoto Prefecture.

Today, I want to tell you about the activities of high school students in Kumamoto. In Kumamoto Prefecture, which is located next to Nagasaki Prefecture, there are currently around 600 atomic bomb survivors. The average age of these survivors is over 85 years old, making the transmission of their experiences a pressing issue today. For this reason, we, the high school students in Kumamoto, have been interviewing the local survivors to hear their stories and their hopes for peace. We then turn these stories into picture-story shows to preserve and share them.

Fujie Urata, now 94, was 15 years old when she was exposed to the bombing in Nagasaki. When she and her mother returned to their home in hypocenter, they found the charred corpse of a child. A small piece of clothing around the neck indicated that it was her 8-year-old sister, Mitsue. Her mother, overwhelmed with grief, cried out "Mitsue!" and embraced the blackened figure. But as she embraced her, the body crumbled apart. Fujie lost a total of four family members, including her grandmother, sister, and brother.

The atomic bomb not only took many lives in an instant but also left deep scars on the hearts and bodies of those who survived. In addition to the grief of losing their loved ones, many felt guilty for being the only ones to survive. While battling illnesses caused by radiation exposure, they also suffered from prejudice and discrimination due to the misunderstanding about radiation damage, leading to harsh lives.

Survivor Fujie Urata says, "Peace is not something that someone will prepare for us; we must seize it ourselves." As one of the young people who will live in the coming era, I will continue to share the facts about the atomic bombings of Hiroshima and Nagasaki 79 years ago. I will continue to advocate for the abolition of nuclear weapons, so that the same mistake will never be repeated in the present or in the future.

## 2 1, 花崎太智

大分県から来ました花崎太智です。

1939 年、今から 85 年前。大分県宇佐市に海軍航空隊が開隊されました。この町は、私が通う高校がある場所です。戦地に向かう搭乗員のほとんどが、この地で宇佐で飛行訓練を行っており、その多くは私と同世代の若者でした。未来ある命が、私の暮らす町から戦地に向かい、その多くが帰ることができなかったことを考えると、悲しさ、悔しさが込み上げてきます。

私は 12 歳の時、ハワイのパールハーバーを訪れる機会がありました。「アメリカから日本を訪れる観光客は広島・長崎の原爆資料館を訪れるが、日本から来た観光客は買い物ばかりで、戦跡を訪れることはめったにない」というガイドの言葉が印象に残っています。実は真珠湾攻撃の第一弾を投下した日本人は、宇佐海軍航空隊の初代艦爆飛行隊長と言われています。パールハーバーには今でも日本軍に撃たれた弾の跡や、奇襲により沈められた戦艦が残されています。

私は初めて、戦争加害者としての立場から戦争について考えることになりました。日本軍による真珠湾奇襲攻撃がなければ、ナガサキ・ヒロシマへの原爆投下がなかったかもしれません。戦争とは、被害者、加害者の双方の立場から見ることで初めて理解していけるのだ、と感じました。

戦争の記憶、平和の大切さを伝えていくのは現代を生きる私たちの大きな使命です。もう二度と戦争を起こさない、起こさせないためにも、核兵器の非人道性を学び、平和の尊さを発信していきます

My name is Hanazaki Taichi from Oita Prefecture in Japan.

In 1939, 85 years ago, the Naval Air Corps was opened in Usa City, Oita. My high school is in this city. Most of the crew who went to war received their flight training here, and many of them were young men of my generation. I am filled with sadness and regret to know that so many promising young men left my city for the battlefields, and that many of them did not return.

I had the opportunity to visit Pearl Harbor in Hawaii when I was 12 years old. I was impressed by the tour guide's comment that US tourists who visit Japan often go to the Hiroshima and Nagasaki Atomic Bomb Museums, but Japanese tourists do nothing but to shop and rarely visit war remnants. It is said that the first ship bomber squadron commander of the Usa Naval Air Squadron dropped the first bombs in the attack on Pearl Harbor. Pearl Harbor still bears the marks of bullets fired by the Japanese forces. The battleships sunk in the surprise attack are also still there.

My visit to Hawaii gave me the opportunity to think about war from the perspective of the perpetrators. Without the Japanese attack on Pearl Harbor, the atomic bombings of Nagasaki and Hiroshima might not have happened. I felt that war can only be understood from the perspective of both the victims and the perpetrators.

It is our great mission today to convey the memory of war and the significance of peace. To prevent another war from happening again, we will continue to learn about the inhumanity of nuclear weapons and to call for peace.

## 22、大原悠佳

長崎県から来ました大原悠佳と申します。

一九四五年八月九日十一時二分、一発の原子爆弾が長崎の青い空で炸裂し、街は一瞬にして火の海となり、血に染まった地獄のような状況となりました。

全身を熱線に焼かれ水を求めながら亡くなっていく人たち、首のない赤ちゃんを背負う母親、死んでいる母親の背中を這う赤ちゃん、崩れた家の下敷きになって生きながら焼かれていった人たち。被爆後、あちこちで死体が焼かれ、死臭が漂い、たくさんの遺骨は埋葬されることも弔われることもなく、その場に放置されたままでした。

生き残った被爆者の方々は、今もあの日のことが頭から離れず、考えるだけで涙があふれ、震えが止まらないほど、心に大きな傷を負いました。そして、多くの被爆者が後遺症と闘いながら日々を過ごしています。

私たちは決して忘れてはいけません。核兵器や戦争により、多くの子どもらの尊い命が奪われたことを。どうにか生き延びた子どもらも、大切な家族や家を失い、孤児となり苦しんだという過去があることを。

私の母校である城山小学校でも原爆により千四百名以上の子どもらが犠牲となりました。「灰色一色の校庭には真っ黒に焦げた死体、骨になった死体のごろごろと重なり合う。皮膚はただれ、ガラスの破片が刺さり血を流す人々が助けを求めてくる。正に生き地獄とはこんな処かと思った。」城山小学校で被爆し生き残った方々はこう語ります。核兵器は一瞬にして、平和で安全に生きる権利や人間らしく死ぬ権利を奪う非人道的な兵器です。もう二度と使ってはいけません。廃絶していかなければいけません。

しかし、今世界では戦争や紛争が各地で起こり、罪のない多くの人々の命が奪われています。そして、同時に核兵器使用のリスクが高まっています。また、被爆者の方々は高齢のため、自身の体験を語り続けることが難しくなっています。

私は、被爆者の方々の体験談を聞き、戦争の愚かさや核兵器の被害の酷さを学んできました。そして、被爆者の方々が今もなお平和

創造のために活動する姿を見てきました。「二度と被爆者をつくってはいけない」という被爆者の強い思いや、核廃絶に向けて活動してきた歴史を風化させず、私は世界へ、後世へと訴え続けていきます。

私は、被爆地である長崎で生まれ育った被爆三世として、祖母や曾祖叔母をはじめとする被爆者の方々から核兵器廃絶への強い思いを託されました。私たちには「長崎を最後の被爆地に」という被爆者の方の切なる願いを発信し、核なき平和な世界を創っていく使命があるのです。

耳を傾けてください。核廃絶を求める被爆者の声に。立ち止まって考えてください。七十九年前の広島・長崎の被爆の実相から「核と人類は共存できない」という事実を。そして、今こそ核廃絶へ向けた行動につなげていくべきです。

I am Yuka Ohara, and I am a high school student from Nagasaki.

At 11:02 a.m. on August 9th, 1945, a single atomic bomb exploded in the sky over Nagasaki, instantly turning the city into a sea of fire and a blood-soaked hell.

People were burned to death by the intense heat rays, with many begging for water as they died. Mothers carried headless babies on their backs, babies crawled on the backs of their dead mothers, and people were burned alive, trapped under collapsed houses. After the bombing, blackened bodies were left scattered here and there, and the smell of death lingered in the air. Many bodies were abandoned, neither buried nor mourned.

The surviving atomic bomb survivors still cannot get the memories of that horrible day out of their heads, and just the mere mention of it brings tears to their eyes, leaving them in such a traumatized state, that they can't stop shuddering. Many survivors are still living with the effects of the bombing to this day.

We must also never forget that nuclear weapons and war took the precious lives of many children. Even those children who somehow managed to survive lost their families and their homes, and continue to suffer as orphans. At the Shiroyama Elementary School where I studied, more than 1,400 children were killed in the atomic bombing.

"The gray schoolyard was littered with charred bodies and skeletal remains. Wounds and shards of glass pierced their skin, and bleeding people cried out for help. I thought, "This is what a living hell is truly like."

This is how atomic bomb survivors from Shiroyama Elementary School recounted their experiences. Nuclear weapons are inhumane arms that deprive people of their right to live in a peaceful and safe world, and their right to die with dignity as human beings. We must eliminate them from society. They must never be used again.

Today, however, wars and conflicts continue in many parts of the world, claiming the lives of many innocent civilians. At the same time, the risk of nuclear weapons being used again is steadily increasing as regional hostilities escalate. In addition, survivors of the 1945 bombings are getting older. It is becoming increasingly difficult for them to recount their experiences.

I have listened to the stories of several survivors and learned about the folly of war and the terrible damage caused by nuclear weapons. I have also seen how the survivors continue to fight for peace. I promise to carry on their legacy by appealing to the world and to future generations so that their activism for nuclear abolition and their aspiration to "never create another atomic bomb survivor", won't be lost to time.

As a third-generation atomic bomb survivor, born and raised in Nagasaki, I



have been entrusted by my grandmother, my great-great aunt, and other survivors with their never-ending desire for the total abolition of nuclear weapons. Our mission is to keep passing down their heartfelt wish to "make Nagasaki the last atomic-bombed city" and to create a peaceful future for all, without the threat of nuclear Armageddon.

Please listen to the voices of the atomic bomb survivors and those of us who are calling for an end to these horrific weapons of war. Please just stop and think. The reality of the atomic bombings of Hiroshima and Nagasaki seventy-nine years ago clearly shows us that humanity is incapable of coexisting peacefully with such weapons of mass destruction. So now is the time for action. We must abolish nuclear weapons entirely and fight for disarmament, so that such a tragedy can never happen again. Thank you.

## 23, 津田凜

長崎県から参りました。津田凜と申します。

1945年8月9日、長崎に一発の原子爆弾が落とされました。長崎の当時の人口約24万人のうち、約7万4千人がその年のうちに亡くなりました。

私が通う長崎東高校でも、原子爆弾により約300人の生徒が犠牲になりましたが、助かった生徒の1人に、のちに作家として原子爆弾による被害をテーマにした文学作品を数多く残した林京子さんがいます。彼女は14歳のときに爆心地から1.4キロの所で被爆しましたが、瓦礫の中から這い出て奇跡的に助かり、86歳で亡くなるまで作品を通して核兵器の脅威を訴え続けました。

「原爆は単なる兵器じゃない。後々まで人類にどう響くか。自分だけの問題なら私は書いていません。」

彼女が述べたこの言葉を聞いて、私は原子爆弾による被害、特に放射線被害は、過去で終わることなく、現在でもその影響に怯え、未来にまで人体や環境に悪影響を及ぼしていくもので、この世に存在してはいけないものであると強く思います。

長崎市内でくらしていた私の祖父も3歳のときに被爆しました。原子爆弾が投下された時、兄弟と川で泳いでいて、姉に背負われて防空壕に逃げたことを覚えていました。原爆は3歳の記憶にも残る出来事だったのです。現在祖父は、放射能の影響と思われる癌と闘っています。

私は被爆3世として、被爆地・長崎の若者として、世界中の人に核兵器の廃絶を訴えていきます。そして、「私たちが経験してきた、つらく苦しい思いを誰にもさせたくない」という被爆者の方たちの思いを受け継ぎ、核兵器廃絶と平和な世界の実現のためにできることを考え、行動に移していきます。

Thank you all for taking the time to speak with us today. My name is Rin Tsuda and I'm from Nagasaki, Japan.

I would like to talk about the effects of the atomic bomb and the feelings of the survivors over the past 79 years. On August 9th, 1945, an atomic bomb was dropped on Nagasaki. At that time, the population of Nagasaki was about 240,000, and approximately 74,000 people died by the end of that year.

At my school, Nagasaki Higashi High School, about 300 students died in the bombing. One of the students who survived was Kyoko Hayashi, who later wrote many literary works about the damage caused by the atomic bomb. She was only 14 years old when she was exposed to the bomb 1.4 kilometers from the hypocenter. Miraculously, she crawled out of the rubble and survived. She continued to warn of the dangers of atomic bomb in her writings until she passed away at the age of 86. She said,

“The atomic bomb is not just a weapon. The effects of the atomic bomb on humans is ever-lasting. If it were only my problem, I would not continue to write.”

Her words mean that the damage from the atomic bomb, especially radiation, did not end in the past. Even today, the survivors are still suffering from the aftereffects of the bombing. The atomic weapon can also harm the human body and the environment even for the second and third generations.

My grandfather, who lived in Nagasaki, was also exposed to the atomic bombing at the age of three. He remembers that he was swimming in the river with his brother at the time of the bombing. His sister then carried him on her back and fled to an air-raid shelter. The atomic bombing is an event that even a three-year-old boy can remember. My grandfather has been fighting against cancer, which is probably caused by radiation exposure. Therefore, for the sake of people and the environment to live in the future, nuclear weapons should not exist in this world.

As a third-generation atomic bomb survivor and a teenager from Nagasaki, the last city to have suffered from an atomic bombing, I appeal to people around the world to abolish nuclear weapons. In addition, I would like to pass on the survivors' wish that no one else should have to go through the same painful experiences. I will think about what I can do for the abolition of nuclear weapons and the realization of a peaceful world, and I will strive to put these ideas into action.

## (2) 国連軍縮部リレースピーチ

### ① 【 1 Hiroshima Kosaku Okimoto 】

Thank you very much for giving us this opportunity today. We are the Hiroshima/Nagasaki Peace Messengers. We are 23 high school students selected from all over Japan. In each of our regions, we are working for the same goal: the abolition of nuclear weapons and the realization of a peaceful world.

Today, many countries justify nuclear weapons based on the theory of nuclear deterrence, but I have to say that it doesn't work anymore. The Russian invasion of Ukraine indicates the limitations of the theory. The war has made it clear that nuclear weapons cannot stop war. Even the threat to use nuclear weapons can make people frightened. And this is also the case in the Israeli-Palestinian conflict.

Today, the world is plunging into chaos. As one of those who know the atrocities of nuclear weapons, we pledge to make their harm known to the world.

### 【 2 Nagasaki Rin Tsuda 】

Seventy-nine years ago, the atomic bombs took the precious lives of many people in Hiroshima and Nagasaki. Above all, the threat of the atomic bombs has left a lasting impact on the survivors for decades in the form of the grief over the loss of their family members and friends and the life-threatening aftereffects. Nevertheless, the hibakusha continue to look back on their memories that they do not want to remember, and share them with us in the hope of making peace in the future. It is now our turn to make the world aware of the reality of nuclear weapons and the importance of peace. In any case, Hiroshima is and will be the city that suffered the first atomic bomb. However, if a country uses nuclear weapons, Nagasaki will change from "the last city to have suffered a nuclear attack" to "only the second city to suffer a nuclear attack." And as we all know very well, given the current state of world affairs, this can really happen. It is the mission of our generation to stop it. We may not be able to change the world immediately and dramatically. But, through our activities, we want to make gradual progress toward a nuclear-free world. Now some of us are going to make speeches about peace.

## ① 【 1 広島 沖本晃朔 】

本日はこのような時間を頂きありがとうございます。私たちは日本全国から選ばれた、高校生平和大使 23 名です。各々の地域で、核兵器の廃絶と平和な世界の実現という同じ思いを抱きながら、日々活動しております。

現在、核抑止論を前提に核兵器の存在を肯定している国家は多くありますが、それは機能しているとは言えません。2 年前のウクライナ侵攻では、抑止力の名の下に存在していた核兵器が戦争を止められないこと、核兵器は存在しているだけで「使用の示唆」という脅しが可能であり、人々に不安を与えていることが明白になりました。そしてその核による恐怖は、イスラエル・パレスチナ間で今日まで顕著に現れています。このように、核兵器の存在意義が改めて問われている今だからこそ、過去の惨劇を知る私たちが世界に核兵器の悲惨さを訴え続けて行く必要があります。

## 【 2 長崎 津田凜 】

79 年前落とされた原子爆弾によって、広島、長崎では多くの人が尊い命を奪われました。

そして何より、生き残った方々にも原子爆弾の脅威は、家族や友人を無くした悲しみ、いつ命を奪うかわからない後遺症となって、何十年もの間残っています。それでも被爆者の方々は、思い出したくもない過去を見つめ、未来のために私たちに経験と平和の尊さを伝え続けてくださっています。これからは次世代を担う私たちが世界に被曝の実相と平和の大切さを伝え続けなければなりません。これからも広島が最初の被爆地ということは変わりません。しかし、もしどこかが核兵器をつかったら、「最後の被爆地」長崎は「2 番目の被爆地」に変わってしまいます。そして、私たちが知っている通り、今の世界情勢では最後の被爆地が変わってしまう可能性があるのです。長崎を最後の被爆地にできるかどうかは私たちの世代にかかっているのです。「微力だけど無力じゃない」すぐ劇的に世界の形を変えることができなくても、この活動を通して少しずつ核なき世界の実現に向かって歩んで行きたいです。それでは私たちの平和への想いを聞いてください。

## **② 【 3 Hiroshima Natsuki Kai 】**

My name is Natsuki Kai, and I am from Hiroshima. My great-grandfather entered Hiroshima City right after the atomic bomb was dropped to participate in rescue efforts and was exposed to residual radiation. I am a fourth generation hibakusha. Hibakusha means the people who survived the atomic bombing.

At the time of the atomic bombing, my great-grandfather saw an unusual flash that blocked out the midsummer sunlight from a place about 38 kilometers away from Hiroshima City. He then entered Hiroshima for rescue work. As he walked near the hypocenter, he found many bodies so charred that it was impossible to tell their sex or to recognize their faces. He wrote about his feelings as he witnessed the devastation in Hiroshima: "If it were an earthquake or lightning, I could accept it as it was, but this was caused by a human-made nuclear weapon, and I cannot forgive it." I think he couldn't contain his anger at seeing people who couldn't live or die in a humane way. The very existence of nuclear weapons is something that should never be allowed.

## **【 4 Nagasaki Yuka Ohara 】**

At 11:02 a.m. on August 9th, three days after the atomic bombing of Hiroshima, a single atomic bomb exploded in the sky over Nagasaki, instantly turning the city into hell. The city was littered with charred bodies and skeletal remains. People were burned to death by the intense heat rays, with many begging for water as they died. People were burned alive, trapped under collapsed houses. People cried out for help as their skin melted and their internal organs fell out of their bodies. After the bombing, the smell of death lingered in the air. Many bodies were left here and there, neither buried nor mourned. This is what my grandmother told me about the situation of that day.

In Nagasaki that day, more than 70,000 innocent precious lives were lost in an instant. Even those who somehow managed to survive were left with severe physical injuries, lost their precious families, friends and their homes, suffered discrimination and were forced to live lonely and painful lives. These people are still suffering from the effects of the bombing to

this day. The atomic bomb survivors still cannot get the memories of that horrible day out of their heads, and just the mere mention of it brings tears to their eyes, leaving them in such a traumatized state, that they can't stop shaking. Nevertheless, the atomic bomb survivors have a strong desire not to let their experiences of the atomic bombings fade away and to "never create another atomic bomb survivor." They continue to raise their voices and say that humanity cannot coexist peacefully with such weapons of mass destruction.

## **【 5 Hiroshima Wakana Tsukuda 】**

Thanks to the, we are now able to make an appeal to the world in this way about the horror and inhumanity of nuclear weapons. It is not enough to understand the hibakusha's earnest wish only in our minds . We have to understand it deeply in our hearts. It means facing the horror of the atomic bombings and being close to the hearts of the hibakusha. The average age of hibakusha is now over 85, and they are dying every year. That is why we, who have the privilege of hearing directly from hibakusha, must pass on their message that "we must not let anyone else suffer as we did."

We will keep the hibakusha's wish for peace in our hearts and continue to call for the abolition of nuclear weapons as citizens of the only country that has experienced the horror of nuclear weapons in war. It is people and their hearts that move society. Please listen to us. Listen to the voice of our hearts.



## ②【3 広島 甲斐なつき】

私の曾祖父は、原爆投下直後の広島市に救助活動のために入り、残留放射能を浴びて被爆しました。曾祖父は広島に原爆が投下された1945年8月6日8時15分、広島市から約38km離れたところで、真夏の太陽光線を遮る不気味な閃光をみました。その後、広島市へ救助活動のために入りました。歩いて爆心地付近まで行くと、黒焦げで性別も顔も全くわからなくなった多くの死体を目にします。そして、曾祖父は広島の惨状を目にしたときの思いを次のように書き残しています。「もしこの惨状が自然災害によるものであるなら諦めもつくが、人間が作り出した核兵器によるもので許すことができない」と。人間らしく生きること、人間らしく死ぬこともできなくなった人たちの姿に怒りを禁じ得なかったのだと思います。広島では、その年のうちに14万人もの尊い命が失われました。核兵器は存在自体許されてはならないものなのです。

## 【4 長崎 大原悠佳】

広島原爆の三日後の八月九日十一時二分一発の原子爆弾が長崎の空で炸裂し、街は一瞬にして地獄のような状況となりました。真っ黒に焦げた死体、骨になった死体のごろごろと重なり合う。全身を熱線で焼かれ水を求めながら亡くなっていく人たち、崩れた家の下敷きになって生きながら焼かれていった人たち、皮膚がただれ、内臓が飛び出ながら助けを求める人たち。被爆後も、死臭が漂い、たくさんのお骨は埋葬されることも弔われることもなく、その場に放置されたままだった。これは私の祖母が語ってくれた当時の長崎の状況です。

長崎ではあの日、一瞬にして七万人以上の罪のない人々の尊い命が奪われました。どうにか生き延びた人々も身体に大きな傷を負い、大切な家族、友人、家を失い、差別を受け、孤独で苦しい生活を強いられました。さらに、今もなお多くの方々が後遺症に苦しめられているのです。また、被爆者の方々は、今もあの日のごことが頭から離れず、考えるだけで涙が溢れ、震えが止まらないほど、心に大きな傷を負っています。それでも、被爆者の方々は、被爆体験を風化させてはいけない、もう二度と被爆者をつくらぬようにと「核と人類は共存できない」と、声を上げ続けているのです。

## 【 5 広島 佃和佳奈 】

そして、そのおかげで私たちは、今このように核兵器の恐ろしさや非人道性を世界に訴えることができるのです。被爆者の方々の核廃絶を願う切なる願いや平和への強い思いに対して、私たちは「頭での理解」だけでなく「心での理解」をしなければならないと思います。「心での理解」とは原爆の悲惨さを直視し、被爆者の方の心に寄り添うことです。被爆者の平均年齢は85歳を超え、毎年多くの方が亡くなっていきます。だからこそ、被爆者の方々から直接話を聞いてきた私たちは「自分たちのような苦しみをだれにもさせてはならない」という被爆者の方たちの心に寄り添い、その心を語り継いでいかなければならないと確信しています。

79年前に日本の二つの都市で起こった悲劇を風化させてはいけません。私たちの心の中のフィルムにもしっかりと焼き付けて語り継いでいかなければなりません。

被爆者の平和への願いを私たちは心に刻み、唯一の戦争被爆国である日本人の一人としてこれからも、核兵器と平和は共存できないこと、そして、核兵器廃絶を訴えていきます。社会を動かすのは人、そしてその人を動かすのは心です。聞いて下さい。私たちの心の声を。

### **③ 【 6 Hokkaido Annri Takasa 】**

We are witnessing wars all over the world. Every time I see the scene of war, I wonder if someone might use nuclear weapons. My heart is filled with a sense of crisis and fear. I'm especially afraid of nuclear weapons because I know the inhumanity of nuclear weapons. How many people know the truth about radiation exposure in Hiroshima and Nagasaki?

### **【 7 Niigata Akari Nisiwaki 】**

By July 25th, 1945, the US Armed Forces had selected four cities as targets for possible atomic bombings.

Among them, Niigata was considered as the fourth target. In the end, Niigata was spared the bombing.

If the bomb had been dropped on Niigata, and one of my grandparents had been killed, I wouldn't be here. It is now more important than ever for us to imagine what it would be like if an atomic bomb were dropped on our hometown.

### **【 8 Hokkaido Mana Minakawa 】**

I am from Hokkaido. Hokkaido is about 2,000 kilometers from Hiroshima and Nagasaki. The temperature difference between summer and winter is 50 degrees. About 2,000 atomic bomb survivors migrated to this distant and harsh land of Hokkaido. One of the reasons was to escape from the misconception that nuclear radiation is contagious. They also want to forget the tragic memories of the bombing.

### **【 9 Sizuoka Yuna Tanikawa 】**

A US hydrogen bomb test was conducted at Bikini Atoll on March 1, 1954. The Daigo Fukuryu Maru, a tuna fishing vessel sailing from Shizuoka, where I live, was exposed to the radioactivity released by the test. One of the crew, Aikichi Kuboyama, died, leaving his family behind. I will never forget the words of Kuboyama, the first Japanese victim of a hydrogen bomb. Just before he died, he said, "Please make me the last victim." Imagine your family being exposed to radiation from a nuclear test.

### **【 6 Hokkaido Annri Takasa 】**

We will continue to work for the abolition of nuclear weapons and for peace in the world.

### ③【6 北海道 高佐安里】

今も世界では戦争が続いています。その映像を見るたびに、私は戦争で核兵器が使われるのではないかという危機感と恐怖で胸がいっぱいになります。それは私が核兵器がいかに非人道的な兵器であるかを知っているからです。

ヒロシマ・ナガサキにおける被爆の実相がどれくらい世界中の人に伝わっているのでしょうか。核兵器が使用されることの恐怖がどれくらいの人たちに共有されているのでしょうか。

### 【7 新潟 西脇あかり】

1945 年 7 月 25 日、アメリカ軍は原爆投下最終目標地点として 4 つの都市を選びました。新潟市は 4 番目の目標地点とされ、原爆が投下されることはありませんでした。もし、新潟市に原爆が投下され、私の祖父母が被爆してなくなっていたら、私はここにいません。もし、自分の街に原爆が投下されたら、どうなっていたのだろうかと考えてみるのが何より大切です。

### 【8 北海道 皆川舞奈】

北海道は広島と長崎から約 2000km。夏と冬の気温差は 50 度。その遠く厳しい北海道に 2,000 人の被爆者が移住してきました。理由の一つに、被爆が感染るとの偏見を逃れ、被爆の悲惨さを忘れたい思いがありました。

### 【9 静岡 谷河優那】

ビキニ事件とは、1954 年 3 月 1 日にビキニ環礁で行われた水爆実験のことです。私の住む静岡から出航していたマグロ漁船、第五福竜丸が被爆しました。乗組員の 1 人だった久保山愛吉さんは家族を残して亡くなりました。人類初の水爆被爆者である久保山さんが、亡くなる直前に言った「私を最後の被爆者にしてください」という言葉を私は忘れられません。想像してみてください。たった一回の核実験で家族が被爆してしまうことを。

### 【6 北海道 高佐安里】

核兵器廃絶と戦争のない平和な世界の実現を求めて訴え続けます。

#### **④ 【 10 Tokyo Eishima Asa 】**

Tokyo, where I live, was bombed over 100 times during World War II. In the Tokyo Air Raid of 1945, approximately 105,400 people lost their lives in just one night. This number of casualties in a single day surpasses those of Hiroshima and Nagasaki. To this day, about 80,000 unidentified remains are still left. To ensure that such wartime devastation is never repeated, it is imperative that nuclear weapons are abolished as soon as possible, and we move towards a peaceful world without war.

#### **【 11 Ibaraki Nanami Taguchi 】**

Major cities throughout Japan, including my own in Ibaraki Prefecture, were attacked by U.S. forces, which destroyed infrastructure and cultural assets. Residents were forced to evacuate their homes, and the war left economic, social burdens, and psychological scars. Those who experienced these events are striving to pass on their memories. Hibakusha and Hibakuchi share similar sentiments about the effects of nuclear weapons. Our mission is to pass on the lessons of the past to the next generation and continue to promote a message of peace!

#### **【 12 Hyougo Miyuki Hosoya 】**

Kobe in Hyogo Prefecture is known as an international trading city. But the history of Kobe has another face – the people of the city experienced the Great Kobe Air Raids During World War II, and the city was reduced to ruins. Many people around the world have suffered greatly from nuclear weapons. Nuclear damage is not only inflicted on the Japanese. We must not forget that many people have suffered from repeated nuclear tests. We must eliminate the role of nuclear weapons and seek a sustainable peace supported by the people of the entire planet.

#### **【 13 Nara Fujimoto Hanon 】**

The building of my high school has a history of 91 years. Actually it also served as a facility for the Japanese army in 1945 during World War II. The school was turned into a war machine. I was shocked to realize that

war is so close to us. In Hiroshima and Nagasaki 79 years ago, atomic bombs robbed people of their loved ones, including their fathers, mothers, brothers and sisters, and friends with whom they played and went to school.

## **【 14 Osaka Mizuki Inanaka 】**

Hibakusha often says, "I don't want to remember, and I do not want to talk about it anymore." Their pain and suffering are beyond our imagination. However, to ensure we do not repeat the same mistakes, they have shared their horrendous memories with us. This is because they do desire world peace and hold hope for our future. That is why all of us, living today, must imagine the horrors that occurred in Hiroshima and Nagasaki and imagine them as if they had happened to us. The number of people who experienced the war decreases year by year. It is our duty, as the younger generation, to make the tragedies of these two cities known to everyone and call for the abolition of nuclear weapons.

## **【 15 Kanagawa Arisa Hagi 】**

Who on earth wants to be a victim of nuclear weapons? Do nuclear weapons bring us any benefits? Fundamentally, we, human beings and nuclear weapons cannot coexist. There can be no real peace under the constant threat of nuclear weapons.

However, sometimes, the pursuit of the abolition of nuclear weapons makes us feel as if we are wandering in a dark tunnel with no end in sight. At such times, the words of Setsuko Thurlow, a hibakusha from Hiroshima, encourage me. She said, "Don't give up! Keep pushing! See the light? Crawl towards it." For me, Hiroshima and Nagasaki are the source of energy for peace. We will continue to work persistently for the abolition of nuclear weapons and the realization of a peaceful world.

#### ④ 【10 東京 永島安沙】

私の住んでいる東京は、第二次世界大戦中 100 回以上の空襲に見舞われました。45 年の東京大空襲ではわずか一晩で、約 10 万 5400 人の方が亡くなりました。これは、1 日で亡くなった方の数でいえば、ヒロシマ・ナガサキでの犠牲者数を上回るもので、未だ約 8 万人の身元不明の遺骨が残されています。このような戦争による被害を後世で出さないためにも、一刻も早く核兵器は廃絶され、戦争のない平和な世界に近づくべきです。

#### 【11 茨城 田口七聖】

茨城県は第二次世界大戦中、アメリカ軍の攻撃を受け、水戸市や土浦市が空襲に遭い、インフラや文化財が破壊されました。住民は避難を余儀なくされ、戦争は経済的・社会的な負担や精神的な傷跡を残しました。この経験を持つ人々は記憶を語り継ぐ努力をし、広島・長崎の被爆者も核兵器の影響で同様の思いを抱いています。戦争の教訓を次世代に伝え、平和のメッセージを発信することが使命なのです。

#### 【12 兵庫 細谷美優花】

兵庫県神戸市は、現在国際貿易都市として大きく繁栄しています。しかし過去には「神戸大空襲」という想像を絶する戦災があり、神戸の街はほぼ全焼しました。このような核や戦争による被害は日本人だけに起きているものではありません。核兵器によって甚大な被害を被っている人々は、世界各地に存在します。度重なる核実験によって世界中の人々が放射線の影響を受けて苦しめられていることも忘れてはならないのです。核兵器の役割を無くし、地球全体が支えあう持続的な平和に目を向ける必要があります。

#### 【13 奈良 藤本波音】

私が通う高校の校舎は、91 年前に建てられた歴史のある建物です。しかし、憧れていたその校舎は第二次世界大戦中の 1945 年に、日本軍の施設として提供されました。学校が学ぶ場所としてではなく戦争のために使われたのです。私は、戦争がこんなにも身近



に存在していることに衝撃を受けました。そして、これが私たち生徒に戦争について考えるきっかけをくれています。79年前のヒロシマ・ナガサキでも、原爆によって大切な父や母、兄弟姉妹、共に遊び、学校生活を送った友人もなにもかも奪われました。

## 【14 大阪 稲中瑞希】

被爆者は、「思い出したくない、忘れてしまいたい、伝えたくない。」と言われます。私たちからは想像もできない辛さ、苦しさ、恐怖がそこにはあります。しかし、同じ過ちを繰り返さないために、悲惨な記憶を私たちに伝えてくれました。それは誰よりも平和を望み、私たちの未来に希望をもっているからです。だからこそ、私たちはヒロシマ・ナガサキで起こった惨劇を想像し、自分の身に起こったこととして考えなければなりません。戦争を経験した方々が年々減っていく中、私たち若い世代が二つの市の惨劇を全て人々に伝え、核兵器の廃絶を訴える義務が私たちにはあります。

## 【15 神奈川 萩有彩】

この世界で誰が核兵器の被害にあうことを望んでいるのでしょうか。核兵器は私たちに何か利益をもたらすのでしょうか。私たち人類と核兵器は根本的に共存できないのです。核の脅威の下での平和などありえません。核兵器廃絶を訴えることは、時に終わりの見えない真っ暗なトンネルをさまよっているような感覚を覚えさせます。しかしそんな時、広島の実爆者であるサーロー節子さんの言葉が私を勇気づけます。

「諦めるな。頑張れ。光が見えるか。それに向かってはっていくんだ。」

私にとって、ヒロシマ・ナガサキは平和を願うエネルギーの源であり、これからも核兵器廃絶と平和な世界の実現を求めて粘り強く歩み続けていきます。

## **⑤ 【 16 Fukushima Kanon Nagasawa 】**

On March 11, the 2011, the Great East Japan Earthquake occurred. The maximum seismic intensity was seven on the Japanese seismic scale, and the damage was so severe in the Fukushima Prefecture where I live. Fukushima was not only affected by the earthquake, but also, by the tsunami and the nuclear power plant accident.

## **【 17 Fukushima Yuua Hangai 】**

I was three years old at the time. My family had to be evacuated from a town just two kilometers away from the nuclear power plant. As one of the victims of the nuclear accident, I was discriminated against even though it wasn't my fault. If such a large-scale nuclear power plant disaster were to occur, or if nuclear weapons were to be used, the lives and dreams of many people would be destroyed again in an instant.

## **【 18 Iwate Fumiko Hatakeyama 】**

My primary school playground was lined with makeshift houses and there was no place to play. However, thanks to support from around the world, reconstruction has progressed, and the temporary shelters have been removed. My grandfather, with the help of people he knew, oversaw the collection of essential supplies for those affected by the disaster. It is important to continue to build peaceful and friendly relations by expanding the circle of international solidarity.

## **【 19 Iwate Rintaro Sato 】**

Earthquakes and tsunamis are not man-made. On the other hand, nuclear weapons are invented by human beings and can take many lives. War can be prevented or even eliminated by our hand

To prevent the atrocities of nuclear weapons, we as young Japanese people will take the lead in calling for the realization of a peaceful world without nuclear weapons.

## ⑤【16 福島 長澤華咲】

2011年3月11日、東日本大震災が発生しました。最大震度7、マグニチュード9.0を記録し、沿岸部では津波により、広範囲で甚大な被害を受けました。私の住んでいる福島では、地震と津波による被害だけではなく、福島第一原子力発電所で水素爆発が起きました。

## 【17 福島 半谷優亜】

当時、私は3歳で記憶はありませんが、原子力発電所から2キロのところに住んでいた私達家族も避難しました。そして避難先で「被爆者」として差別を受けました。大量に放出された放射線は、自然豊かな私の故郷を一変させたのです。福島のように大規模な事故が起ければ、そして核兵器が使用される事態になれば、一瞬にして多くの人の命や夢が奪われてしまいます。

## 【18 岩手 畠山史子】

私の小学校の校庭には、震災後約10年間、仮設住宅が立ち並び、遊ぶ場所は失われました。現在、戦争が続く地域では、毎日学校に通うことができず、自由に走り回ることすらできない子どもがいます。震災や戦争によって非日常を日常として過ごさざるを得ない現実があります。

## 【19 岩手 佐藤凜汰朗】

今では復興が進み、街もきれいになり、少しずつ傷が癒えると同時に記憶も薄れていると感じます。ヒロシマ・ナガサキにおける核兵器の被害の記憶も同様です。被爆者の平均年齢は85歳を超え、高齢化が進んでいます。忘れ去られることがないように、私たちが語り継いでいきます。

## **⑥ 【20 Kumamoto Haruno Hirano】**

Fujieda Urata, as one of survivor who lives in Kumamoto prefecture now was 15 years old when she was exposed to the atomic bomb in Nagasaki. When she and her mother were at home, located just 500 meters from the hypocenter, they saw the charred corpse of a child. it was indicated her 8 years old sister Mitsue. Fujieda's mother screamed in grief, cry out "Mitsue!", and embraced Mitsue, who had turned into a black mass, but she crumbled into pieces.

Fujie lost total four family members including grandmother, sister and sister.

I will continue to share of bombings in Hiroshima and Nagasaki 79 years ago, and to appeal for abolishing of nuclear weapons, so that the same mistake will never be made again, in the present or in the future.

## **【 21 Oita Taichi Hanasaki 】**

When I was 12 years old, I had the opportunity to visit Pearl Harbor, in Hawaii, when I was 12 years old. I was impressed by the tour guide's comment that US tourists who visit Japan often go to the Hiroshima and Nagasaki Atomic Bomb Museums, but Japanese tourists do nothing but shop and rarely visit war sites.

My visit to Hawaii gave me the opportunity to think about war from the perspective point of view of the perpetrators. I felt that war can only be understood from the perspective point of view of both the victims and the perpetrators.

## **【 22 Fukuoka Seto Sugimori 】**

As many facts are forgotten, the testimonies and thoughts of those who were involved in the war are being lost. As a result, we may forget their pain and foolishly repeat the same thing over and over again. War takes lives irrationally and destroys precious things in an instant. But is a peaceful life based on war a true peace?

Those of us who have inherited the memories of war have a responsibility to continue to speak out to prevent the repetition of such tragedies.

OneThere is an atomic bomb survivor who says, “I had to endure discrimination because I was an atomic bomb survivor. I had to hide the fact that I was exposed to the an atomic bomb. I tried to forget it, but I decided to share my experience to prevent another war.”

## **【 23 Saga Misato Yoshida 】**

One atomic bomb survivor says “I had to endure discrimination because I was an atomic bomb survivor. I had to hide the fact that I was exposed to an atomic bomb. I tried to forget it, but I decided to share my experience to prevent another war.”

As one of the last generation to hear directly from the survivors, I call for their stories to be shared. If the survivors believe that their mission is to share their experiences to prevent the use of nuclear weapons in the future, the mission of my generation is to abolish nuclear weapons.

We believe that our impacts may be small, but we are not powerless and continue our activity in order to realize a peaceful world without nuclear weapons.

## ⑥【20 熊本 平野陽路】

熊本県在住の被爆者の浦田藤枝さんは、15歳の時に長崎で被爆されました。母親と一緒に爆心地からわずか500メートルのところにあった自宅で見たのは、真っ黒に焼け焦げた妹の光江さんの姿でした。藤枝さんのお母さんは、「光江！」と悲しみに絶叫しながら、黒い塊になった光江さんを抱きしめましたが、ぼろぼろと崩れていきました。私は、これからの時代を生きていく若者の一人として、79年前にヒロシマ・ナガサキで起こった原爆被害の事実を語りつぎ、現在そして未来において二度と同じあやまちを起こさないように、今こそ核兵器廃絶に向けて行動を起こしていくべきであることを訴え続けていきます。

## 【21 大分 花崎太智】

私は12歳の時、ハワイのパールハーバーを訪れる機会がありました。「アメリカから日本を訪れる観光客は広島・長崎の原爆資料館を訪れるが、日本から来た観光客は買い物ばかりで、戦跡を訪れることはめったにない」というガイドの言葉が印象に残っています。パールハーバーには今でも日本軍に撃たれた弾の跡や、奇襲により沈められた戦艦が残されていました。ここで私は初めて、戦争加害者としての立場から戦争について考えることを知ることになりました。日本軍による真珠湾奇襲攻撃がなければ、ナガサキ・ヒロシマへの原爆投下がなかったかもしれません。加害の視点で見た戦争は全く違うもので、戦争とは、被害者、加害者双方の立場から見ることで初めて戦争を理解していけるのだ、と感じました。

## 【22 福岡 杉森世都】

日本では過去の戦争の記憶や教訓について学校教育でふれられるものの、過去に起こった出来事としてとらえられ、今の問題、自分の問題としてとらえられる若者が少なくなっているのではないかと危惧します。このように、多くの事実が伝えられずに忘れ去られていくことで、当事者であった人たちの証言や思いも失われていって

しまいます。その結果、私たちは、痛みも忘れて同じことを愚かにも繰り返してしまうことにもなりかねません。戦争は人の命を理不尽に奪い、一瞬にして大切なものを壊してしまいます。しかし、戦争の上に成り立つ平穏なくらしは、本当の平和と言えるのでしょうか。戦争の記憶を受け継ぐ私たちには、そんな悲惨なことを繰り返さないために声をあげ続けていく責任があります。

## 【 23 佐賀 吉田光里 】

「被爆者であることで差別を受け、自分が被爆者であることを隠していたし忘れてしまいたかった。しかし二度と被爆する人がいないように私たちの経験を伝えていかなければならない」と語られる被爆者の方がおられます。しかし、被爆者の高齢化により、現在では、多くの被爆者団体が解散を余儀なくされています。私たちは被爆者から直接話を聞ける最後の世代です。被爆者の方の使命が被爆経験を伝えることならば、私たちの使命は核廃絶を実現することです。私たちは核兵器のない平和な世界の実現をめざして、「ビリョクだけどもリョクじゃない」という言葉を信じて活動继续进行します。



## (2) レジナル所長スピーチ(抜粋)

### 原文

Thank you. compassion, commitment, and real belief that peace cannot coexist with nuclear weapons. And I urge you to continue to take those messages to everyone. we are listening. It's just that sometimes it takes us so much longer to get the right message through. States can be very slow to make changes, but you have the power and your impact is great. And you also have a huge responsibility to carry those memories and those terrible moments forward to. Make energy and use that for good. I think there was a message that said, you know, this energizes me, the horrors of the war. The path energizes me to bring light into the world. And I think that this is what you are precisely doing. And I'm so impressed not only by how committed you are to this and how dedicated you are to this cause, but how well informed you are. And that is so important because information is power. And this is what will allow you to engage at all levels on these issues. When you spoke to the issues of deterrence and the issues of rhetoric, it is scary. And you're allowed to be scared. You are right to be scared. Use that to be able to engage further with your communities, with your governments, with groups that have similar objectives as yours. Japan is unique, and I hope that it will continue to be unique in the future. that sense that no one else will have to suffer such incidents. But you are also very similar to other youths around the world that are fighting for peace, maybe for different reasons, for different contexts, but that have that same hunger to ensure that our world is a little bit safer. And I feel, I already feel safer with you in the world, with you being able to carry. Those messages across. So please continue to do this, to talk to us, to force us to listen, to ensure that your message is heard, because I promise that it is, and I promise that we will continue to work on these issues. As you know, the head of our Office for Disarmament Affairs is Mrs. Izumi Nakamitsu, who is also absolutely a true advocate of these issues and protects them. Work towards, and I'm hopeful that if not, while I'm still working, at least that while you are now taking over the world and running the world, that you will have the courage that we have lacked to be able to resolve this and to push for this. So thank you, thank you for this tremendous work. Keep speaking, keep the voice. loud and clear, and you are being listened to, and your voice has so much power. So keep this topic alive, thank you.

## 日本語

あなた達からは思いやりと献身、そして核兵器と平和は共存できないという真の信念を感じます。私たちは耳を傾けています。ただ、正しいメッセージを伝えるのに時間がかかることがあります。しかし、あなた方には活力があり、大きな影響力があります。そして、被曝の記憶と恐ろしい瞬間を受け継ぐという大きな責任もあるのです。戦争の惨禍は私に未来への希望を与えてくれます。世界に光をもたらすためのエネルギーになります。そして、これこそまさにあなたがやっていることだと思います。私は、あなた方が核兵器廃絶という大義にどれほど献身的であるかだけでなく、どれほど情報に精通しているかにとっても感銘を受けました。なぜなら、情報は力なのです。情報こそが、核兵器廃絶の問題についてあらゆるレベルで関与することを可能にするのです。あなた方にとって核抑止力の問題やレトリックは関わりずらい、避けたがることだと思います。避けることは許される。避けるのは正しい。しかしその感情を糧に、地域社会や政府、そしてあなた方と同じような目的を持つグループと、より深く関わってください。日本は被曝の歴史を持つ特別な国です。しかし、あなた達は平和のために戦っている世界中の他の若者たちと非常によく似ている側面もあります。理由は違えど、環境は違えど、私たちの世界が少しでもより安全になるようにという精神を共有しているのです。あなた方が世界にいてくれることで、あなたがメッセージを伝えてくれることで、私はすでに未来に希望を持てます。このような素晴らしいメッセージを伝えてくれる。ですから、これからもこの活動を続けてください。私たちに話しかけ、耳を傾けさせ、あなた方のメッセージが確実に届くようにしてください。ご存知のように、私たちの軍縮担当事務所の所長は中満泉さんですが、彼女もまた、このような問題の真の擁護者であり、世界平和の実現に向けて日々活動してらっしゃいます。私がまだ働いている間に、もしそうでないとしても、少なくともあなた方が今世界を引き継ぎ、世界を動かしている間に、私たちに欠けていた勇気を持って、この問題を解決し、これを推し進めることができるようになることを期待しています。だから、この途方もない仕事に感謝します。あなたの声はとても大きな力を持っています。だから、この希望を持ち続けてください。

## ５．軍縮会議日本政府代表部主催レセプション

### （１）レジナル所長あいさつ

#### 原文

Thank you Keiko ambassador, thank you so much for hosting us once more in your lovely residents. Dear colleagues, dear students, it's so lovely to see you again and such a pleasure to having our officer yesterday and to listen to very key messages that you have to share with us and with the world. Coming to Geneva to talk to the disarmament community about such an important message, to ensure that the world does not forget nor lose sight of the importance of coming to the realization of a world without nuclear weapons. Your voice, the history that you bring in the messages, and the power that you have is second to none. And you must continue to play this message over and over and over again until each and every one of us dedicated to this issue, working on this issue day to day, realizes this dream of a world without nuclear weapons. You are our future, you are our reason, and you have the power to make this happen. We, Ambassador and I may not have the opportunity to save this happening while real professionally active but I know that your good hands with all of you. So, thank you for sharing that history, those lessons, the energy, and the power of your voice as we go forward. Keep talking, keep raising your voice, keep making sure that your governments and your communities and your friends understand the importance of disarmament, and that disarmament goes far beyond just the peace and security aspects, but is vital to the development of every aspect across those societies. So please keep up the wonderful work, and thank you for sharing those messages with us. We will convey and share the petitions that you have shared and presented to us to our Secretary General in New York, and we will also share – I've already shared with Ms.Nakamitsu. – I have already shared with her a version of your collected speeches from yesterday, so she has received them, and I know that she is extremely proud of the legacy that you are leaving behind. And please keep up the good work. Next time, try to stay a little bit longer. Thank you. And thank you, ambassador, for promoting these visits and keeping youth voices alive, which are going to be so important, and will be featured very, very prominently in a seminar in the future. Keep talking about these issues. Thank you.

大使の市川さん、素敵なお住まいで再び私たちを受け入れてくださり、本当にありがとうございます。親愛なる同僚の皆さん、親愛なる生徒の皆さん、またお会いできてとても光栄です。昨日、私たちのメンバーをお招きし、皆さんが私たちや世界と分かち合いたい重要なメッセージをお聞きすることができました。世界が核兵器のない世界を実現することの重要性を忘れず、見失わないようにするためです。あなた方の声、メッセージに込められた歴史、そしてあなた方の持つ力は、他の誰にも引けを取りません。そして、この問題に献身的に取り組む、日々この問題に取り組んでいる私たち一人ひとりが、核兵器のない世界という夢を実現するまで、何度も何度もこのメッセージを流し続けなければなりません。皆さんは私たちの未来であり、私たちの理由であり、これを実現する力を持っています。各国の大使と私は、実際にプロとして活動している間は、この核兵器のない機会を持てないかもしれませんが、皆さんとがいるなら大丈夫だと思います。だから、私たちが前進するために、その歴史、教訓、エネルギー、そして声の力を分かち合ってくれてありがとう。そして、軍縮は平和と安全保障の側面だけでなく、社会全体のあらゆる側面を発展させるために不可欠なものであることを、政府や地域社会、友人たちに理解してもらい続けてください。これからも素晴らしい活動を続けてください。また、すでに中満さんにもお伝えしました。－ 中満さんにはすでに、昨日のスピーチをまとめたものをお渡ししました。そして、これからも頑張ってください。次回は、もう少し長く滞在するようにしてください笑。ありがとうございました。そして大使、このような訪問を推進し、若者の声を生かし続けてくださってありがとうございます。これからもこの問題について語り続けてください。ありがとうございました。

## (2) 第 27 代高校生平和大使代表挨拶 沖本 晃朔

### 原文

Our ultimate goal is the abolition of nuclear weapons. Realistically, it's tough way. I don't want to say, but it's almost impossible. But, if we can't see hope, who will? It's our responsibility. It's my destiny. Some people may say we are ridiculous. We are pursuing imaginary utopia. So, Am I just an immature dreaming boy? The answer is not. My name is Kosaku Okimoto. I'm from Hiroshima, the city where the world's first atomic bomb in human history was used. 79 years ago, the tragedy did happen. The bomb, with its extremely destructive power, exploded above loop Hiroshima, where many innocent people lived.

My great-grandmother, who lived in Hiroshima at the time, saw her cousin being trapped under the ice piano by the atomic blast. In her crumbling house, she had no choice but to evacuate for her own life, with no time to find out if her cousin was alive or dead. She had no way of confirming her cousin's presence in the destroyed city until decades later, when she saw her cousin's name inscribed on a stone monument at a temple.

Every time I recall the memory of my great grandmother, I can reconfirm that I have an inherent responsibility for taking action as a survivor, just as she felt when she saw the cousin's name in the stone monument.

As I told you, our main activity is sharing the actual history and spreading the voice of survivors from 79 years ago. This is what we should do, and what we can do as a citizen from a bombed city. But, you have another job. You, all people, engage in politics, especially in disarmament, I expect you to step forward to achieve a world without nuclear weapons.

Personally, I think today's international system is limited if we really want to achieve a disarmament and antinuclear world. So, for example, what do you think about the destruction of the current security council. Why cannot we change the permanent members? It is obvious that there is an equation of permanent members = nuclear nation. Everyone knows they have too much power. We need a paradigm shift of System of global politics.

Maybe in the future, I will be one of you, who makes the actual policy in complex global situations. But at least today, my job is sharing history. In contrast, your responsibility is to focus on the future and plan a challenging policy. Today, the world is plunging into Chaos and the tension is rising in all regions. Again, it is time for a paradigm shift. It's up to us.

The abolition of nuclear weapons is a goal that should be shared by all humanity. A world without nuclear weapons is a future that people all over the world want. And I believe it's achievable. We're gonna shift the world from populace awareness, and you can change the world from policy aspects. Let's realize the human dream together in this generation.

## 日本語

広島県から参りました。沖本晃朔と申します。79年前の8月6日8時15分、世界で初めて原子爆弾が使用されました。非常に強力な破壊力を持つその爆弾は、多くの市民が日々生活を営んでいる都市広島市の頭上600メートルで爆発し、摂氏100万度を超える火球が作り出されました。爆発の瞬間、強烈な熱線と放射能が四方に放射されるとともに強烈な爆風が発生しました。

広島では8月6日に10万人以上の方が亡くなったといわれています。また、放射線は人体の奥深くまで入り込み、深刻な障害を引き起こしました。その後原爆を生き延びた人も白血病やがんによって亡くなる人が増えてきました。現在も放射能による障害に被爆者は苦しんでいます。

当時広島市内に住んでいた私の曾祖母は、目の前で自分のいところが原子爆弾による爆風でオルガンの下敷きになる光景を目にしました。しかし崩れゆく家屋の中で、彼女はいとこの生死を確かめる暇もなく、自らの命のために避難するしか選択肢は無かったと言います。曾祖母は数十年後寺の石碑に刻まれたいところの名前を見るまで、あの日を境にいなくなった彼女の存在を破壊された町で確認する術は無かったそうです。いところを見捨てて逃げざるをえなかった曾祖母の気持ちを考えると、胸が痛くなります。

広島の平和記念公園にある原爆慰霊碑には、「安らかに眠って下さい。過ちは繰返しませぬから」という文言が刻まれています。私は「過ちを繰返さない」の主語は人類全体だと思います。核兵器廃絶は、人類全員が共有すべき目標です。核なき世界は、世界中の人が望む未来です。私たちは全ての人が核の脅威から解放される日まで、この思いを世界へ訴え続けていきます。

### (3) 日本政府代表部主催レセプションの記録

#### (各グループの記録)

##### 《A グループ》 佐藤(岩手)、田口(茨城)、皆川(北海道)

###### 【イランの外交官の方】

今の軍縮会議(CD)は長年停滞しているため、少し甘えているところがあります。でも、私(外交官の方自身)はCDが進んでいた時のことも知っています。あなたたちから新しい風を吹かせてほしいです。

###### 【ジュネーブ大学の学生さん フランス出身】

Q、あなたの国ではどのような平和教育が行われていますか。

A、フランスでは、過去の戦争の歴史から平和教育が盛んに行われています。私はジュネーブ大学やフランスの学校で、それらについてやモラル教育を学びました。しかし、一部の人たちは成長するに伴って、平和教育に対して受け身になってしまい、関心が薄れています。だから、あなたは自分自身の意見を持っていてほしいです。

Q、皆さんにとって平和とは何ですか。

A、平和はみんなにとって同じでなければいけません。また、平和に対しての考え方が違ってはいけません。すべての人が同じように平和を思うことが必要でしょう。

###### 【日本代表部 市川さんと長谷川さん】

昨日の軍縮会議はたくさんの国が様々な立場から意見を言っていたため、高校生たちにとってもいいものを見せることができました。日本政府は会議の間では政治的な議論にならないようなコメントをするようにしています。普段は東京の外務省を通したコメントをします。昨日のCDでは、市川大使が長谷川さんと話すことを事前に決めていました。

Q、日本の高校生平和大使を受け入れる発言をした上で「もっと過去の歴史を勉強をした方が良い」と発言していましたが、中国側はどれほど自分たちのことを知ってくれているのでしょうか。

A、中国は日本が核兵器の話題をあげたときに必ず日本の加害について言及するのは中国の立場上言わなければいけないもので、昨日のCDでは前向きに発言をしてくれました。そして、大使や外交官同士は仲が良く、私(市川大使自身)も中国や韓国の大使ととても仲が良いです。

Q、日中戦争の加害について、中国が主張するような被害を日本政府はどれほど認め、どのように対応しているのですか。

A、日本が中国にした加害について言及されたときは、「過去の反省に立って核廃絶を目指す(橋渡しの役割を果たす)」と発言します。ある程度加害を認める立場をとるが、中国の根拠のない強引な主張は、日本政府の立場を持って反論します。その場合、会議後に会議中の発言について意味を伝え合い、自分の国で誤解が生まれないようにしています。お互いの立場を理解することが重



要です。昨日は、中国側から事前に通知があつて、「高校生平和大使の話題の中で核兵器について言及されたときは、中国の立場を示すこともあります。」と言われていました。そのため、今回の会議では、ソフトな発言をしてくれました。外交官たちは必要以上に対立しません。

【スイスの中高生

フランス出身 日本とスイスのハーフ スイス出身 スペイン出身】

Q、あなたたちの学校ではどのような平和教育が行われているのですか。

A、フランスは学校の平和教育として、歴史の授業で過去の戦争がどのように起きて、当時の政治がどのように影響したのかを学んだり、広島に行って資料館を訪れたりしています。

Q、スイスの兵役制はどのようなもので、あなたたちはどう思っていますか。

A、兵役制は18歳から始まり、1年間兵役に就きます。1か月行って毎年2週間ずつやるか、1回で1年やるかのどちらかを選択できます。近年ではヨーロッパ全体でジェンダー平等について関心が広まっているため、女性も男性と同じように参加しなければいけないと思っています。戦うためではなく、自国を守るための訓練だから自分に責任を持って過ごそうという意識が身に付きます。兵役を通して人として自立し、命の大切さを学んだり、筋トレもできたりするから、兵役に対して悪いイメージはありません。兵役を怖いという人もあまりいません。しかし、一部では、わざと怪我をしたり、医者に賄賂を渡したりして、兵役を避ける人もいます。

【ジュネーブ大学の学生】

Q、SNS やインターネットなどの現代のテクノロジーは平和促進に役立つと思いますか。

A、それらは悪い影響をもたらすこともあるが、いろいろな人と繋がることができるから、平和にも繋がると思います。そうすることで、戦争の記憶が忘れられないようにしなければいけません。

(高校生平和大使がInstagramをやっていることに対して)

Instagramで発信していることはとても良いことです。

Q、高校生平和大使に期待することは何ですか。

A、悲劇を忘れずに伝えていくことが大事です。若者がすることに意味があるため、これからもあなたたちの活動を続けていくべきです。

【ジュネーブ大学の中国人男性】

文化や歴史を大切にしてください。これからも活動を頑張ってほしいです。平和が大事だから、日本と仲良くしたいです。

《Bグループ》萩(神奈川)、稲中(大阪)、甲斐(広島)、平野(熊本)

【市川大使】

Q、UNIDIRでは軍縮とジェンダーについて学びました。国連でも女性が多いな

と感じました。

A、女性の大使や国連職員は多いですね。

理由としては（男性の方には申し訳ないが）女性の方が弁が立つ。そして仲良くなりやすいことが挙げられます。

Q、プライベートでも仲がよかったりするのですか？

A、そうです。本当にお友達のように仲が良く、会議などの前後でもコミュニケーションをとることが大切です。会議で意見が食い違ってもあの時はこういう意味だったんだよなど伝えると喜ばれます。そういった日常での信頼関係が特に大事です。日本人はそういった約束を守ることや正確なことは評価されています。できない時ほど出来ないとしっかり伝える代わりに代案を上げます。外交官とは嘘つくために外国に派遣される正直な人間である。お互いに約束を守ることが大切です。

### 【セブ島】

Q、広島を訪れた時どう感じましたか？

A、広島の記念館を訪れて、当時の悲惨な歴史を感じました。核兵器廃絶に向けていっそう努力していく必要があります。

### 【ジュネーブの薬品関係について学んでいるロシア人の方】

ロシア出身で核兵器は複雑な問題であるとおっしゃっていました。

日本はマンガが有名だから、マンガなどを使って当時の歴史について広めたらどうですか。

### 【イラン】

広島に最初呼ばれた時に、安全保障局の方が来てグリーティン (?) することになっていたんだけど、15 分を過ぎても 30 分過ぎても来ませんでした。絶対時間を守る日本人だから何かあったんだろうと思いました。何があったのかと思っています、ちょうどその数時間前に北朝鮮が最初の核実験を行ったということでした。そのせいで当然安全保障局の方は来ることが出来ませんでした。不運にも日本に原子爆弾が投下されました。

被爆者の方の実際のお話を聞きました。

松崎さん 彼らも被爆者の方々の当時の気持ちや実相を UNIDIR などで伝え、平和大使としてどういった活動をしているか伝えていました。それについてどう思いますか？

イラン すごくいい活動だと思います。二度とこのようなことは起こってはなりません。これは被爆者の方へのメッセージです。あなた達は若い世代です。原子爆弾は確実に二度と、二度と使われてはなりません。どの国でも誰に対しても。核兵器を使ってはいけないということだけはみんな共通して持っています。松崎さん 時には私の国とあなたの国とは立場が違い、アプローチが違うこともあるよね。しかし私たちは共通のゴールですよ？

イラン・イラクはイランに化学兵器を使ったことがあるから、そういった大量破壊兵器による被害を受けている。核兵器も化学兵器も生物兵器も絶対に使ってはいけない。私たちはたまに意見が食い違うこともあるけどゴールはいつも

一緒です。あなた達の正しい若い世代にかかっている。本当に核のない世界を実現したいですね。

Q、イランでの共通の宗教はなんですか？

A、イスラムです。

Q、私たちは宗教戦争についてディスカッションをしました。日本は特別な宗教がないので私達は宗教戦争について理解することが難しいです。それぞれの宗教に否定的な意見を持っている人もいます。それについてどう思いますか？

A、とても大きな質問ですね。

宗教については本当に一人一人違う宗教で使い方も違います。宗教以外でも生活様式や考え方や目的は違います。しかしみんな共通しているのは人間だということ。

宗教というのは人を一緒にすることもできるし、対立の理由になることもある。その中で大事なのは互いの違いを理解すること。まず私達が共通して色々な宗教があるということを理解する。例えば宗教は親から引き継いだり、国で決まっていたりする。誰もこれを選んでいく訳では無い。その方々の背景も理解することが大切。イランでは日本人達はものすごく評判が高い。日本人はとても勤勉で敗戦後も国を復興させ、しかも世界に誇れる技術を持っている。イランでは、おしんがロールモデルとされることが多い。知らない人はいないほど。第一次世界大戦から第二次世界大戦の話。小さな強い女の子の話です。

Q、あなたの国の平和教育について教えてください。例えば日本では被爆者の声を広める活動を行っています。

A、私たちの国は 15 カ国に囲まれています。国を守るために国防は強くないと行けない。この状況のなかで生き残ろうとしないといけない。それは私たちにとってとても大事。平和教育については私たちは周りの国に平和を広げなければならない。若い世代に。誰も核兵器を持つべきでは無い。あなた達が伝えるべき。

Q、イラクと日本は核兵器廃絶をしなければならない。自衛隊は国を守っているが核兵器を持つべきでは無いと思う。同じ意見ですか？

A、核兵器、生物兵器、化学兵器これらの大量破壊兵器は標的とするひとと全く罪のない人を完全に区別することが出来ない。それであるからこそ、イランの立ち位置としては核兵器を持つてはならない。そういう兵器は必ずカテゴライズされる。国防のために必要というだけで片付けてはならないという、確固たるポリシーを持っている。

### 【韓国】

Q、北朝鮮と韓国は今後どうしていきたいか？

A、何年もかかります。

1 番は韓国と北朝鮮に核兵器がないことを目指します。核のない朝鮮半島をめざしています。でもその方法は無いけど挑戦します。対話して解決したいけれど、それはとても難しいです。しかし日本など周りの国々と協力して話し合い

たいです。サミットレベルで。北朝鮮自身が対話のテーブルにつかないと何もそれに向けた動きが始まりません。

色んな手段を使ってテーブルにつかせたいです。

例えば、経済的な支援もしくは制裁をしっかりと加えたいです。そういう圧力がないと、それらの位置につきません。経済制裁を担保します。

Q、南北統一に向けての平和教育について教えてください。

A、ただ、これも日本も同じですけども、とは言っても、私たちは民主主義の、民主主義国家ですから、例えば、その世論がね、ちゃんと反映されそう、選挙でそういう世間が選ばれたら、その人たちは要するに答えるかです。

ただ、もちろん絶対に統一っていうのを押し付けることはできません。変えたいんだったら、そのね、選挙とか通じてそういう政策を変えていくっていうことも、今後でくるかもしれないし、あとは、その同盟国とかね、周辺のパートナーですね、日本とかアメリカとか、公の場所でね、言っていることは、私たちは、NPT、核兵器不拡散条約にコミットしています。つまり、それは核兵器を持ちます。それで、今、政府がやろうとしていることが、今のこの拡大核抑止で私たちがきちんと守られています、その日米間の その関係によってきちんと守られているっていうことを説得すると。

【国連のガイド(メキシコ)、ジュネーブ大学で日本語を学んでいる大学生(ジュネーブ)】

Q、国連ではどのようにガイドしていますか？

A、広島に行った時にメモリアルパークに行きました。何があったのかよくわかりました。これからもあなたたちの気持ちを伝えます。私たちは核戦争にとっても近いです。核軍縮はとても大事です。

Q、核抑止についてどう思いますか？

A、（ジュネーブ大学で日本語を学んでいる大学生）とても悪いです。イメージして核兵器の脅威を知る必要があると思います。

Q、広島や長崎の核兵器の歴史について学校では習いましたか？

A、（メキシコ出身の国連のガイド）

全く習いません。広島で初めて知りました。日にちも知りませんでした。ヨーロッパに来て初めて学びました。

（ジュネーブ大学で日本語を学んでいる大学生）

すごく沢山学びました。グループでアメリカが何をしたか説明しました。

Q、核抑止についてどう思いますか？

A、あなたが持っているから私も持つという考えはどんどん進んでいってしまいますよね。

《C グループ》 沖本(広島)、長澤(福島)、吉田(佐賀)、藤本(奈良)  
【UNIDIR】

Q、福島県で起きた汚染水の問題についてどう思いますか。

A、汚染水では無いと証明されたので大丈夫だと思っています。

Q、日本以外の平和教育はどのようなものですか。

A、イギリス：大学に入らないと専門的に学ぶことはできません。

Q、これから私たちが核兵器廃絶のためにできる行動は何ですか。

A、教育（広めること）が大切です。（目に見えないものだから）

#### 【ジュネーブ大学の学生】

Q、広島長崎のことをどのように学ぶのですか。

A、大学で日本の社会学と日本史の授業で学びます。

Q、核兵器廃絶は現実的ですか。

A①、

難しいと思うが、多くの人が願い続けることで世論や国際情勢が変わるのではないのでしょうか。

A②、

核兵器の数が減っているから無理なことではないです。

A③、

難しいと思うが、時間の問題であり可能。不可能ではないです。無理だと思う人も多いが時間の問題です。思いを持ち続けることが大切です。

Q、核兵器廃絶のためにこういった政策がありますか。

A①、

ワクチンの義務化する政策が最初は上手くいかずみんながワクチンを打つまでに時間がかかりましたが、段々と多くの人が打つようになったから不可能なことではないと思います。日本は自衛のための力しか持たないという憲法があるが、それを全ての国が行えば核軍縮が進むのではないのでしょうか。

A②、

どの国も本当は核兵器を持ちたいと思って持っているわけではなく、核兵器を無くしたいという想いを持っているのでヨーロッパで団結できるのではないのでしょうか。

Q、核がなくなって、戦争が無くなっただけでは平和にはならないのではないと思うが、あなたの考える平和のゴールは何ですか。

A①、本当の対話が平和の定義、最終的なゴールはもし戦争とかがしたら国際法で裁かれるようにしてほしいです。

A②、平和のレベルによって違います。世界的な平和や国家的な平和、個人的な平和にはそれぞれ定義があります。

A③、全ての国家が納得できるような体制を整えたら戦争が起きることはありません。こういった状況が平和だと思います。

A④、平和＝理想。どんなに頑張っても無理です。感染症はなくならないし、どんな完璧な国家でも必ず争いはおこります。なので平和とは人間が夢を見るような理想的な物だと思います。

【日本政府の外交官】

Q、核兵器廃絶は現実的ですか。

A、（個人的な意見）時間はかかるかもしれないがあり得ると思います。核兵器を持っている国がそれをいらないと思うことが必要です。核軍縮のために取り組む+根本的な問題の解決も必要です。

例）各国同士の仲を良くすることや核軍縮に対する機運を高めて、核保有国が段々数を減らしていくような交渉が必要です。例えば、アメリカとロシアの核兵器の数が中国と同じぐらいに減らしたら中国も減らすなどです。そして、減らした核兵器を増やさないための制度を作る必要があります。

《D グループ》 谷河(静岡)、津田(長崎)、畠山(岩手)、花崎(大分)

Q、あなたの国の人々は平和を作るために何をしていますか。

A、

（スコットランド・ブラジル）

日本の平和教育の方がはるかに進んでいます。

（インド）

発展途上国として、私たちの平和と安全は、食糧、安全保障、持続可能な開発など他の多くの要素から定義されています。私たちは、核の恐ろしさを体験したことがなく、今も不安定さから核を持っています。大量破壊兵器について日本から学ぶべきだと思うと同時に、政府が自国のために優先すべきことがたくさんあるから、時間が掛かると思います。

（イギリス）

私たちの平和教育では、核については含まれていません。例えば西岸地区での和解の授業などで、この地域特有のものであり、他から学ぶ必要があると思います。

（イラン）

中東は非常に不安定で混沌としています。常に他から攻撃されないように注意を払っていなければなりません。平和は他の国が攻撃するのを防げるくらい十分な抑止力を持っている場合のみに達成可能です。私の国では、平和は防御として要約されています。

（コロンビア）

最近まで戦争が続いていて、ラテンアメリカの一つとして、核兵器禁止条約に加盟しています。ただ、まだ別の問題は存在しており、核兵器は持っていない

が、異なる種の戦争と言えます。そして、すべてごく最近のことです。平和教育は、非常に新しいものであり、あまり一般的ではありません。

(フランス)

学校教育で、第二次世界大戦について学びました。先生が日本で起こった悲劇や、ガザでの写真を見せ、社会的攻撃の結果とその影響について教えてくれました。

Q、韓国には、被爆者がいるが、核兵器禁止条約に加盟する気はあるのですか。

A、今はないです。日本と同じような考えです。

(個人的に) 誰もが核のない平和な世界という目標を共有していると信じたいと思っています。私たちの今、武器を必要としているが、民主主義国家であり、他人の意見によって変わる可能性が高いです。そして、理想的には、あなたたち学生・市民社会が他の市民社会と交流してほしいです。グローバル市民の理解と合意に至れば、核兵器は悪いものとなり、政治家が前進するよう手助けするでしょう。

## 《E グループ》 杉森(福岡)、佃(広島)、半谷(福島)、高佐(北海道)

【インターナショナルスクールに通う高校生】

Q、平和教育はどのように行われていますか。

A、地理的なことから歴史的なことまで、ディベート形式で議論することが多いです。各国大使の子供など意見が強固で主張の強い生徒もいるが、その人への対応等も勉強です。

【ジュネーブ大学の学生（フランスに住んでいた）】

Q、日本の学生は外国の学生に比べて消極的に思えます。原動力は何ですか、どうすれば積極的になれるか。

A、長い歴史の中で民主主義が淘汰されたような時代もあり、自分たちが動かなければ何も起きないことを知っているのは大きな原動力です。

Q、東日本大震災について知っていますか。

A、10歳のときに報道で見たことを今でも覚えています。悲劇だと感じました。

Q、原子力発電についてどう思いますか。

A、地球上には様々な資源があり、それらの自然的なリソースへと移行していく必要があります。広い土地が必要であったり、邪魔に感じたとしても石油のような有限なものや原子力などの危険な資源よりも良い方法があります。

Q、学生間で核兵器に関する抗議や行動はありますか。

A、反対する人は多く声を上げ、道に立ちます。声をあげない人も心の中では皆平和な世の中を続けて、その中で生きたいと思っているはずです。

【防衛駐在官】

Q、軍隊と平和は共存できますか。

A、現在、軍隊は国家間の安全保障維持として機能しています。国境がある限り軍隊は存在し、今は核抑止力で成り立つ面もあります。しかし、今後どういう世界を目指していくかを考え、行動する上で高校生平和大使のような核廃絶を訴えることも重要です。

【エルサルバドル外交官】

Q、日本が核の傘の下にいる状況で、どうすれば政府は核廃絶に、より積極的になりますか。

A、日本は教育の面やこの派遣等で良く訴えていると思うが、これから中米の非核地帯としても後押ししていきたいです。

【UNIDIR 職員】

Q、核廃絶のゴールはどのような形で訪れると思いますか。

A、核兵器廃絶というひとつのゴールに向かう上で教育や対話の機会のセッティング、雇用の拡大などの過程は不可欠です。その対話の機会においてジェンダーギャップをなくしていくことも大きな課題です。

Q、原子力発電について、その危険性を踏まえてどう思いますか。

A、放射線に悪影響があることは周知の事実であるので攻撃対象になる可能性もあり、それはとても危険です。原子力発電が現在、二酸化炭素の排出がないことなどで環境に良いと言われていることや、他の分野への応用技術として使われていることを踏まえ、それに取り替わるものを推進していかなければいけません。

《F グループ》細谷(兵庫)、西脇(広島)、大原(長崎)

【ジュネーブ大学の大学生三人】

Q、あなたの学校ではどんな平和教育をしましたか。

A、

(大学生 A)

あまり平和学習はしていません。私たちは国際社会の中で生きていて、普段の生活の中で新聞などを読んで学んでいます。ヨーロッパについては多く学ぶけど、アジアに関してはあまり学びません。広島や長崎の被爆者に関する本を読んで、それが日本に関する学習に役立ちました。

Q、今までに被爆経験を聞いたことはありますか。

A、

(大学生 B)

被爆体験を聞いたことがあります。その多くはドキュメンタリーで見ました。

(大学生 C)



ドキュメンタリーは多くのことを教えてくれます。私は本でも学びました。でも実際に生で聞いたことはないです。

→(私達)広島研修で初めて被爆体験を聞きました。日本人である私たちが初めて被爆体験を聞きました。だから、海外の人が被爆体験を聞いたことがないのは自然だと思います。

Q、スイスは永年中立国ですが、現在はウクライナへの武器の再輸出など中立が保たれないような事が多く行われています。それについてどう思いますか。

A、

(大学生 A)

私達は原則として中立ですが、次に戦争が起こったらそうはいかないと思います。これについて言及するのは明確ではありません。

(大学生 B)

私たちは中立の立場であり、同時に戦争に反対もしています。中立であることはスイスを独立したものとして守るという核に頼らない安全保障を構築できています。また多くの国の資材を蓄えている場所でもあるため、守られています。同時に、中立だからと何もしないことは戦争に反対していることにはならないので、スイスは他国に支援をしているのだと思います。一方だけでなく、全員を助けました。

(大学生 C)

この問題について、自分たちの視点を共有することは重要です。低い立場でも話し合わなければ前に進めない。

【ジュネーブ大学の大学生(フランスの方)

Q、あなたはフランスが核保有国であることについてどう考えていますか？

A、

(フランス人の方)

はい、フランスには核兵器があります。私が気になるのは、フランスが兵器を戦争状態にある国に送っていることです。私自身は平和を支持しているし、フランスは平和と自由を促進する国であるべきだと思います。

【UN・EU・日本大使館の方】

(EU)

私は 2003 年に軍縮フェローシップに参加し、日本訪問の一環として長崎を訪れました。日本に行った時にある女性に会い、彼女は広島で被爆してから長崎でも被爆し生き残りました。とても感動的な話でした。

(UN)

実地に行くことは非常に重要なことです。理論的には十分な知識があるが、実際にその場所に行って音楽を見たり、それと話したりすることは全く違います。だからいつもとても感動的です。

Q、長崎に行って何を感じましたか。

A、

(UN)

多くの悲しみ。企画をまとめる時はいつもこれを考えています。

(UN)

だからこの問題に関わる全ての人は、政治に関わる人の誰でも長崎広島を訪れるべきです。そこで君たちの役割は、みんなに最高のメッセージを伝えることです。願わくは高校生平和大使の世代が決意文書を手に入れることを願っています。

(EU)

私たちが日本に戻って貴方に伝えたこのメッセージを引き継いでくれるかもしれません。そうすれば先駆者として他の場所に行った時に、さらにインスピレーションを与えるメッセージを広める事ができます。

(EU)

残念ながら核兵器のない世界に到達することは難しいが、少なくとも私たちは到達すべきという考えで一致しています。今、私たちは共通のものを見つけるために、どうにかして団結しなければいけません。

(UN)

核兵器は使用されれば人権に関わる存亡の危機をもたらす唯一のものであり、暴力と核兵器の二つの存亡の危機があると考えられています。それは私たちの生存に関わる問題です。

Q、国境をなくして地球市民として暮らすような平和な世界が訪れると思いますか。

A、

(EU)

一緒に暮らせればずっと良いです。協力し合えば全てを乗り越える事ができます。だからお互い助け合えるから集まろう(人間として)というのが最初のアイデアでした。しかし生活を楽しむためには、国境を移動して一つの大きなブロックを作った方がいいと気づきました。

(日本大使館)

国境を区別することは可能だと思いますか。おそらく難しい課題でしょう。

今、EUは

まさにそのような困難に直面しています。どの国も独自のアイデンティティを持っています。

(EU)

ある法律があり、その法律がEUのライバルとして採用されれば誰もがそれを受け入れなければなりません。しかし、同時に貴方には権利があります。

(UN)

国境というものは、基本的には西洋の保健制度に由来するもので、それ以前には国家があったことを忘れてはいけません。つまり、本当に国境があったわけではなく、国があったというということです。しかし、同じ国でも、強い国によって異なる人々が一緒に暮らすことになります。つまりEU内では、コミュニケーションが非常に簡単で、お互いをよりよく理解できます。そして人々の関心は地元レベルです。国の反対側で何が起きているかを知ることよりも、この川に橋が必要かどうかの方に関心があるからです。そのためスイスのように

権力を地方レベルに移譲し、何が必要で何をすべきかを人々がよりよく理解できるようにする事が、多くの側面で行われています。そうなれば、人々はより簡単に移動(物理的にも精神的にも)するようになり、国家間の大きな問題もなくなるでしょう。

(UN)

EU は現に国境問題に関してかなり進んでおり、国境はますます見えにくくなっています。例として、捕虜の一部を特定の地域に移送する事についてが挙げられます。

(日本大使館)

つまり、親しい友人を見ると安心したり、国境を感じたりします。人によりますが、まずはグローバルに考える事が大事です。問題を常に追いかけていかなければなりません。

(UN)

また、文化的な平和の問題でもあり、日本では多くのことを行っています。ヨーロッパでは残念なことに、小さな土地のために多くの戦争が起きています。でも他に良い例があります。これはジュネーブです。数年前ジュネーブはフランスに土地の一部を譲り、別の土地を手に入れました。

(UN)

だから、戦争ではなく交渉によって別の方法を見つけました。基本的に高速道路は通らなければならず、スイスの路線を迂回するのは非常に複雑でした。だから、基本的には平和的な方法で線を交換しました。スイスは連邦国家ですから、この交渉は非常に難しいものでした。しかし、意思があれば、これは可能なのです。

### 【日本大使館の方】

世界の国境をなくして平和にするには、自分との関係や範囲を広げる必要があります。ボーダーレスといっても完全に同じなのではなく、「日本人」という自分の軸を持って関係性を広げる必要があります。家族と同じように国や周りが大事で、隣国と自分との関係をいかに広げられるかが大事です。小さなエゴの中に囲まれるのではなく、周りの人のことを考えていくのです。

### 【日本とハーフの中学生と高校生】

Q、スイスでの平和学習はどのようなものですか。

A、

(高校2年)

学校の授業ではあまりありません。でも、家族から戦争はダメということなどを教えてもらいます。学校では歴史だけで、友達と話すことはあまりありません。それは家庭で勉強して元からできています。

Q、スイスは中立国ですが、今のヨーロッパの危機に対して対応している部分があると思います。それについてどう思いますか。

A、

(高校2年)

スイスは中立国ですが、強い国ではないので戦争にスイスが参加してもしなくても関係がないという側面があります。

Q、私たちみたいな若者がどういうアプローチをしていくべきかですか。

A、

(高校2年)

ヨーロッパでは、自分の考えに自信を持って意見を言い通します。だから、周りの意見の人を気にしすぎずに、恐れず意見を言うべきです。それに意見を聞いた時も、意見を馬鹿にしないことが大事です。

## 6. 各訪問先

### (1) GCSP (ジュネーブ安全保障政策センター)

#### 基本情報

ジュネーブ安全保障政策センター (GCSP) は、核軍縮、平和教育、歴史と和解に焦点を当てたイベントを開催した。軍縮の重要性、世界の安全保障における外交対話の役割、軍縮努力における日本のユニークな立場などが主要な議論となった。講演者は、若者の参加の必要性、被爆者の体験の保存、平和を促進するために歴史から学ぶことの意義を強調した。イベントは、アドボカシー活動や世界平和への取り組みを継続するための行動への呼びかけで締めくくられた。

#### GCSPの方からの挨拶

ジュネーブ安全保障政策センターの建物はメゾン・ド・ラ・ペ (平和の家) と呼ばれています。そして私たちのセンターは、ジュネーブの3つのセンターのうちの1つです。私たちのセンター、GCSPに加えて、ジュネーブ国際人道要求センターもあります。当センターの目標は、国際的な平和と安全を促進することであり、主に3つの活動を通してそれを行っている。一つ目は幹部教育です。つまり、平和と安全保障の分野で活躍する人材を育成することです。また、平和と安全保障の分野で若者を育成し、安全保障政策の分野で外交官、軍事スタッフ、市民社会のアクターを育成しています。

私たちはまた、外交対話をすることで、平和と安全保障の促進にも努めています。つまり、各国の専門家や政府高官を集めて、安全保障政策の分野における重要なテーマについて話し合うのです。そして、平和と安全保障に貢献するための3つ目の活動は、シンクタンク活動です。私たちは意思決定者に戦略的なアドバイスを提供しています。また、ウェブサイトでもご覧いただけるような出版物も執筆しています。

また、私たちが平和と安全保障の促進に取り組んでいると言っても、難しい紛争や紛争を回避する方法、紛争から抜け出す方法について話すことが多いと思います。しかし、平和に焦点を当て、どうすれば紛争から抜け出せるか、どうすれば平和を達成できるか、なぜそれが重要なのかを考えるイベントは、まだ珍しいと思います。ですから、私たちはあなたがここにいらっしゃることをとても楽しみにしていました。

#### 質疑

##### GCSP (ジュネーブ安全保障政策センター) での質疑応答の内容

Q1: 人間の安全保障と国家の安全保障は補完関係にあるとよく言われます。安全保障政策の一環として核兵器が使われるのは矛盾しているように思えます。それについてどう思われますか?

→核抑止力は自国の防衛と自国民の保護に不可欠であると主張する国もおおくあります。

GCSPでは多くの人がこのテーマを取り上げていますが、さまざまな意見を持つ国がたくさんある為、みんなが合意に達するのはとても難しい。だからこそ、私はここで少しずつ会議を開いています。

Q2：私たちの活動を広めることが必要だと思っています。GCSPではイベント等の啓発活動をされていますが、どのように認知度を高め、平和教育を推進していますか？

→ GCSPでは軍縮と平和教育を推進するために核問題に関するイベントを頻繁に開催しています。実際、数週間前にはNATOの前事務次長をお招きし、軍備管理、主に米口間の軍備管理について対話する機会もあった。

Q3：現在、世界は第一次世界大戦と第二次世界大戦の戦間期と多くの類似点があり、日本だけでなく世界でも危機感が高まっていると思います。今、日本がすべきこと、そしてGCSPとしてまたは国連として何をすべきだと思いますか？

→ 核軍縮に関しては、日本はユニークな立場にあります。しかし同時に難しい立場にあります。なぜなら、現時点では、瞬国の中国や北朝鮮といった国々が核兵器を保有しており、日本に対して脅威を与えているためです。日本は教育面で主導的な役割を果たしていると思います。軍縮教育といえ、私はいつも日本を思い浮かべます。

Q4：将来どんな仕事をしたいですか？どんな未来を築きたいですか？どんなビジョンを持っていますか？（逆にGCSPの方から私達への質問）

→ 新潟選出の西脇あかりさん彼女は、飢餓や難民問題、また医療格差など、そういった問題が戦争や核兵器使用に繋がっていると思います。（特に彼女は、）私は、医療支援という側面から世界平和を実現したいです。

## （２）UNIDIR（国連軍縮研究所）

### UNIDIRの説明

- ・ 国連の中の独立した機関であり、軍縮や国際安全保障の問題について研究している。

### 主に扱っている分野

- ・ 従来の兵器と弾薬
- ・ 宇宙の安全保障
- ・ 大量破壊兵器（核、生物、化学）
- ・ 戦争地帯の人々
- ・ 中東アジアの平和構築

### 軍縮実現のため大切にしていること

- ・ 多様性と包括性の促進
- ・ 兵器保有国の情報の透明化と信頼構築
- ・ タイムラインの作成

## 周知活動

- ・多くの出版物
- ・無料の学習コースを開講
- ・作文の大会を主催

## 職員

- ・75%が40歳以下
- ・91%がバチェラー以上を卒業
- ・37ヶ国からの出身、20以上の言語が使用
- ・73人が正規雇用人数
- ・6割が女性

## 質疑

### Q 核兵器問題において行っている最も大切な研究は何か

A 核軍縮へのステップを培うこと。核兵器禁止条約など。また、犠牲者の支援。問題共通認識の強化

### Q 核の多国間協定においてみんなが納得していることはなんですか？

A 多角的な観点から核兵器問題の解決策を理解しようと努力すること。異なる視点を持つ人と議論を重ねるようにすること。また、専門家だけでなく一般の意見を広く聞くこと。

### Q 現役核弾頭数が増えている現在、軍縮のために市民ができることはなにか

A 国家情勢も安定せず、新しい技術が台頭してきている今、対処は非常に難しい。市民にできることは、世論の意識と危機感を高めることだ。異なる視点を持った人と理解し合うのが大切。被爆体験の伝承も大切な貢献だと思う。

### Q 最も慎重に使用するべきはどのようなタイプの武器ですか

A 化学兵器と生物兵器の削減はかなり成功しています。1つの武器に絞るべきではないと思いますが、UNIDIRは次のステップとして核兵器の削減に取り組むべきだと考えます。

## 7. 「第 27 代高校生平和大使」旅程(2024 年)

第 27 代高校生平和大使 (2024 年) 訪問先日程

240731 現在

月 日	曜	滞在地	時間	摘要	食事
8 月 18 日	日	福岡集合 福岡発 CA954 (3H 搭乗) 北京着【7H 待ち】	13:10 15:10 19:10	福岡国際空港集合 出国手続き 空路北京へ (大連経由 16:40 着/17:40 発) 乗り継ぎ手続き後	昼機
19 日	月	北京発 CA861 (11H) ジュネーブ着 ジュネーブ空港発	2:25 7:15 9:30  12:00 13:40 14:00 16:30 19:30	ジュネーブへ 機内泊 入国手続き 専用バス(バスのみ) ◇国連パス取得(国連入りロゲート) ◇国連周辺視察(ブローケンチェア、ジュノー顕彰碑) 【市内で昼食】 日本政府代表部着 ◆軍縮代表部表敬訪問 ~15:00 ◇国連周辺視察 ホテルチェックイン ミーティング・スピーチ練習【ホテル周辺で夕食】	夕機 朝※   昼   夕
20 日	火	ジュネーブ	7:00 7:45 10:00 12:00 14:00 18:00 20:00	【ホテルで朝食】 専用バス(バスのみ) 国連訪問 ◆軍縮会議傍聴(時間は不確定) ◆国連ツアー(60分(30分前集合))【国連館内で昼食】 ◆国連軍縮局訪問「高校生1万人署名」提出 【市内レストランで夕食】 夕食後ホテルへ	朝   ×  夕
21 日	水	ジュネーブ	7:00 9:00 10:00 12:00 14:30 15:00 18:00	【ホテルで朝食】 専用バス(バスのみ) ◆GCSP(ジュネーブ安全保障政策センター)~11:30 【ホテルのレストラン利用】 国連欧州本部入館 ◆UNIDIR(国連軍縮研究所)~16:30 ◆軍縮代表部主催レセプション 【兼夕食】	朝   昼   ×
22 日	木	ジュネーブ  ジュネーブ発 CA862 (10H)	7:00 9:00 9:30 13:20	【ホテルで朝食】 専用バス(ホテルから空港へ) ジュネーブ空港着 出国手続き ジュネーブ発空路北京へ 機内泊	朝  昼※ 夕機
23 日	金	北京着【3.5H】 北京発 CA953 (4H) 福岡着 福岡発 長崎駅前着	5:30 9:00 14:10 15:30 18:00	乗り継ぎ手続き 帰国の途へ(大連経由 10:20 着/11:20 発) 到着後、入国手続き 貸し切りバスで長崎へ セントヒル長崎泊	朝機 昼機   夕※
24 日	土	長崎	9:00 10:00 12:00	集合(会場準備:リハーサル) 記者会見・帰国報告会(セントヒル長崎) 解散	朝



## 7. 第 27 代高校生平和大使一行名簿

1	高佐 安里	ANRI TAKASA	北海道	藤女子高等学校	2 年
2	皆川 舞奈	MANA MINAGAWA	北海道	第一学院高等学校	3 年
3	佐藤 凜汰朗	RINTARO SATO	岩手	釜石高等学校	2 年
4	畠山 史子	FUMIKO HATAKEYAMA	岩手	一関第一高等学校	2 年
5	長澤 華咲	KANON NAGASAWA	福島	福島南高等学校	2 年
6	半谷 優亜	YUUA HANGAI	福島	磐城緑蔭高等学校	1 年
7	田口 七望	NANAMI TAGUCHI	茨城	勝田中等教育学校	1 (4) 年
8	永島 安紗	ASA EISHIMA	東京	日比谷高等学校	2 年
9	萩 有彩	ARISA HAGI	神奈川	フェリス女学院高等学校	2 年
10	西脇 あかり	AKARI NISHIWAKI	新潟	長岡高等学校	2 年
11	谷河 優那	YUNA YAGAWA	静岡	東海大静岡翔洋高等学校	3 年
12	稲中 瑞希	MIZUKI INANAKA	大阪	同志社香里高等学校	3 年
13	細谷 美優花	MIYUKA HOSOYA	兵庫	小林聖心女子学院高等学校	2 年
14	藤本 波音	HANON FUJIMOTO	奈良	畝傍高等学校	2 年
15	甲斐 なつき	KAI NATSUKI	広島	基町高等学校	2 年
16	佃 和佳奈	WAKANA TSUKUDA	広島	福山暁の星女子高等学校	2 年
17	沖本 晃朔	KOSAKU OKIMOTO	広島	AICJ 高等学校	2 年
18	杉森 世都	SETO SUGIMORI	福岡	筑紫丘高等学校	3 年
19	吉田 光里	MISATO YOSHIDA	佐賀	武雄高等学校	2 年
20	平野 陽路	HARURO HIRANO	熊本	真和高等学校	2 年
21	花崎 太智	TAICHI HANAZAKI	大分	宇佐高等学校	2 年
22	大原 悠佳	YUKA OHARA	長崎	長崎西高等学校	2 年
23	津田 凜	RIN TSUDA	長崎	長崎東高等学校	2 年
24	小早川 健	KEN KOBAYAKAWA	広島	引率者・団長	
25	青木 栄	SAKAE AOKI	熊本	引率者・副団長・記録	
26	千葉 伸武	NOBUTAKE CHIBA	岩手	引率者・事務局	
27	仁木 史絵	FUMIE NIKI	大分	引率者 事務局補助	
28	山本 圭介	KEISUKE YAMAMOTO	東京	引率者・全体掌握・記録	
29	藤本 絵梨華	ERIKA FUJIMOTO	長崎	引率者・会計・体調管理	
30	梅田 侑希	YUKI UMEDA	広島	引率者・全体掌握・記録	



## 2024・第27代高校生平和大使帰国報告 記録集

編集担当 西脇あかり 沖本晃朔 半谷 優亜

発行日 2024年10月20日

発行責任 高校生平和大使派遣委員会

発行 高校生平和大使派遣委員会  
長崎県長崎市大黒町 4-16 2F  
電話 095 - 822 - 5253